
とあるIFの幻想殺し

NNY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるIFの幻想殺し

【コード】

N3996U

【作者名】

NNY

【あらすじ】

絶対能力者《レベル6》シフト実験で
アクセラレータ
一方通行に勝利し、

絶対能力者《レベル6》となった

上条（悪）「この右手で、殺してやるだけさ」のその後の話・・・

プロローグ（前書き）

いまあ、まず皆さん警告をすると・・・
上条（悪）の二次創作なので、嫌だという人は戻ることをオススメ
します。

それでもいいという方のみどうぞ。

あと文才は皆無ですのであしからずw

ジヨジ 風になるのを防ぐために解説は最小限にし、
残りは解説編で解説させていただきます。

プロローグ

ここは東京西部に位置する完全独立教育研究機関『学園都市』。東京都のほか神奈川県・

埼玉県・山梨県に跨る円形の都市。総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、

総人口は約230万人（その8割は学生）。

基本的に学生は、それぞれが通う学校で「時間割り（カリキュラム）」をはじめとする、宿題・試験・補習などの学習を行い、夏休みなどの長期休暇、部活動、放課後の自由時間などを過ごすといった一般的なライフサイクルを送っている。都市内では、それぞれレベルが『7つ』あり、

生徒の6割を占めている測定不能や効果の薄い力を持つ無能力者《レベル0》

スプーンを曲げる程度の日常では役に立たない力を持つ低能力者《レベル1》

低能力者（レベル1）とほとんど変わらない程度の力を持つ異能力者《レベル2》

日常生活において活用可能で、便利と感じられる力を持つ強能力者《レベル3》

軍隊において戦術的価値を得られる程の力を持つ大能力者《レベル4》

学園都市に7人しか存在しない単独で軍隊と戦える程の力を持つ超能力者《レベル5》

そして、いまだ存在しないと云われている学園都市に1人しかいない
絶対能力者《レベル6》

これは、そのとある絶対能力者《レベル6》、上条当麻の平行世界^{パラレルストーリー}
である。

プロローグ（後書き）

どうだったでしょうか？

とりあえず、しばらく様子を見て叩かれなかったら
続けたいと思います。

居候（前書き）

まず軽くキャラ紹介的なものを書かせていただきます。

居候

「はあ・・・」

学生が帰宅するには遅い時間帯に一人の少年がため息をつきながら歩いてきた。
どう見ても小学生にしか見えない担任の教師の補習を受けていたようだ。

つい最近まで学校に通っていなかった少年だが、居候のシスターに学校に行くように言われて
また学校に通い始めた。

名前は上条当麻。ここ学園都市唯一の絶対能力者《レベル6》であり、唯一の多重能力者^{デュアルスキル}。

8月20日、彼は研究者から絶対能力者《レベル6》シフト実験に誘われ、一方通行^{アクセラレータ}と

対峙し、見事これを倒して絶対能力者《レベル6》となった。

余計な騒ぎを防ぐためと、スキルアウトから守るためにバンクには無能力者《レベル0》として登録されている。

しかし、学園都市の無能力者の間では噂レベルで広まっており、実験関係者などの一部の人間には知られている。

「ただいまー」

「おかえりー（とミサカはご主人様に返事をします）」

「なんでお前がいるんだ？」

「「？」「」

「『?』じゃねえよ！俺が間違っているみてえじゃねえか！！」

「今日からここに居候させていただくミサカ上条号です。とミサカは自己紹介をします。」

この妙な語尾をつける中学生くらいの少女は以前研究者が上条を実験に誘う際に彼を試すように作られた

検体番号20002号で、本来彼に殺害されるはずであったが、上条に生かされ、

このまま生きても仕方がないので上条号として生きていくことにした。

「家族が増えるんだよ！やったねクールビューティ！」

「やったねインちゃん！とミサカは某鬱漫画風に返します」

「おいやめろ」

「それと、9月からミサカはあなたの高校に転入します。とミサカはご主人様に報告します。」

「高校に転入って・・・おまえ中学生だろうが」

「そつちの高校には小萌先生がいるからミサカはただ年齢を偽るだけで入れます。とミサカは作戦を説明します。」

「勝手にしろ・・・」

「それと、あなたにお願いがあるのですが。とミサカは頼もつとし

ます。」

「なんだ？」

「ミサカに名前をつけてほしいのですがミサカはお願いします。」

「名前？」

「はい。ミサカがお姉さま《オリジナル》のクローンだということ
がバレては困るので。」

とミサカは説明します。」

「そうだな、そうなら面倒だ。それじゃあ、『あああああ
でどうだ？』」

「ダメですよ。そんな名前じゃ戦闘のときにテンション下がるで
しょう？」

とミサカは魔王と戦うことを想定します。」

「魔王って何だよ・・・いねえよそんな奴・・・わかったよ、それ
じゃあ『上条 美静』でどうだ？」

ビリビリと正反対な正確だし、インなんとかも『クールビューティ』
って呼んでいるしな」

「インなんとかじゃなくて、インデックス！！何回も言わせないで
ほしいかも！！」

「いいじゃねえか！お前の名前覚えにくいんだよ！」

「それはとうまが馬鹿なだけなんだよ・・・」

この純白の修道服を着ている十代ちょっとの少女は以前上条に助けられている。

脳内に十万三千冊の魔導書が詰め込まれていて、そのためにイギリス清教によって『首輪』という

一年ごとに記憶を消去しないと死んでしまう術式をかけられていた。

「『上条 美静』ですか・・・いいですねそれ。とミサク、美静はあなたの名づけた名前に満足します。」

「そうか。よし！飯にするか！」

「じっはんー じっはんー」

「今日の晩御飯はなんですか？と美静はわくわくしながら尋ねます。

「そーめん」

「「えー…（と美静は俺の期待を返せと言わんばかりにがっかりします。）」「

「しょうがねえだろ！！この間福引で嫌がらせのようにもらったんだから！

ちなみにあと1か月分はあるから覚悟しとけよ！」

「「そんなんー！」」

居候（後書き）

書いてる途中で気がついたんですけど、

私原作もっていないんですww

だからアニメのようにはしよることもあります。

ごめんなさい

ちなみに一応原作は読みました。（数冊だけ）

解説編その1（前書き）

とりあえず本編で書かれることがなかった説明を解説していきます。

解説編その1

この話のテーマは『運命の修正』元ネタのラストで『こうして彼らは、正しい歴史の中に還って行く。』

とあるが、それでも完全に『正しい歴史』に戻っているわけではない、時間をかけて

ゆっくり修復して『正しい歴史』をたどることができるくらいに歪んだ運命を

修復していくその過程を描いている。

上条当麻

物語のメイン主人公

本来幼稚園を卒園後学園都市に送られることで『正しい歴史』となるが、

この物語では上条刀夜がそうしなかったために運命が変わってしまい結果、上条の不幸に巻き込まれた両親を死なせてしまい、性格が歪んでしまう。

他の人を自分の不幸に巻き込こまないように鍛錬しており、聖人を相手にしても体力がもてば勝つことができる。

能力は二つあり、原作と同じ幻想殺し《イマジンプレイカー》（冥土帰し命名）と

原作でもそれらしいのが存在するが原作よりも性能が優れている神の導き《アドバイス》（インデックスと美静命名）

幻想殺し《イマジンプレイカー》の方は原作と違い、

上条はすでに異能の力を掴んでそらすといった技術を習得している。神の導き《アドバイス》は厳密に言うところと能力ではなく、右手の出す不幸の影響で覚醒した第六感であり、

相手の悪意や敵意をもった攻撃などを予知することができる。

ただし、ギャグなどで出てくる攻撃は予知できない。(インなんかの噛み付き、吹寄の頭突、美琴の電撃など)

インデックス

上条家の居候一号

元ネタで上条に助け出されるが、竜王の息吹ドラゴンブレスによつて

重傷を負ってしまい、冥土帰し《へヴンキャンセラー》によつて修復されるが、

その後遺症として杖を突いている。上条の優しさに気づいており、上条を慕っている。

上条の居候になることは、スタイルは反対したが上の命令で居候になった。

上条美静

上条家の居候(二万)二号

レベル2の欠陥電気レイオノイスとしてバンクに登録されている。

9月に上条の義妹として上条の通っている学校に通うことになった。オリジナルより若干髪が長く、それを後ろで束ねている。

原作で言う10032号のポジションだが、17600号スネーク4割、20000号(変態)1割混じっている。

好物はカロリーメイトと上条のカロリーmおつと誰か来たようだ

御坂美琴

運命が変わってしまった上条と接触して運命が変わってしまった中で一番変わらなかった。

原作と違うところは、上条に「勝負しなさい」ではなく、「今日こそ殺す」

などの敵意オポジットを向けている(後にツンデレ)。他はほとんど変わらない。

一方通行

物語の準主人公

例の実験で上条と対峙したことで何かに気づき、黒翼が発現する。実験で上条を倒し、経験と精神の成長を経ることで絶対能力者《レベル6》

になることができたが、上条に敗北したために絶対能力者にはなれなかった。

使おうと思えば自分から黒翼を発動できるが、制御がきかずリスクも高いので使えない、

原作同様、天井によって脳にダメージを負うが、インデックスが杖をつく役を担うことで

ここでは杖が必要なくなる。

白井黒子

上条から守るために美琴から教えられ、大能力者《レベル4》で唯一上条が絶対能力者《レベル6》であることを知っている。

人を見る目があるため、原作以上に上条とは険悪になっているわけではない。

解説編その1（後書き）

とまあ、大体こんな感じですよ。
後で設定を追加するかもしれません。

塾生（前書き）

本当は原作第二巻を買って読んでから書こうと思ったんですけど、それは何時になるのかわからないのでとりあえず原作がなくてもア二メを見ればなんとかなるところまで書きます。

塾生

「不幸だ・・・」

「まさか参考書が3600円とは思わなかった・・・えっ！マジ3600円？」

「そんな何回も言わないでくれる？とうま・・・
3600円があつたら何が買える？とうま」

「うま 棒が360本、缶ジュースが30本、お前の食費の4分の
一とか・・・」

「もういいよ・・・聞いた私が間違つてたんだよ・・・」

「そもそもあなたが日頃から勉強していれば、こんなことにはなら
なかつたのでは？」

と美静はだらしが無いあなたに呆れます。

「わかつてるよ！だけど、最近まで学校なんて通つてなかつたから
仕方ないだろ！？」

通つたのは最初の三日だけ・・・ん？インデックス？」

「あそこでは？」

「・・・」

「なにを見てんだ？つて・・・3600円分のアイスなんて
食えないだろフツー」

「とうま！私は暑いなんて一言も言っ「わかったよ、アイスが食いたきゃ素直に言えばいいじゃん？」」

「とうま！この服は主の御加護を視覚化した物であって」

（まったく、こんな暑っ苦しい中に暑っ苦しい格好したシスターに暑っ苦しい説教とは・・・）

「とうまー！ちゃんと聞いている！？ちなみに私は「じゃあ、暑いからアイスでも食っていいこうぜ」」

「とうまー！ちゃんと聞いてた？！私は修行中の身だから嗜好品の摂取は禁じられ「じゃあ、食わなきゃいいだろ？」」

「うー！でも！修行中の身だからダメだけど、あくまで修行中の身だから一人前の振る舞いはできないからね！

したがって、急に口の中にアイスが入ってくることもなきにしもあらずなんだよ　とうま！」

「かみやーん！」「ん？」

「なっかなかに素敵な交渉中なとこなんやけどなー」

「ちなみにその娘だれぜよ？」

「」

「あれーかみちゃん？どうしたん？まさか記憶喪失になったとかじゃ？」

「なわけねーだろーが」

「ジョーダンやがなー！記憶喪失なんてー不思議系電波少女の特権やでーかみちゃんみたいな男がなったら気色悪いやろー？やっぱほらーそこのかみちゃんの隣にいる中学生の娘みたいな娘じゃないとー」

「私は不思議系電波少女ではなく、妹系DM少女です。と美静は訂正します。」

「何ー！？かみちゃん！最初っから言ってくればそんな感じの本貸してあげたのにー！」

「ぶっ殺すぞテメー！っーかお前も何まじめに変な訂正してんだよ！何だよ！？妹系DM少女って！？」

「やだ、あなたっいたら・・・昨日あんなに攻めたのに・・・まだ足りないんですか？」

「何！かみちゃん！まさか君はあーんなことや、こーんなことをこの娘にやつたんかー！」

「俺にそんな趣味はねー！！そんなことより、土御門！！てめー二度と俺の前に現れるなっついていったろーが！！」

「あれー？そんなこと言っただかにゃー？俺は馬鹿で嘘つきだからわからないぜよー」

「ったく・・・」

「で？そのちびっ娘は誰ぜよ？」

「あ！もしかして女装？ぺったんこすぎるしー」

「ぶちっ！」

「いや、確かにこいつは幼児体型だけどれっきとした女だ」

ぶちぶちっ！！

「とーま？」

「あっ」

「とーま？私に何か言うことは？」

「」

「アイス屋にて」

お客様各位

誠に申し訳ありませんが、

店内改装のためしばらく休業とさせていただきます。

ビキビキビキ！！！！

「マクロナルドハンバーガーにて」

「シェイク シェイク シェイクが三つ」

「悪いにゃーかみゃーん！！」

「ゴチになりまー!」

(なんで・・・?)

「いったい何があつたらこんなことに?と美静は笑いをこらえながら哀れみます。」

「うるせー」

「とうま!とうま!こっちこっち!」

「おー、よく開いて・・・ウォ!??」

そこには、巫女姿の少女がテーブルに突っ伏していた。

「く。食い倒れた」

(うわっ・・・いかにも怪しい・・・ぜってー不幸がまってる!つか、今頃ナレーター出てきたよ!)

「かみやーん」

「ん?」

「ジャンケン!」

「」「」「ほい!」

「」「おっしやー」「おっしやーじゃねえよ!...何勝手に決めてんだよ

「！」

「頼んだでーかみやーん」

「わかった、わかったからその気色悪い目はやめろ」

「で？食い倒れたって何？」

「ハンバーガーを食べ過ぎて。うぶ。気持ち悪い」

「何でそんなに食ったんだよ」

「ヤケ食い・・・帰りの電車賃600円・・・」

「そんで？」

「全財産500円」

「why?」

「買いすぎ。無計画。」

「誰かに借りればいいじゃん」

「おおっそれはいい案」

「おい！こっち見んな！期待の眼差しを向けんな！」

「あと100円」

「無理！貸せないね！」

「倍返しでどう？」

「十倍！」

「……わかった。十倍返しで」

「なんとまあ哀れな……と美静は軽蔑の眼差しを向けます。」

「プライドなんて考えてる余裕なんてないくらい我が家の家計は厳しいからな……」

「「苦労してるんだな」」

「ところであなたは誰？巫女さん？」

「私。巫女さんじゃない。魔法使い」

「魔法使いいいい！！？曖昧なこといつてないで、専門と、学派と、魔法名と結社名を^{オウガイ}な^らるんだよ！お馬鹿！

大体！そんな格好するんだったら、せめて東洋系の占星術師くらいのホラを吹かなきゃダメなんだよ！」

「じゃ。それで」

「んぎいいいぎぎぎ……！」

「そいつが巫女さんじゃなくて魔法使いなのはわかったからちょっと黙ってる」

「とーま！なんか私のときと比べて優しいんだよ！」

「どこが？」

「道端で行き倒れている私をスルーした拳句に服までぬがせて！」

「へっ？！それってどういうことなんや！？かみや・・・ん？」

いつの間にか周りに怪しげな大人達がいた

「なんだこいつら？」

「塾の先生」

「先生？」

「それじゃ・・・」

少女はそう言うとその大人達と一緒に帰っていった

「なんで塾の先生が熟生の迎えに来てんねんなー」

「いかにも怪しいですね・・・私が行って調査してきましょつか？」

「いい、ほっとけ」

~~~~~

「はあ・・・」

「どうかした？」

「お前が服脱がされたなんて言うから・・・一緒に住んでることが  
ばれたらどんなに面倒なことか・・・」

「だってとうまが・・・」

(にしても、土御門の野郎・・・ぜってーインデックスのこと知っ  
てるだろ・・・)

「とーまー！とーまー！見て見てー！ねー！」

「にゃーにゃー」

「捨て猫・・・のようだが？」

「とーま」却下

「とうま、私はまだ何も「飼うのはだめ！却下！」

「むー！どうしてスフィックスはダメなの？」

「学生寮ペット禁止、スフィックスを・・・って早速名前つけんな  
！愛着沸いちゃうだろうが！」

「やーだー！！飼う飼う飼う飼う飼う「ダメだ！！！」

「にゃー」

「ほら！驚いて逃げちまったろうが！」

「とーまのせいでしょ！大体この国は猫に対してひどいことを・・・  
魔力の流れを感じる・・・」

インデックスがなにやらぶつぶつ言っている

「とつまは先に帰ってて！私は調べたいことがあるから！」

「帰っててって言われてもなあ・・・ん？おい、どうした美静？」

「ルーンだよルーン、人払いのね・・・久しぶりだね、上条当麻・・・」

## 塾生（後書き）

いやーほとんどアニメの台詞でしたねー（笑）

いや、さすがに別ルートで出会えなんて無理ですw

ちなみにこの回は三沢塾へ進入するまでは原作なしで書いていこうと思います。

## 吸血鬼（前書き）

ちよつとペースが遅すぎたので投稿します。

それと先に言っておくと、御使墮とし《エンゼルフォール》の回は上条さんの両親が死んでしまい話にすらないので書きません。ただ、私は火野神作が嫌いなので

彼を殺します。詳細は解説編で

## 吸血鬼

「久しぶりだね、上条当麻……」

(え〜っと、誰だっけ？こいつ……)

普通なら魔術師など変わった者、ましては殺し合ったことのある相手は印象に残るはずだが、

上条の場合はそんな変わったことが日常茶飯事なためにステイルのことはすっかり忘れていた

「ふん。挨拶もなしか……まあいい、やっぱり僕達はこうであるべきだ

たった一度の共闘で友達と思ってもらっちゃ困る、しかも殺されかけたんだからね……」

(あ〜。あんときのヤムチャ魔術師か……)

「禁書目録《あの娘》なら心配するな。そこら辺にルーンを刻んだから

それを感じ取って調べにいったんだろう」

「ふーん。で？何の用だ？」

「Huh、Don't smile with everything. Are you ready the die?」

《いちいち笑うな。ぶっ殺すぞ》

ステイルはそういうと右手からまるでガソリンを噴出させてそれに

火をつけたような炎剣をだし  
それを一切の躊躇もなく上条へ炎剣を振り下ろした

「おっと！」

上条はまるで来るのがわかっていたかのように右手で炎剣を掴み、  
右手が炎剣に触れると同時に炎剣はまるで岩をガラス製の剣で斬り  
つけた時のように  
ガラスが割れるような音とともに粉々になった

「いきなり炎投げつけてくるたあ御挨拶だな」

「そうそう！その顔だよ！やっぱり？君”と？僕”の関係はこうで  
なくてはね！  
だから言っただろう？たった一度の共闘で日和ってもらっては困る  
んだよってね」

二人とも笑みを浮かべていた。友人同士の楽しい会話の時の笑顔で  
もなく、  
ドラマで殴りあった学生同士の笑顔でもないお互いを見下しあって  
いる笑みだ

「で？何をするつもりだ？殺し合いなら大賛成だ」

「そうしたいのは山々だが違う、内緒話だよ」

ステイルは懐から封筒を取り出した

会議などで重要な書類をいれるような封筒だ

ステイルはそれを弾くように飛ばすと封筒は上条の手元へゆっくり  
収まった



「受け取るんだ」《D e b o》

ステイルがそう呟くと封筒の封が裂け、  
必要な書類だけが封筒から飛び出して上条の前で  
ふわふわ浮かんだ

「三沢塾って知ってるかい？」

「あの宗教じみた塾か？そこに何の用だ？」

「そこに女の子が監禁されててね。それを僕が助け出す役がある」

「うわぁ・・・ついにやつちゃったか・・・」

「君の言う通り、いまの『三沢塾』は科学を軸にした真興宗教だ。  
教えについては知らないし、正直知ったことじゃない。もう潰れた  
ようなものだしね」

「？」

「乗っ取られたのさ。小悪党ばかりが集うインチキ宗教が  
本物の魔術師 いや、錬金術師にね」

ステイルは「ざまあみろ」とでも言つかのように鼻で笑った

「だが、重要なのはその錬金術師が『三沢塾』を乗っ取った理由さ  
一つ目は簡単だ、『三沢塾』って要塞を再利用しようとしたんだらう  
けどね、」

「錬金術師のそもそもの目的は、その塾に監禁されている吸血殺し《ディーブブラッド》なんだ  
元は、塾で巫女としての役割のために監禁してたらしいけど。」

「かねてから“あれ”を狙っていたのに“奴ら”が派手に動いたせいで

吸血殺し《あれ》を学園都市から持ち出す計画がパーになった」

「つまり、あの『変人達』から手柄を奪い返したと？」

「そうだ。奴からしてみれば・・・いや吸血殺し《あれ》の獲得は全ての魔術師の悲願だね」

「どづいつことだ？」

「あれは『ある生き物』を殺す能力さ。それだけじゃなく、実在するかどうかもわからない『ある生き物』を生け捕りにできるかもしれない」

ステイルは少し間を空けていった

「吸血鬼のことだよ」

「吸血鬼？」

……  
……  
……

『貧弱ウ！貧弱ウ！』

『ロードローラーだツ!!』

『俺は人間をやめるぞオーーーーー!!』

…

…

…

「違う！そっちじゃない！貴様絶対まともな想像してないだろ!？」

「人の心読むなよ・・・でー、その吸血鬼が本当にいるのか？」

「魔術師ほくたちでさえわからない・・・吸血殺し《ディープブラッド》とは、

すわわち吸血鬼を殺す力だ。ならばまず吸血鬼と出会わなければならぬ・・・そのためにはまず吸血鬼と出会わなければならない。そのために吸血殺し《そのこ》を抑えておいたほうがいい」

「それで結局何なんだ？何が言いたいんだ？」

「せっかちな奴だ・・・つまり僕達はこれから吸血殺し《ディープブラッド》を奪還するために

『三沢塾』へ特攻しないとまずい状況にある」

「ふーん。がんばればいいじゃん」

「何他人事みたいに言っているんだい？君も一緒に来るんだよ。

それと書類はちゃんと暗記しておけよ一度目を通したら燃えるようになっている」

「はあ！？何で俺がためーら魔術師のお手伝いをしなきゃいけないんだよ！？」

「ちなみに拒否権はないよ？拒否しようものなら君の側にいる禁書インデックスのツクスを回収させてもらう」

「いや、むしろ助かるな。食費が浮くし」

「はあ・・・なんで君みたいな奴にまかせちゃったんだろう・・・仕方ない。そういえば君、女の子にお金を貸してたけど、その娘の住所は知ってるの？」

「あっ！！」

「その娘は『三沢塾』に住んでいる。正確には監禁されているが正しいけどね」

「ってことは、あの女が・・・」

「そう。吸血殺し《ディープリッド》だ」

## 吸血鬼（後書き）

やっぱり小説を元に書くと説明が長すぎていけないですね。  
無駄に長くなる上に読む気がしなくなるしから

ちよつとばかり台詞を変えるなどして遊びます（笑）

こんな話もあることがありますが、よければこれからも  
よろしく願います。

## 神父（前書き）

すいませんちょっとネタが思いつかないもんで（笑）

基本的に原作の場面を悪条さんならこうするだろうと

考えて書くつもりですが、それだけだとつまらないかもしれないので  
たまに原作から少し離れたことも書きます。

## 神父

「「「ただいまー」」」

「と言いたいところだが。これから上条さんは超ハイテク施設行ってつくつからー」

「私も行「やめとけやめとけ。お前にとってわけわからない物ばかりだからな！何か壊されちゃさすがの上条さんもかなわない！じゃ、そーゆーことで二人とも留守番頼むわ。」

晩飯は冷蔵庫に入っているからチンして食べてくれ。あと、冷蔵庫で涼むなよ」

「う、うん」

「時にインなんとか。お前の腹の辺りが膨れているのは何故でせう」？」

「それは、先程二人で“軽く”食事をとったからです。と美静はわざとらしい演技をします。」

「わざとらしい演技って・・・お前達何か隠してんだろ？言っちゃまいなよ、怒らないから」

「ち、違うよ。主に誓ってシスターが嘘を吐くはずが 『みー』

インデックスがいい終わる瞬間、子猫の声が聞こえてきた。

「おい！ーやっぱりさつきのスフィンクス拾ってきたんだな！？出せっ！さつきと出せっ！！！」

「まあまあ、いいじゃないですかあなた猫くらい。と美静は怒る夫を宥めます。」

「いいわけないだろ！？ただでさえ今月きつつういんだから！あと、いつからてめえは俺の妻になったんだよ！？」

「あらあら、あなたもう忘れたんですか？もう三年になるじゃないですか」

「ちよっととうま！どういうことなの！？三年前ってことは小学生に手を出したの！？」

「出してねえよ！数日前知り合ったばっかだよ！あと、話を戻すが。スフィンクスはダメだ！」

「ばかとうま！この猫は絶対飼うって決めたんだもん！うええええん！！！」

「あーらーらーこーらーらー泣ーかしたー泣ーかしたー」

「ぐぬぬっ！わかった！わかったから黙れ！！飼うよ！飼えばいいんだろ！？」

（このままじゃバイトする羽目になって勉強どころじゃなくなりそうだ・・・）

十数日後、上条が思ったことが現実になることを上条はまだ知らない



い・・・

~~~~~

「何やってんだ？」

「ん？見てのとおりルーンを張っているんだよ？」

「何のため？」

「僕達が『三沢塾』へ借金返済、もとい特攻している間に他の魔術師達から襲撃を受けたらいけないからね・・・」

「魔女狩りの王を置いていけば逃げ出す時間は稼げるだろ・・・まったく、世話の焼ける・・・」

それを聞いた上条はニヤニヤしていた。

“あること” 気づいたらしく「なるほどなるほど・・・」と呟いている。

「ははーん？さては、お前インデックスのこと好きなんだろ？」

ステイルは急に赤くなりだして叫んだ。

「なっ何を急にっ！！あの娘はただ保護する対称なだけで・・・別に恋愛感情とかは・・・」

ステイルが必死で弁解するが、それをさえぎるように上条は先へ進むように言った。

「はいはい、お前がインデックスのことをすきなのはわかったからさっさと行くぞー」

だが、顔は相変わらずニヤニヤしているまんまだ・・・

~~~~~

「それじゃあ、『敵地』に乗り込む前に『敵』のことについて触れておこうか」

「まず敵の名前だが・・・名前はアウレオルスIIイザードだ」

「アウレオルス・・・」

「なんだい？驚いているのかい？だが、あれは末裔だ。伝説に聞くほどでもない・・・」

「アウレオルスねえ・・・」

：

・・・

／＼・・・

・・・

「フィオナーツ！！！！！！」

「アゾート！！」

・・・

……  
……  
……

「いや！違う！貴様またもやまともな想像してないだろ！？それは、本物だ！！」

いや……ゲームだから偽者だけど……」

「だから人の心読むなよ……お前もDEMENTやったことあるのか？」

「そんなことはどうだっていい。パラケルススという人物は知っているはずだ」

「いや、知らん」

上条は即答した

「即答か……世界で一、二を争う錬金術師さ……」

「ってことは強いのか？」

「本人は大したことはないが……」

吸血殺し《デーブブラッド》を押さえつけるだけの『何か』があることは確かだ。最悪、『ある生き物』を飼いならしている可能性もある……

それと、奴の力についてだが……」

「君は頭の中で描いたものを現実世界に引っ張り出せたらどうなると思う？」

『世界の全て』を己の手足のように使えたとするならば……」

「そんなことができる奴とは戦いたくねえな……『世界の全て』を相手なんて……」

俺の幻想殺し《イマジンプレイカー》と神の導き《アドバイス》をフル活用したところで勝てるかどうかもわからない  
もしかして、そいつの能力ってそれか？なら、俺は降りるぜ。まだ、死ぬ気はないしな」

「まあ、人の話は最後まで聞けド素人め。だから、大丈夫だと言っただけだ。」

……

錬金術はまだ完成されていない学問なんだ

例えば、夜空に浮かぶ星を一つ一つ語ってみると言われたらそれは何年かかると思う？きっと、百年や二百年じゃできないはずだ」

「つまり、呪文自体は完成しているが、それを詠唱し尽くすには人間の寿命じゃあまりにも短すぎる

誰もが思いつくような……例えば、呪文から無駄な部分を省いたり、祖父母から親へ、親から子へ、

子から孫へと代々受け継ぐ形で詠唱するなど……だがそれをしないのは成功例がないからだな？」

「気持ち悪いくらいに物解りがいいじゃないか。そうだ。だが、逆に寿命をもたない『奴ら』なら

たとえ長すぎる呪文だって詠唱できる。『奴ら』はそういう所も脅威なのさ……」

「まあ、今のアウレオルスはそのままで脅威じゃない。精々、『三沢

塾』《要塞》にトラップを仕掛けて  
侵入者を拒むのが精一杯さ」

「何だ？お前そのイザードって奴知ってんのか？」

「まあ、同じ協会の人間だからね。こっちはイギリス清教で、向こ  
うはローマ正教  
顔見知りだが友達じゃない」

「必要悪の教会《ぼくたち》が異例中の異例なら向こうは特  
例中の特例、カンセラルリウス隠秘記録官だ」

「簡単に言えば教会のために」

「あーあー、お前の長つたらしい説明はどうでもいいから  
そんなことより、見えてきたぜ。お姫様の捕らえられているお城が  
よお・・・」

上条が示した先には夕日に照らされるビルが待ち構えていた・・・

~~~~~

「しかしまあ、なんとも不規則だな。このビル」

塾を見る限り何の変哲もない進学予備校だ。不気味な宗教団体なん
てわからないだろう。

出入りする生徒達を見ても何の違和感もない。ただの進学予備校だ。

「で？どっから行くんだ？まさか堂々と進入なんて特攻とは聞いた

がマジでするなんて 　　ってマジで行くのかよ
「

「なんだ？他に得策があるとでも？」

「いや、ないけどさ・・・お前なら気配をそのわけのわかんない
魔術とやらで消せんじゃねえのか？」

「いや、たとえば僕達が透明人間になろうが『僕』が魔術を使った痕
跡は隠せないからね」

「ハリー・ポッターでいう17歳未満の魔法使いが魔法を使ったば
れるのと同じですか？」

「そんな、魔術に対する冒読のような小説は映画は読んだり見たり
しないからわからないが。まあ、そんなとこだね」

ステイルがなにやら不機嫌そうに答えた。

「つまり、お前は発信機つてことかな？」

「君の場合、魔術をキレイに拭き取っちゃうから僕よりバレやすい
けれどね。」

僕のほうは魔術さえ使わなければバレはしない」

「っつーことはアレか？俺達は発信機ぶら下げながら敵の本拠地
におつ邪魔しまーす！すんのか？」

「そのために君を呼んだんだろう。死にたくなきゃ、死ぬ気で右手
を盾に突き進むんだ」

「それって無策の代償が俺にかかっただけじゃん」

「生憎、魔女狩りの王は君ん家イノケンティウスであの娘と共にお留守番だからね。僕の

武器はこの炎剣だけさ。さて、そろそろ行こう」

そう言ってステイルは上条を盾にするように押しながら自動ドアを抜けた。

入り口をぐり抜けて見たのものは、ごく普通のロビーだった。

（つか、俺ならまだしも、こいつが怪しまれないってどういこうこと・・・）

二人はまったく周囲の注目を集めてはいなかった。部外者だとしても皆入塾者だと思っからだ。

だが、長身で香水くさくて煙草を吸っている神父がいたら絶対注目を集めるだろう。というか怪しまれるだろう。

しかし、周りはまるで二人がそこにいて当然な感じ、否。“いないかのように”歩いている。

「あれは・・・？」

皆普通に歩いている。だからこそ、ある一点が浮かび上がる。

エレベータ付近の柱になにやらロボットのようなのが寄りかかっている。

少し近寄って見てみると西洋の全身鎧を戦闘機っぽくしたようなロボットだ。

だが、そのロボットは機能はしていないようだ。手足はまるで針金を金槌で叩いたように薄く、折れている。

そして、関節からは黒いオイルのようなものが流れていた。

そして、何よりも不気味なのは周りが“これ”に気づいていないことだ。

こんなものが転がっていたら誰もが騒ぎ立てるはずだ。しかし、周りは誰もロボットに

目を向けようともし、話題にしようともしていない。皆見たくないわけでも、目をそらしたいわけでもなく、それが当たり前のように生活している。

「ん？それがどうかしたのかい？まさか、ビビったわけでもないよね？君なら見慣れているはずだ」

「ああ、掃除ロボットぐらいなら見かけるがこんなロボットは学園都市には

「何をいつてるんだい？それは『ただの死体』だよ」

「………は？」

上条はもう一度そこに崩れ落ちた“それ”を確認した。

金槌で打った針金のように薄く、折れている。

その関節からは黒いオイルのようなもの……ではなく、『血』流れている。

臭いもオイルなどのきつい臭い……ではなく、『死体の臭い』だ。間違いない。あれはロボットではなく鎧を着た『人間の死体』なのだ。

いや、『死体』ではない。上条がもう一度調べてみるとわずかに兜の隙間から

呼吸の音が聴こえた。

「おい、救急車呼ばなくていいのか？こいつまだ生きているけど」

近くにいた生徒に尋ねたが、まるで聴こえてないかのように無視された。

「……………そげぶ！！」

不思議に思い、その生徒を殴ってみるがまったく反応がなかった。いや、むしろその生徒をさわれなかった。拳を肌食い込ませるとすらなかった。

「ここはコインの表と裏だ。何も知らない表の生徒達は侵入者に気づくこともないし、

侵入者が表の住人に干渉することもできない」

そういうとステイルは煙草をビルの柱に押し付けた。だが、ビルの柱には煤一つもつかなかった。

「まずいね。このビル自体がコインの表のらしい。もう、僕達は自分の力でドアを開けられないし、出入り口の扉も同じく開けられない。閉じ込められたね」

「ところで、こいつどうする？生きてるっちゃあ生きてるが、肺は肋骨に突き破られて、内臓はほぼ潰れて、動脈もぐっちゃぐちゃだ。どうする、止めを刺してやるのが優しさか？」

上条は足を上げ、鎧の顔面辺りを蹴ろうとしている。壁に押し付けて頭を“鎧ごと”潰すつもりのようなのだ。

「そうだね。だが、死人を送る役目は神父ボクの役目だ。君のじゃない。

「

ステイルはそういうと死にかけの死体の前に屈みこみ、英語で何かを言った。
すると、その死にかけの死体はよろよろと右手を差し出し、英語で何かを言った。
そして、その右手は床を打った。ゴンツという音がロビーに鳴り響いた。

「

行くよ

」

そういつたステイルは何か怒っていた、アウレオルスにでも、『三沢塾』にでもなく。

「戦う理由が増えた……
それと……上条当麻……」

「ん？」

「僕は……君を……」

「許さない」

神父（後書き）

上条さんマジ悪条さん

というわけでやっと上条（悪）ができました。

いや、でも少し違うかな？ やっぱもっときつくしたほうが悪条さんっぽくなるだろうか？

そっくりさん〈ダミー〉

「あー、疲れる」

「それはそうだろ。建物に干渉できないんだから足に来る
衝撃は通常以上に強い。だから、筋肉に通常以上の負担がかかる

「なあ、エレベーターって使えないのかな？」

「使えるわけがないだろう？ ボタンを押してドアを開けることもで
きないし、

誰かが乗るときに入ったとして大勢の生徒が入ってきたらどうする？
そうなたらまず圧死は免れないよ」

「……。そういえば携帯ってつながるのかな？」

そういつて上条は携帯電話を取り出して自分の部屋にかけた

(下手したら死ぬかもしれないのに……呑気なものだ)

~~~~~

ステイルと上条はとある階に来ていた。

超音波と赤外線で調べて外から測定した実寸と食い違いがある。

つまり、ここにはステイルの言っていた隠し部屋がある。

「ここらしいんだけど」

「ここらしいって言っても開かないのなら意味もないし、  
第一ビルに干渉できないんだからそんなことをしてもわかるわけが

ないだろ」

「念のためだよ。いざとなればアウレオルスィザードを脅し、無理なら殺せばいい」

「殺したら意味ないだろ。結界の処理をできる程度の半殺しとか」

これは『戦場』の会話だが一般市民が顔色ひとつ変えずに殺すなどを口に出している。もはや異常者だ。

「それにしても、科学宗教がどんなものかと思ったけど、意外に大したことはないようだね」

「ああ、確かに危険度は低い。ずっと前に俺に勧誘してきた変な宗教の奴みたいに関度度は少ない。予備校だから“信者”は勝手に入ってくるし、

生徒から“集金”することもない、変なテロを起こすわけではない……だがな」

「全員他人を蹴落とす話、ここで勉強しない奴は“クズ”、そんな話“しか”していない。

貼ってあるポスターもまるで『幸福の手紙』だ。ここは間違いなく……科学宗教の溜まり場だ。

おそらく、こここの塾ではレベル5ですら見下している」

上条は悪党だ。それは本人も自覚していること。しかしそれは優しさ故の悪である。当然このように自分達の勝手な考えに酔って

弱者を痛めつける集団が嫌いである、もちろん自分が被害にあった

ことがある

ということもあるが、断言できる。この塾は？クス”の溜まり場だ。

「行くぞ」

そういつてそこから立ち去ろうとしたが、何かおかしい

コインの表にいるはずの住人がコインの裏の住人である

こちらを見ている。最初は大きな声で塾をボロクソに言ったからと  
思ったが、

すぐにコインの表裏のことを思い出した。

「支天の翼は輝く光、輝く光は罪を暴く純白」

一人がポツリと呟いた。それに続き二人目の声が重なり、さらに三人目、四人目

と重なっていった。おそらく他の場所でもそれは行われている。

ビルには数千人の合唱で満たされていた。

生徒の眉間から青白い球が飛び出してきた。それが床に落ちると酸性の液体で

何かを溶かしたように煙が上った。

「それじゃあ、それ頼んだよ」

ステイルの言葉で気がつき、顔を上げると目の前に何百の今の球体があった。

「いや、これは逃げたほうがいいだろ・・・」

そう言ってステイルの後を追った

「ちょ……ちゃんと相手にしろよ！何のための盾なんだ！」

「やかましいっ！あんなのを退治するなら阿修羅マンと対峙したほうがマシだー！」

「ならば！とっておきの秘策がある！」

「よし！使え！さっさと使え！」

「うん」

どん

「えっ」

気づいたら上条は階段を転げ落ちていた。

「ニヤニヤ」

上ではスタイルがニヤニヤ笑っていた。  
擬音付で……

「じゃあ、がんばってね」

そういつてスタイルはどこかへ行った  
球体達はスタイルを追わずに何故か上条のほうへ突っ込んできた



その時、上条はステイルの言ったことを思い出した

『僕は魔術を使わない限りばれることはないが、君は建物の魔力を消しゴムみたいに消しているからすぐばれる』

「やられた！」

ステイルの策（笑）を悔やんでいるうちに例の青白い球体は迫ってきていた。

上条はそれに気づき下に逃げようとするが階段の下にはすでに三沢塾の生徒がいた

（いや、こいつらは今は俺たちと同じコインの裏の住人だ）

上条は右手を握り生徒に突っ込もうとしようとしたとき、突如少女の頬が吹っ飛び、指も吹っ飛び、鼻も吹っ飛んだ

（超能力者に魔術は“使えない”か）

以前インデックスに教えられたこと

そもそも上条には超能力はおろか、魔術も使えない

「はっ！自分の体がやばいってわかってんのに“それ”を続けるたあ大した信仰心だな！インチキ宗教信者らしく無様に散れ！」

上条がそういつた瞬間、その生徒の眉間は弾けとんだ誰が見ても死んだようにしか見えない

「さてと、面白いもんも見れたし、さっさと吸血殺し《ディープブラッド》ごとく

姫神秋沙を見つけるか」

しかし、球体達を見てみると球体達は上条を飲み込もうとせず、その場で止まっていた

やがて動き出すと球体は床に落ち、そのまま消えていった

カツン

足音がした。上条はそれを誰か確かめるために階段の踊り場から確認した

別に錬金術師か姫神<sup>みかた</sup>どっちでもよかった

錬金術師なら脅して吐かせればいいし、

姫神<sup>みかた</sup>なら探す手間が省ける

階段下の通路に立っていたのは吸血殺し《みかた》だった

~~~~~

「ちよつとベルト貸して」

「あ？ああ」

姫神は上条のベルトを使い、ひどい出血をしている箇所を止血している

「いいのか？お前を監禁していた奴らの仲間なんだぞ？」

「この人は何も知らずに『三沢塾』に入って

知らない間にこんなに染められただけ。この人自体は悪くない」

「それでも、こいつの罪は消えない。上条さん的にはこのままほっといて死ぬまで観察してもよかったんだけどね。」

「……………とりあえず終わった。あとは整形手術をすれば傷口はわからない。お尻の皮をもつてくればいい」

「ならこいつのケツの皮剥いじまおうか？」

「だから。この人自体は悪くないし。あなたに何かしたわけでもない」

「ただ宗教団体には恨みがあるだけだ……それよりさっきの処置は見事だなお医者さん？」

「医者じゃなくて。私は魔法使い」

「どの辺が？」「この辺が……」

スタンガンが内蔵された警棒

「サンダガしか使えねえじゃん」

「これがブーム」

「あつそ。だがもういいだろ？帰るぞ」

「何で？」

「お前に貸した1000円の十倍をまだ返してもらってない」

「ここにはお前の財布はなさそうだから・・・ん？」

ずるずる

何かを引きずるような音がする

その不快な音源は憎悪をこめた何かをわめいている

「少年、なぜここに？お前も侵入者か？お前も奴の仲間か？」

「仲間つつつか、犬猿の仲だ。それとお前の持っているそれって」

「これか？ただの『材料』だ！」

「あんまいいの作れないじゃない？」

「だから困っている！」

「かわいそう」

突如隣にいた姫神が会話に割り込んだ

姫神はそのまま無表情のまま続けた

「気づかなければ本物でいられたのに・・・」

「それをいうなあああ　　うがつ！！」

アウレオルスらしき人物の頭が誰かに踏みつけられた

「やかましい！耳障りだ！とりあえずお前がボスなんだから？
あとはお前を殺せばこいつも連れ出せるし、俺も帰れる
だからさっさと死ね」

メキツメキツパキツメキツ

今にもアウレオルスらしき人物の頭は碎けそうだ

だが、そのとき彼の頭が解放された何がおきたかわからなかったが
左足にくる激痛で理解した

グチュ グチュ ベキツ バキツ グチャ

「ア、がああつああが、があつががあああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ」

左足の傷口に挿してある棒が強い力で押し込まれている

肉やら血管やらが混じった音や、棒を押し込んで骨が折れた音がす
るが

彼にそれは聞こえない

しばらくそれが続いた後開放された。しかし、棒はすでに内臓を貫
いている

「こつちはよお・・・わけもわかんねえ青白い球におわれるわ

」

「ア、あ、ああががぎゃ、あああつだがああああああがああウ

グシヤッ!!

何かが潰れる音が通路に響いた

そっくりさんへダミー（後書き）

さすが悪条さん！俺たちにはできないことを平然とやってのける！
そこに痺れるウ！憧れるウ！

というわけで今回も悪条さんがやってくれました

少しやりすぎかな？元ネタと悪のベクトルが違うかな？

まあいいか

錬金術師（前書き）

最近詐欺条さんの小説を見たんですが、すごすぎます・・・！
文章も上手い、話も上手い、原作と平行線で沿った話上手すぎます！
俺もあーゆー風になりたいです。
というわけで書きます。三沢塾編ラストスタート！！

錬金術師

「さて、魔王も倒したことだし、さっさとお姫様を外に連れ出しませるか」

「この人……生きたいって言ってた。でも殺した。何で？」

「別に、ただの八つ当たりだ」

先程、上条はアウレオルスを殺した。殺したのは別に彼のせいで苦労したからでもなく、ただムカついたから……

ふと上条は疑問に思った

「なあ、さっきアイツにまるでアイツが偽者みたいなこといったけどアイツ偽者なのか？」

「そう。偽者。本物は鍼を常備しているし。攻撃ももっと多彩」

「当然。私もこのとおり生きています。だから貴様らは塾ニからでられない」

突如かけられたどこか聞き覚えがあるがどこか違う言葉で納得した。

「なるほど、つまりあれか？さっき俺が殺つたのもまた、お前に踊らされた犠牲者の一人に過ぎないってことか」

上条はそれに余裕を持って答えた

「当然、彼女は必要だ。回収させてもらう」

「悪いが姫神そいっを連れ出すことに決めた。断らせてもらう」

上条はアウレオールの股間を足で蹴り上げようとしたが

「私に触れるな」

振り上げた足はまるで強化ガラスにあたったように弾かれた

「っ！何が!？」

わけが解らない。アウレオルスは何かをする仕草を見せなかったし、何かを用意しているようにも見えなかった

用意しているものといえば姫神のいったように鍼をもっているくらいだ

今度は右手で殴りかかってみた

しかし、

(右手みぎてが弾はじかれた!?! 異能の壁じゃないのか!?!)

イマジンブレイカー
右手は蹴りと同じように弾かれた

何があつた？幻想殺しの故障？これは科学？それともステイルの言つていた・・・いや、アレは不可能なはずだ

上条が混乱しているとアウレオルスは鍼を取り出し、首に突き刺して言った

「案ずるな殺しはしない。ただ」

「ここであつたことは忘れる」

~~~~~

「JJJJは？」

公園のベンチのようだ

「何してたんだっけ・・・？家に帰って、インなんとかがスフィンクス三毛猫を飼うのを許可して・・・それでダメだ、思い出せない。なんか頭もすっきりしねえ」

（頭に煙草の煙が入っているような気分でガンガンする。）  
頭を叩いてみた。

パキイイイン

「あつそういえば千円返してもらってねえ」

そういつて上条は三沢塾へ走っていった

途中何かがおかしかった

人が一人もいなかった

（もしかして人払いのルーンってやつか？何のために？まさかステイルの奴、錬金術師の髪を馬鹿にして全裸で放り出されるなんて嫌がらせでも受けたのか？）

そう考えていると三沢塾が見えてきた

だが、建物の周りをへんてこりんな鎧を着た連中が取り囲んでいたおそらくエレベータ付近に転がっていたローマ正教の奴の仲間だろうと上条は予想した

「あんたらローマ正教やなんちゃらか？」

「そうだ。私はローマ正教一三騎士団　　自己紹介はいいから用件を教える」

「……………これからグレゴリオの聖歌隊にて聖呪爆撃を行う」

せっかく拾った寿命を縮めたくなければ即刻退避せよ」

「あーそうなの？じゃあがんばってねって言いたいんだけど1時間いや30分ほどまったくんねかな？中に

友達がいてさビルに入ってから死亡フラグ建てまくってるから心配  
でさ」

「断る！攻撃を開始する！」

「待て待て待て！今のは違う見栄張っただけだ！実はこの中にい  
る奴の借金を回収しに来たんだ  
あれがないと上条さんの明日からの生活に影響が」

「知らん！攻撃を開始する！」

そう言っただけで全身鎧の奴は合図のようなものをした瞬間  
まるで映画や漫画、ゲームのように紅い槍のような物が三沢塾を貫  
いた

「……これがお前らの正義か？」

「そうだ。正しき目的のためならば手段は正当化される。流れる血  
は明日の礎と思え」

建物に亀裂が入っていくと人がそこからばらばらとこぼれ落ちた。  
まるで蟻の巣を掘り返したようだ。しかし、すぐに変化に気づいた  
ビルの周りにあつた粉塵がビルに吸い込まれていく  
周囲を見てみると吹き飛んだ瓦礫がビルの傷口に吸い込まれていく  
あつという間にビルが修復された

（『三沢塾』だけでなく、周囲のビルまで修復されているあたり、  
これはただ『修復されている』んじゃない

『巻き戻されている』んだろうな……ならさっきの攻撃はどうな  
る？）

横ではそれを悟った鎧が膝をついている

「ま。俺の幻想殺しを打ち破ったんだから当然だな。俺は危ないからお前れの言つとおりとつとと退避させてもらつぜ。」

鎧が上条のほうを向いた

「多分俺の不幸に巻き込まれたんだろうなあんたら・・・まあ、疫病神を怒らせちゃった

身から出た錆ということだね」

そういつて『三沢塾』のほうへ走り去った

~~~~~

「にしても不思議だな。さっき吹き飛ばされた奴どころか、俺の目の前で破裂した奴まで生きている」

「やあ、君がいるってことはここは日本ってことかい？しかし、何故日本に？」

階段を何階かあがったときに不意に声をかけられた

「いいぜ！お前が俺にした仕打ちを忘れたと言つなら！」

「へ？」

「まずはその幻想を！」

「くっ！インケン魔女狩　　「ぶち殺す！！！！！」

祝　記憶復活記念！

~~~~~

北東の最上階にアウレオルス「イザードは佇んでいた

「私は一人の少女を助けたかった」

彼の背後には机があり、そこには一人の少女が眠っていた

「少々訳あってイギリス清教と内密で接触していた。そこで一人の少女とであった

そう、このIndex - Librorum - Prohibitor  
インデックス  
um　禁書目録だ」

「一目見たときからわかった。私はこの娘だけは救えないと常人では発狂しかねない10万3千冊の魔道書の猛毒に侵され、猛毒を抜くためには一年ごとに記憶を消去しなければならぬ、そんな過酷な荷物うんめいを背負わされても他人の

ために微笑むことができる少女を救いたかった。だから私は魔道書を書き続けた

そして、私はある日あることを思いついた。彼女を吸血鬼にすれば彼女は死なないと」



「なるほど、君の目的は黄金錬成《アルス・マグナ》の完成ではな  
く、  
禁書目録を救うために吸血殺をさらって吸血鬼をおびき寄せようと  
した」  
あのい  
デュープブラッド

「なるほど・・・今年からのパートナーが俺で」

「二年前が僕そして、三年前は彼で役割は『教師』だった」

「ならば何故私の邪魔をする？」

「そんな方法では彼女を救えない。失敗するかもしれない手術に彼  
女を託すことはできない」

ステイルは横にいる上条を見て言った

「ほら、言ってやれよ。何故あの手術が成功しないのか、あの手術  
にどんな欠陥があるのかをね」

アウレオルスは上条を見た。そして聞いた

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
「例えばお前、もう治った病気を取り除く手術をしてどんな意味が  
ある？」

「?・・・どういうことだ？」

「その飯の意味さ。すでに救われたんだよ・・・彼女は。この代の  
パートナーにね・・・」



上条がそういつた瞬間、突如アウレオルスが笑いを止め、彼らを睨み付けた

「倒れ伏せ！侵入者ども！！」

上条は彼がそう言う直前にゾクツと何かを感じ彼がそれを言った瞬間に右手で体に触れた

バキン

「おっと！そうはさせるか！」

まっすぐアウレオルスの元へ突っ走っていき、

「体を壊せ」

彼がそう言つと

「うっ！」

胃の中のものを吐き出しそうになるがすぐに胃の辺りを抑えると嘔吐のように吐き気が消えた

「倒れ伏せろ」

しかし、すぐに先程のことをやった

「はは、簡単にはコロさん！じっくり楽しませてもらうー！」

そういつて鍼を取り出した

「待って」

目の前に姫神が立ちふさがった。しかし、目的を失った今彼女がどうなるうとかまわらない

「邪魔だ。死ね」

その瞬間姫神秋沙が崩れた

それには死因がなく、“ただ死んだ”

上条はとっさにそれを抱えると

姫神は生き返った彼女の背中を触っている右手でわかった

「アルス」マグナを打ち消した？馬鹿な！！」

上条は深いため息をついた

「はあーあ。一瞬でもお前を不憫だと思った俺が馬鹿だったよ・・・  
お前は

最早どうしようもないアホだ」

上条は右手のパキパキ鳴らしながら言った

「いいよ。お前がインデックスと笑い合っている理想を今も見てるんだって言うなら・・・」

そして睨み付けながら

「その理想をぶっ殺す！」

言った瞬間駆け出した

「窒息死」

アウレオルスが言った瞬間上条は自分の喉に触れた

パキン

「きかねえよ！」

「圧死」

突如頭上に車が現れ、上条がそれに触れた途端、

パンッ

車は風船がはじけるように消えた

「感電死」

呟いた瞬間、上条の周りを電気が取り囲んだ

「この攻撃には慣れてるんでね!!」

バギン

そう言っただけで周囲を取り囲んだ電気の一部を触るとまるでアメガラスを割ったように電気は粉々に崩れた

「おいおいどうした？もつとカオスな状況を作り出されるかと思っただけだ」

「ふん、その「恐いんだろ？」む？」

「お前、その能力が恐いんだろ？」

「だからどうした？ただそこまでする必要などないだけだ  
さて、貴様のその右手は黄金練成《アルスII マグナ》を打ち消すらしい」

「なら右手で触れないものだとしたら？」

銃をこの手に。弾丸は魔弾。用途は射出。数は一つで十二分」

アウレオルスは己の首筋に鍼を刺した

「人間の動体視力を超える速度にて、射出を開始」

バンツ

パキン

「いかにして人間の動体視力を超える魔弾に触れた」

「別に、ただお前が銃を向けた延長線上に右手をかざしただけだ」  
首に突き立てた鍼を投げ捨て

「ならば。先の手順を量産。一〇の暗器銃にて連続射出の用意」

「まずい」

「準備は万端」

魔弾の軌道を予知できるといつても人間の動体視力を超える速さを  
十個も触れるわけがない

「一〇の暗器銃。同時射出を開始せよ」

その瞬間後ろへ吹き飛ばされた

「がつ！・・・は！・・・」

「鍼だ！上条当麻！奴の弱点は」

「宙を舞えそして内から弾けよ魔術師」

ぼん

瞬間、血、肉、骨、内臓、筋肉、全て撒き散らされドーム状に広がっていった

人間プラネタリウムの完成である

しかし、彼は生きていた。心臓がいまだにびくびく動いているのが証拠だ

「まさに、芸術だな」

「さて、続きをしよう。沈め少年」

アウレオルスはすでに鍼を首につき立て、呟いた

その瞬間、上条の足元が水あめのように液化化した

上条はそれに思わず触れた

パキン

「しまった！」

液化化した床は右手に触れた途端、もとの床にもどったが

沈んだ足はそのまま固まった。幻想殺し《イメージンブレイカー》が仇となった。幸い靴下まで沈んだために靴下を脱げば抜け出せるしかし、アウレオルスはそれを許さず次の鍼を首に突き立て、





ガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキン  
しかし、一つも上条にあたることはなかった  
射出した刀身はすべてあらぬ方向に飛んでいき、壁に刺さった

(馬鹿な！どうやって反らした！？)

「くっ！断頭の刃を無数に配置。速やかにその体を解体せよ」

少年の頭上に無数のギロチンが出現した

一つにつき重さは100キログラムはありそうだ

(大丈夫だ！あれは避けられない！反らされない！確かに頭上に落ちるように命じた！)

そう！命じた！そう命じた！)

ギロチンが少年の頭上に落ちたとき、ギロチンは全て一つ残らず粉々に砕け散った

錬金術師は鍼を取り出そうとするが、全て床にばらけてしまった

(しまった！あれがなければ なければ？っ！やめろ！考えるな！)

考えが止まるうとも目の前に迫る少年は止まらない

「なア」

「ひいっ」

「まさかお前、俺の幻想殺しぶった斬ったぐらいで俺を止められる

「とでも？」

（まさか、我が黄金練成《アルスⅡマグナ》が効力を失うなど……  
！いや、待て！考えるな！）

その時、上条の右腕の切断面から透明な何かが噴出してきた  
その透明な何かが形作ったのは腕などではなく、

「なるほど、そういうことか……」

（これは私の黄金練成《アルスⅡマグナ》でできたものでない。  
断言できる）

右手から生えてるそれは大きく口を開け

（むしろそのままでは戦えばよかった……あれはただ異能を消す能<sup>ち</sup>  
力<sup>から</sup>などではなく）

その顎が錬金術師の頭に向かい

グシャ

~~~~~  
~~~~~

「あんたに腕くっつけてもらうのはこれで二度目だな」

「それにしても毎度毎度綺麗にくっつくものだねー君ってもしかしてファンタジー世界から来たの？」

「くっつけたのお前だろ？」

「それはそうと君よくここに来るけどもしかしてナーズ属性？」

「前にここに来たのはお前が呼び出したからだろうが！っーかなんでナーズに合うために  
利き腕ぶった斬らなきゃなんねえんだよ」

「なんだやっぱり同士じゃないのか・・・まあ、結構な付き合いだからっすっすわかってたけどね」

そう言い残しカエル顔の医者 は 部屋を後にした。それに入れ替りに誰かが入ってきた

「君と馴れ合うつもりはないけど、一応来たよ」

「No thank you」

「黙れ。へたくそな英語使うな。それにしても右腕きりふだぶった斬られた  
極限状態で

あんなこと思いつくなんて君は本当にどうかしてるね」

「我ながらハリウッド俳優になれるんじゃないかと思うよ」

「だが、一つ気になることがある。いくら動揺したとしてもすぐに動揺の効果が

現れるとは思えない、何故刀身が反れたかだ」

「ああ、それならちよろゝと心あたりがあるな」

「ふーん。それは聞かないでおこつ・・・」

「いいのか？」

「別に聞いても無意味だしね」

「つまんねえな」

「そんなことより君に伝えることがある。君の罪についてだ」

「罪？」

「アウレオルスⅡイザードは死んだ」

「死んだ？」

「そう。胸から上がなくなってたんだよ  
しかも傷口はまるでマネキンを切ってそこに体の中身の写真を貼っ  
たように

血が一滴も垂れてないんだ・・・君は腕をぶった斬られて、僕は  
人肉プラネタリウム、

そして彼は不気味なマネキン死体・・・吐き気がしそうだ。僕はも  
う帰るよ

気分が悪くなった」

そういつてステイルは病室から退室した  
そしてまた入れ替わりで誰かが入ってきた

「よー上条当麻ー！元氣かー！」

「お前は土御門んとこの・・・舞夏？」

「覚えててくれてうれしーぞー！そんな上条当麻にプレゼントだー」

「これって・・・ゲコ太つつたつけ？なんでこんなもん・・・」

「お前が持っていればお前の何かの役に立つだろうとなー」

「ふーん、まあとりあえずもらっとくわ」

「おう！それじゃあこれから用事あるからまたなー！」

土御門舞夏退出、御坂美琴入室

「おつす！なーんだ・・・生きてたのか・・・残念」

「今日は変な奴からの見舞いが多いな・・・」

「ほれ、見舞いの花束」

「なんで菊の花なんだよ・・・死ねっただか？俺に死ねっただか？まあいい

それはそうと、あの時のあの妙な現象お前だろ？」

「え？なーんのことかなー？」

「御坂・・・ここに学園都市製のライターとゲコ太人形がある・・・

「はい、やりました。何時から気づいてたの？」

「腕ぶった斬られてすぐだ。あの刀身の中にかすかに青白い“線”が見えた、おそらく

お前が磁力で飛ばしたんだろ？それにアイツが鍼を落とすとき、アイツは確かに一本  
鍼を掴んでいた。だが他の鍼がその鍼にくっつくように鍼がばらけた。お前が磁力でまとめたんだろ？」

「ご名答・・・でも感謝はしてよね？あれがなかったらあんだ死んでたわよ？」

「それじゃあこのゲコ太あげるよ」

「ん 確かに！じゃあねー」

そしてまた誰かが入れ替わりに入ってきた

「またかよ」

「とーま！とーま！さっき売店でマスクメロン味のポテトチップが売ってたんだよ」

「んな得体の知れないモンで目を輝かすなよ・・・」

「でも、意外に美味しかったですよ？と美静はあの時の絶望を分け与えようします」

「もう、突っ込みきれんわ、その後尾・・・」

「そういえばとうま、ひめがみあいさの件なんだけど・・・色々話し合った結果

『教会』にかくまうことになったんだよ」

「どーせ『歩く教会』とか言い出すんだろ？わかってんだよ」

「むーせっかく話を考<sup>ストーリー</sup>えてきたのに」

「ノリの悪いご主人様ですなと美静は落胆します」

「ね？みーちゃん！」「ね？インちゃん！」



「お前らがいきピッタリなのはわかったからっさと家帰れ上条さんはもう疲れた。寝たい」

「はい」と美静は渋々帰ろうとします」「」

ガララッ

「ふうー、厄介払いもできたししばらくのんびり寝……る……と……し……なんでいんだよ」

入り口には戸籍上ではたったいま帰ったと思った妹の上条美静が立っていた

「うへへ……やっと二人きりになりましたねと美静は舌嘗めずりをします」

「おい」

「ご主人タマ〜!」

見事なルパンダイブだ

それよりも現実でルパンダイブができるのが驚きだ

上条はこのわずか0.5秒の中で考えた

「テメエの腹は読めてんだよ!」

ドゴッ

美静の見事なボディブローがきまった。

「グフツフツ！これが・・・ご主人様の・・・愛と美静h「俺の愛にこんなサディスティックな愛があつてたまるかーッ！」」

吸血殺し《ディープブラッド》編

完

## 錬金術師（後書き）

美静「やれやれ通報されたか、見事な推理だったよ・・・当麻さん・

」

というわけで三沢塾編が終了したわけですが

次は8月31日の話ですが、金欠気味なんで

番外編を書かせてもらいます

随分謎が残りましたね。質問があったら感想にてどうぞ

## 番外編：能なしカラス爪をトゲ（前書き）

番外編を書く前に本編の謎を解明していききたいと思います。

吸血殺し《デーブブラッド》レベルアップ編です。

番外編では上条さんが幻想御手に

軽くかかわる話です。関わるといっても、被害者（加害者）との戦闘だけです……

ちなみにこの話を書いたのは、元ネタで美琴が上条さんを追いかけているうちにB-rankフラグが立ったというのがちょっと納得できないので書きました。ただ追いかけているだけじゃC-rankフラグすら立たなそうだからね！

## 番外編：能なしカラス爪をトゲ

本編でアウレオルス・イザードが死亡したことについて、原作では記憶を失いその後、ステイルが顔を変えて

開放したが、この物語では死亡している。

死亡したのは、アウレオルスが気づいてはいけないものに気づいてしまったから

この物語の上条は原作よりも何段も成長しているため、あのとときに幻想殺し

の正体のようなものがでた。それをアウレオルスが気づかないはずもなく、

また歴史が狂ってしまうために運命修正のために殺された。

それでは本編をどうぞ

-----

「お姉さま、グラビドンってご存知ですか？」

「グラビドンって・・・重力子のことだっけ？」

最近発生している爆破事件の話をしていたら黒子がそう聴いてきた

「どのケースも爆発の直前に急激な重力子の加速が衛星によって観測されていました。アルミを起点に重力子の爆発的な加速させ、一気に周囲に撒き散らす。つまり“アルミ”を爆弾に変えていたということですね」

黒子が持っていたアルミ缶を指差しながら言った

~~~~~

「何であんたがここに？」

「いちや悪いか？」

「お兄ちゃん！あ！常盤台のお姉ちゃんも！」

「つて、『お兄ちゃん』つてあんた妹いたの！？」

「違えよ。俺はこのガキが洋服店探しているつて、それで行き方教えてやったら

一人じゃ行けないつて言つてよ。無理やり案内させられたんだよ」

「ははーん？スキルアウトをポコポコにしたあんたでも小さい女の子にはかなわないつてわけ？」

「なんだよそのニヤニヤは……こういつ自分から近寄ってくるマイペースな奴は苦手なんだよ」

「あんたも苦手な奴とかいるのねー」

「ねーねーお兄ちゃん！私あそこ行きたい！」

「あいよ」

「じゃーねー！お姉ちゃん！またねー！」

「うん、バイバイ……………はあ……………」

「どうしたんですか？」

「……………なんでもない……………」

~~~~~

『初春！今すぐそこから逃げなさい！』

「え？何ですか？」

『虚空爆破事件ゲッゴウバクパの被害者は全員が風紀委員シヤウジジメンだけですの！  
犯人の真のねらいは』

「おねえちゃん！」

「ん？」

「めがねのお兄ちゃんがこれをじゃっじめんとのお姉ちゃんに渡してくれて！」

ぐしゃっと人形がへこんだ

それを見た初春はそれを女の子からひったくって投げ、女の子を庇うように抱いた

そして人形はどんどん縮まり、

そして爆発した。

パキイイイイイイン

くらしい路地裏を一人の少年が歩いていた

「いいぞ．．．どんどん強い能力ちからを使いこなせるようになってきた．  
．．．！」

「もうすぐだ．．．！もう少し数をこなせば．．．！！あんな奴ら  
全員まとめて吹き飛　　「ばせんのか？テメエみてえなマヌケに  
．．．」

「え？．．．！？お前！あの時入っていった奴！！吹き飛ばされた  
はずじゃ．．．」

「あれれー？テメエ程度の奴がこの俺を殺せるとでも思ってるのか  
？ダメだダメだあそんな妄想げんそうはぶっ殺さなきゃなあ？」

「お、おい！待て！動くな！動くところいつを爆発させるぞ！」

少年はそう言っつて空き缶をとりだした。上条はおそらくそれは爆弾



だろうと予想した

それを見た上条はガンツ！と横にあるゴミ箱を蹴った  
その音を聴いた少年は思わずビビッてしまった

「はい！動いたよ・・・上条さん、今動いたよ」

「この野郎！！」

少年が逆上し、空缶を放り投げた

少年が投げた空缶はすぐに縮み、一点へ収束しそれで・・・

パキイイイン

それを上条が掴んだ途端、空缶は一瞬で膨らみ、  
空缶は“ただの”空缶にもどった

「どついうことだ・・・最高出力だったはず！！お前・・・その  
能力・・・  
いったい何なんだ！！！！！！」

メガネの少年がヒステリックに叫ぶと上条はニヤツと笑い答えた

「幻想殺だ。」

上条は拳を震えるほど強く握り、手首が反対側からでも見えるくらい振りがぶって

「以後よろしくー!」

グシヤ

「うわ〜こいつはひどいじゃん。すぐに病院へ搬送したほうがいいじゃん」

「それにしても・・・一体だれが?」

「さあね、わかったことは・・・こいつは世界一怒らせてはならない奴を怒らせたってことは確かじゃん」

「その人を知ってるんですか?」

「そんなのわかるわけないじゃん」

「またお前か・・・」

「いいの？名乗り出なくて・・・名乗り出ればあんた英雄よ？」

「その英雄を悪人呼ばわりしてた奴はどこのごいつだよ？」

そういつてアイツは去っていった

ムカつく・・・

(レベルアップ幻想御手・・・こんなの・・・無い方がいいよね？)

その時、

「レベルアップ幻想御手譲ってくれるんじゃないのか！！？」

上から今私が消そうとしたものの単語が聞こえてきた

「さっき値上がりしちゃってさー、もう十万もってきてくれよ」

「だったら！金を返してくれよ！！」

ドゴッ

スキルアウトが男の腹を蹴るのを見た

「ウダウダ言つてねえで金もってこいよ！」

おそらく男がスキルアウトに騙されたのだろう  
男はまだリンチされている

「なあ、お前らのレベルがどれほど上がったのかそいつで試してみ  
るか？」

リーダー格のような男が言った。あの幻想御手は本物だろう  
とりあえず風紀委員ジャッジメントか警備員アンチスキルに・・・

充電切れ

こんな時に・・・！

でも・・・仕方ないよね？こっちは一人、あっちは三人。おまけに  
私は中学生・・・

そうだよな？

「やめなさいよ！その人怪我してるじゃない！」

何をしているんだろう？こいつらはさっきレベルアップを使った  
ようなことを言っていたのに・・・

ガン

「今、なんつった？」

ガシッ

リーダー格の男が汚らしい手で私の頭を鷲掴みにした

「ガキが生意気ゆーじゃねえか？何の能力もねえくせに・・・  
ごちゃごちゃ指図する権利はねえだろ」

そつだ。

私は無能力者<sup>レベルゼロ</sup>

向こうは幻想御手<sup>レベルアップバー</sup>を使ったとはいえ、能力者

所詮、無能力者<能力者。この公式は誰かが証明しなくとも証明されている・・・

「おい！なに見てやがる！見せモンじゃねえぞ！」

その声に気づいて男の視線のあとを追った

そこには・・・

「別に、ただ面白そうだから見物してただけですよ。さっさと消えますよ」

私と同じただの腑抜けがいた

「はっ！だよなー・・・テメエ見てえなガキが俺たち三人を相手にできるわけがねえよなあ・・・

それよりよお、お前幻想御手<sup>レベルアップバー</sup>って知ってつか？知ってるよなー？」

「は？」

「今なら10万で売ってやるよ!どうだ?」

「十万?その値段じゃあその幻想御手とやらに加えて二十万円よこせよ」

「おいおい、まさかお前信じてねえな?」

「いや信じてるよ。つーか知ってる。一回それを使った奴をボコボコにしたからな」

それに俺がそれを使ったところでレベルは上がらねえしな・・・」

「はあ?なに言ってるんだお前?わけわかんねえ!」

「テメエのその市松模様みたいな歯のほうがわけわかんねえよ」

「くくくぶっ!」「」「」

言った男と言われた男以外その場にいる全員が噴出した  
言われた男は漫画みたいに歯をギリギリしている

「てめえ!おい!お前らこいつで試してやれ!!--!」

「じゃあ俺が先にやるぜ」

ブワッ

テレキネシス  
念動力か

すごい・・・鉄柱があんなに浮かび上がってる

鉄柱はその人に向かって一直線に飛んでいく

でも、その人は表情一つ変えずにそれを潜り抜けるように避けた

「おいおい俺の念動力テレキネシスをなめてもらっちゃあこまるぜ」

突然飛んでいた数本の鉄柱が花のように開いたかと思うと

今度はその人を取り囲むように浮かんでいる

無理だ。あんなのを避けられるはずがない・・・

私はただ声も出せずただその人に鉄柱が飛んでいくのを見ていた  
しかし

ガキンツ

鉄と鉄がぶつかり合う音だけが響いた。最初はその人が鉄柱に貫かれたのかと思っただが

違かった。避けたのだ。手足、首、肩あらゆる部位を動かして最小の動きで回避していた

すぐさま鉄柱は宙に浮かび、蛇のようにその人に突進したがその人はそれを横に回避したと思っただら

最後尾の鉄パイプを掴み、それを引き抜いた。

そうすると、ほかの鉄はまるで楔を抜いた梁のように崩れ落ちた

その人は鉄パイプを振りかぶってただ一言

「ついてねえよなー・・・お前ら・・・」

そう言ってパイプを勢いよく投げた

ガンツ

パイプはその念動力テレキネシスにあたらずに頬すれすれで通過したが

その後ろにいたもう一人の顔にクリーンヒットした

「まず一人目……いや二人目か」

重い鉄パイプが顔の横をスカツて正常でいられるはずがない  
テレキネシス  
念動力は下半身の関節が全て外れたようにへたり込んだ  
おまけに失禁している。完璧に戦意喪失したようで、もう襲ってくる気配はない

「おい、お前レベルはいくつだ？」

私も気になったことだ。  
レベルアップ  
幻想御手を使った能力者二人を一蹴してしまっ  
まうなんて

きつと高位能力者に違いない。でも、彼の言ったことは私の予想をはるかに裏切った

「ん？上条さんはただのレベル0だけど？」

そんな……  
テレキネシス  
念動力を打ち破ったのにレベル0!？

「嘘吐けよ。どうせ肉体強化かなんかだろ？」

「まあ、信じないのなら別にいいけ……どっ！」

その人は残るリーダー格の男にむかって突っ込んで行った  
右手を振りかぶりそのまま男の顔に拳を叩き込んだ、はずだった

「消えた!？」

「違う!避けて」



気がついたら叫んでいた。

消えたはずの男はいつの間にかその人の横に移動していた  
しかし、その人はまだ前を向いたままだ  
男は容赦なくその人を蹴り上げようとした  
今度こそやられた。そう思った矢先

ガッ

「ぐはっ！……一体何が!？」

男はいつの間にか仰向けに倒れていた  
私にもわからなかった。でも、あの人を見てみると私は彼が何を  
したのかがわかった

膝を上げていた。おそらく男が蹴り上げた足を逆に膝で蹴り上げ、  
男の蹴り上げの勢いを利用して転ばしたのだろう。

そうこう考えていると、その人は男を容赦なく踏みつけようとした。  
しかし、降ろした足が踏んだのは地面だった

わざとじゃないようだ、本人も驚いている。リーダー格の男はその  
まま体を回転させ、その人を転ばした

後頭部から真逆さまだ。死ぬ! そう思った瞬間その人は体を後ろに  
回転させ、見事着地した。いわゆる  
バック宙だ

「へっ、アブねえアブねえ! それじゃあ今度はこっちのターンだ!」

男がそういうと男は右フックを繰り出した

でも、彼は避けるそぶりを見せなかった。その代わり左手を出し、

相手の右手の手首に当ててそれをいなした。

「トキ先生直伝!!なんてね」

そのまま右ストレートを顔に叩き込もうとしたが、やはり当たらなかつた

そんな攻防がかれこれ2、3分ほど続いた。いや、主に彼が防御に回っている

「おいおい、どうした? 避けてはつかじゃいつかバテて終わるぜ!」

男が両手で彼を捕まえに来たが彼はそれを両手で掴み、巴投げの要領で後ろに投げた

彼はすぐに起き上がり、男にむかって思いっきり蹴り上げた

ガーン

カランカラン

男はその蹴りを間一髪で避けた。その蹴りはそのまま男の後ろにあつた水道を蹴り上げた

当然水道管はずれ、水が勢い良く噴出し、すぐに大きな水溜りができた

「はあ、もう面倒だ。終わりにしようぜ」

一瞬戦闘放棄しようとしたと思ったが、彼が指をパキパキ鳴らしているあたり

これでキめるつもりのようだ

「終わりにする？さっきから防御しかしてねえのにどうやってやるつもりだ

だいたい、お前は俺の能力ちからの正体に気づいてねえのによ

「お前のソレはお前の周囲の光を捻じ曲げてテメエの位置をズラしてんだろ？

最初の一発の俺のストレートが妙な軌道を描いたときに気づいた」

「それがどうした？だからってどうすれば俺にお前の攻撃が当たるんだってんだ？」

「」  
「」  
「」

バギッ

「えっ？」

ここで初めて男が殴られた

男はそのまま胸ぐらを掴まれこう言われた

「市松君　つかまえた」

ゴンッ

バキッ

まず頭突きを喰らい、掴まれていた胸倉を引かれ、強烈な右ストリートを喰らった

「ふお、ふおふあえへ、いつふあいなふいふおしひやがつふあ（お前、一体何をしやがった）」

「水溜りだ」

水溜り？

さっき水道が壊れて大きな水溜りをつくったのを思い出したでもそれがどうした？

「テメエの起こした水溜りの波紋からテメエの位置を特定した」

なるほど、そういうことか・・・（つまり、あの男の能力の射程範囲外に発生している波紋の輪の中心点にいるから、そこから特定したんだ）

すごい・・・あんな闘いの中でそんなことを思いつくなんて・・・

「で、でふお、掴まれふあとき、俺の隣に像をつくったはずだ！いったいどうふやって!？」

「俺の右手は特別でね、異能の力なら問答無用で打ち消しちまう。幻想殺しだ。お見知りおきを・・・」

「ふあんだよ・・・なんだだよ・・・!!お前、無能力者なんだろ？無能力者《レベル0》は能力者のいいなりだろうが!!能力者よ

りも弱いのに……！！！！何でだよ！！！！」

「無能力者<能力者なんて公式、誰が証明したってんだよ？ああ、いいぜ。お前がそんな固定概念に捕らわれているってんなら……まずはその概念をぶつ殺す！！！！」

グシヤッ

なるほど、<sup>レベルアップ</sup>幻想御手が意味ないっていうのはそういうことか……私は努力すれば能力が<sup>ちから</sup>開花するかもしれない。けど、<sup>レベルゼロ</sup>彼の場合は能力を開花させるどころか種を打ち消してしまうから一生無能力者……一生蔑まされるんだ

そんなことを考えているとツンツンのその人は男の懐からさっきリンチされていた人が渡したであろう十万円と<sup>レベルアップ</sup>幻想御手が入ってるであろう音楽再生機を取り出して音楽再生機のほうを先程のリンチされていた男の人に投げた

「使えば？」

ツンツンの人はそれだけ言うところかへ立ち去ろうとしたハツとなり、私はその人を呼び止めた

「あの……さっきはありがとうございます」

「何だよ、まだいたのか？逃げてりゃいいものを……」

「また襲われても大丈夫なように・・・」

「あっそがんばれよ」

「あの・・・何かお礼をさせても　　「俺はただ獲物に群がっているカラスが喧嘩ふっかけてきたからぶっ殺しただけだ。テメエらもさっさとどかねえと踏んづけちまうぞ」

彼は私を押しつけ、どこかへ行ってしまった

とりあえず、私は幻想御手レベルアップを受け取った男の人に聴いてみた

「それ・・・使うの？」

「いや・・・使わない・・・僕は今まで勘違いをしていた！そうだ！無能力者<能力者なんて公式誰が証明したって言うんだ！

」

怖い人だったけど・・・この人は救われた・・・もしかしたら

悪い人じゃないのかも、と思った

(悪い人じゃないのかも)

でも

(でも)

私はそこでのびているスキルアウトたちを見て思った

善い人でもないのかもしれない、と私はずっと前に読んだ漫画の台詞セリフを思い浮かべた

(善い人でもないのかもしれない)

私はさっきの彼の言葉を思い出した

「無能力者<能力者なんて公式誰が証明したってんだ？」

私の言訳を彼はげんそつぶち殺した

私は結局あのスキルアウトと何も変わらなかった、私があのリーダー格の男と一緒に幻想を殺されたのが証拠だ・・・

後日、御坂さんにこのことを話してみると、御坂さんは何かを知ってるようだったが結局教えてもらえなかった

番外編：能なしカラス爪をトゲ（後書き）

スキルアウト「見事な推理だったよ・・・上条君・・・でも一つだけ間違っていることがあるよ。僕もまた、大きい幻想御手踊らされただけの犠牲者の一人に過ぎないってことさ・・・」

というわけで番外編の幻想御手編終了っつと！元ネタの人には悪いけどこうでもしないと美琴が悪条さんにフラグがたってもしっくりこないものでして・・・（汗）



想い人(前書き)

はい!8月31日の話は〜じま〜るよ〜!!!

## 想い人

さて私、上条当麻はただいま全力疾走中です。はい。  
何故走っているかって？それはですね……

ブルル　ブルル

「はい、こちら上条です」

『こちらビリビリ！って私には御坂美琴っていう名前があるっていつてるでしょうが！』

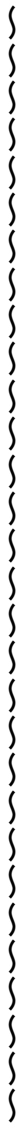
「お前が言ったんだろ！で？用件は？」

『あ！そうそう！今すぐ常盤台の寮の前に来て10分以内に来たらホットドックおごってあげるから』

それを聞くや否や上条は受話器を放り投げて家を飛び出した

で、今に至る

「あと、3分……！」



さて私、御坂美琴はただいま海原光貴に絶賛付きまとわれています。

(アイツはまだかな・・・あっ！来た！！)

「どる〜ん！待った〜？」

「てめえにかかわってる暇はねえ！」

そう言っつて美琴が呼び出したことを忘れたそれは走り過ぎ去っていかうとしたが、

「待てや！コノヤロー！！！」

美琴は走っているそれに飛びついた。美琴・・・お前ならアメフトやれるよ・・・

ドサツと音・・・ではなく、ズゴオオオオっという音を立てながら御坂美琴に上条当麻は倒された

まだハッキリしない意識の中、二人は周囲の黄色い声や、真っ黒い声を聴いた

~~~~~

「んで・・・お前はその海原っつて奴をあきらめさせるために俺に恋人の役をやっつてほしいと？」

「そつなのよ・・・理事長の孫っつて言うんだから蔑ろにはできないし・・・男の知り合っつて他にアンタしかいないからさ・・・っつて

「いつか、恋人とのデート中に学校の宿題やるってどういふことよ？」

「俺、これ終わらなかつたら留年するんだ……」

「いや、そんな死亡フラグ風に言わなくても……それに、その答え間違ってるし、つーか全部間違ってるし」

「えっ？まぢ？」

「ちよつと、貸してみて」

数分後

「ま、落ち込まない、落ち込まない！さくても喉も渴いたし、ジューズでも買ってくるわ！」

「……勉強しよ」

ふと、顔を上げると先程の海原光貴がいた

「その、御坂さんとはどのような関係で？恋人ですか？あつ、その答えは3です」

「いや、恋人じゃねえ。ただお前に諦めてほしくて俺に恋人の役をやらせてる」

「やはりそうですか……あつ、そこは12です。問5と同じやり方です」

「にしても。他に男の知り合いがないつつつても、何度も自分の顔を殴ったり、無理やり純潔を奪った男を選ぶあたり、どうやらアンタ本当に好かれてない様だな」

「ええ、自分はもともと学力は全然でして、能力を利用してカンニングして成績をとっているので、努力家の御坂さんはそれが許せないのでしょうか……でも、何故あなたは私にネタばらしを？」

「俺はアンタの味方でもないが、アイツの味方でもねえ。だが、ばらしちまったほうが面白いと思ってな」

「なんとというか、不思議な人ですね」

バンツ

美琴がいた

「ちよつとこつち来て……」

「あんだね！何勝手にネタばらししてんのよ！？」

「だから言つたろ？そつちのほうが面白いからだ。それに、お前の男の知り合いつて俺とアイツくらいだろ？この際慣れといたほうがいいんじゃないかねえの？」

「だからって……」

「それに、アイツは善人だ・・・悪人じゃねえ。」

「んう・・・わかった！それじゃあ、今回の恋人ごっこはこれにて終了！それじゃ！次は殺しに行くから！！」

満面の笑顔でそう言うと美琴は走り去っていった

「満面の笑みでんなこと言うなよ・・・」

帰宅途中、海原に会った

「またお会いしましたね」

「御坂ならいないぜ。帰ったよ・・・ところで」

お前は誰だ？

「バレてしまいましたか・・・何故お気づきに？」

「こちら、そんな殺気を敏感に感じ取れねえんじやとっくのとうに死んでるような人生を送ってるんでね」

「なるほど、バレバレでしたか・・・」

なら死んでもらいます」

海原（偽）が懐から取り出した黒い石のナイフをこちらに向けた瞬間
後ろで車がバラけた

「変装に攻撃・・・多重能力者デュアルスキルでしかできないことをやってるって
ことは

お前・・・魔術師だな？」

海原（偽）は無言でナイフを構えた

「YESってか？くそっ！」

上条が走り出したとき、隣にあつた標識がバラバラに分解された

~~~~~

ブルル　ブルル

「はっ、はい！」

『インデックスか？当麻だ！単刀直入に聴く！黒い石のナイフを使  
った魔術つてあるのか！？』

「黒い石のナイフは黒曜石・・・多分、トラウイiscalパンテクウ  
トリの槍」

『名前なんて言われてもどうしようもないんだ！その魔術の効果は  
』！』

「もともとはアステカの神様の名前・・・その槍は金星の光を浴びたものを全て殺すって言われているんだよ！とうまなら光を予知すれば右手で防げると思う・・・」

『できるか！！黄猿でも呼んでこい！！』

「他に何かある？」

『奴の変装もそのアステカの魔術なのか！？』

「変装ってだけなら」

『相手の皮をちよつと剥いで護符を作れば姿形をマネることもできる』

「そうか！それだけわかれば十分だ！」

『ちよつととうま！』

ッピ。

「さて、行き止まりか・・・」

後ろでは海原（偽）が例のトラウイiscalパンテクウトリの槍を構えている

「させねえよ！！・・・」

ブワッ



セメントの乗ったシャベルを振り回し、セメントの粉が舞った

「左に注意しな！」

「っ!!！」

バキィーン

「それがお前の素顔か・・・イカしてるじゃん」

「どうも！そして死んでください！！

!?!?!?!?」

「鏡はしっかり磨いとけ」

「セメントの粉!!くっ!!」

「ぬぐってる暇があったら武器として使え!!！」

「いいえ、距離的には問題ありません」

「ああ！そのとおりだ!!！」

上条はナイフを蹴り上げ、落ちてきたナイフを殴った  
パキンという音とともにナイフは砕けた

「さ・て・と、話してもらおうか」

上から鉄骨が落ちてきて大きな音を立ててもなお表情を変えずに言った

「何故魔術にかかわりのない御坂に近づいたかを・・・」

「気づいていないんですか？ 十万三千冊の魔道書図書館を専有、超能力者や、そのほかの強力な魔術師を味方につけ、既に『上条勢力』という脅威ができあがっているんですよ？ つまり、自分の標的はあなた個人ではなく、

『上条勢力』全員・・・」

「それで誰かに変装して互いの信頼関係を崩そうとしてか？」

「そうです、そのとおりです！」

「別に、そんな勢力・・・崩れたところでかまわねえよ・・・許せねえのは」

「テムエが俺に嘘を吐いたことだ

！！！」

ガンッ！！

「がっ・・・！！」

「結局、テムエが御坂のことを好きだったのは嘘だったって」「嘘じゃありませんよ！！！！」「あ？」

「自分だって・・・今すぐにも止めたいんですよ！こんなこと！」

「・・・・・・・・」

「でも、上があなた達が危険だと判断してしまったから・・・」

「オーケーわかったよ。その願いかなえてやるよ」

「え？・・・ぐあっ！」

海原（偽）の顎に強烈なアッパーカットがキマった

「自分は・・・負けたんですか？」

「ああ、お前の負けだよ。もう襲わなくてもいいだろ」

「いいえ、多分これからもあなたも御坂さんも狙われるでしょう・・・あなたは守ってくれますか？彼女を、何時どこでも駆けつけて守ってくださいますか？」

「あいつが自分の不幸でどうなるかと知ったこっちじゃない」

「そんな・・・！」「でもよ」「え？」

「俺の不幸に巻き込まれ立ってんだったら話は別だ・・・守ってやるよ・・・」

「やっぱり・・・あなたはわからない・・・あなたは一体何なんですか？」

「少なくとも人間じゃねえな」

それだけ言ってその場をあとにした

恋人ごっこ編 完

~~~~~

「あゝ、宿題わかんねえ」

家に帰ってさっそく宿題にとりくむも全然終わらない
気分転換にファミレスへ当麻、美静、インデックスの三人で行き、
ただ今上条はファミレスで宿題をやっている

「あなたは何か頼まないのですか？」

「俺はレストランで食事をすると高確率で食中毒になるから食わねえ」

「そうですか・・・それでは美静はこの白玉クリーム餡蜜をお願いします」

「俺、ちょっとトイレ行ってくる」

「お供しましょうか？と美静は「必要ねえ」

窓の外、そこに上下共に黒のスーツを着込み、ネクタイまでが黒色に統一されていた。

その体軀は、みっちりとした筋肉で覆われており強靱である。黒塗りのスーツの大男、その男の名は闇咲逢魔。

「見つけたぞ・・・開戦の狼煙を上げん。断魔の」

ガシツツと突如横から腕を掴まれた

「お客さん。お触りは禁止ですよ。何つつ・・・てってあれ？」

いつの間にか目の前から闇咲が消えていた。横を見てみるとインデックスが闇咲に捕まっていた

「あーあ、また魔術師かよ・・・」

~~~~~

闇咲とインデックスはとある高級ホテルの屋上にいた  
インデックスはロープで縛られて身動きができない状態だ

「驚いたな。短時間で結び目を二つも解くとは」

「縄は日本が生んだ独自の拷問だけど、こんなものじゃ私は何も喋らないんだよ」

「いや、君を拷問する気はない。君の中にある魔道書、その一冊を手に入れるためだ」

「まずは増幅のための結界を張らねばなるまい」

「その必要なねえ・・・な」

「よくここがわかったな」

「いや、ただ高い所から見ればわかるかなーって」

「単純だな」

「大きなお世話だ。で、インデックスに何のようだ？魔道書を使うってんだったら止めとけ・・・死ぬぞ？」

「百も承知だ」

「なら、どうぞぞ？」

闇咲が術式を発動させてからすぐに異変が起こった  
術式にはなにも間違いはなかったしかし、闇咲の命は蝕まれていった  
魔道書の毒だ・・・激しい頭痛に声すらでなかった

「とうま！とめてあげて！！」

「いいんじゃない？百も承知なんだろう？」

「でも・・・！と美静は「自分の命を大切にしないような奴に言われたかねえよ・・・」つ・・・！」

闇咲の限界はもうすぐそこだった  
その時、何かが術式を破壊した

パキイイイイン

術式を破壊したのは上条だった

「わかっただろ？お前程度の奴じゃ無理だったんだ「悪いのか？」  
あん？」

「この命を引き換えに、誰かを守りたいと思うことが悪いのか？」

「そうだな・・・俺から見りゃお前は悪党だよ。悪党だった奴が今度こそとかほざいて誰かを助けたいなんてことができるわけじゃねえんだよ。間違いないな、経験した俺が言ってるんだから間違いないな  
てないな」

「そ、そんなこと　　「帰るぞ！」え？とうま？」

「これ以上付き合ってらんねえ。だから帰るぞ」

「そんな！とうま！この人の助けたい人は呪いだからとうまの右手  
で」  
イマジンプレイカー

「そんなの知るかよ。んなくだらない幻想ぐらい自分でなんとかし  
る」

別に上条が非情な訳でもない。ただ闇咲に自分と同じ末路をたどっ  
てほしくないだけだった

上条がまた立ち直ることができたのは奇跡に等しい。上条もそれを  
知っている

だから上条は闇咲が闇に堕ちないように・・・

そして自身もまた恐れていた。その呪いが破壊したら何か起きる仕  
組みで、闇咲の大切な人を殺してしまうかもしれない  
最悪の場合、死よりもヒドイことになってしまうことを・・・

今宵、一人の女性の死が確定し、一人の男の幻想が破壊され、男は  
現実を見た・・・



## 想い人（後書き）

なんというBAD END・・・ッ!!

すいません！悪条さんがどうしても女の子の人を助ける理由が思いつかなかったもんで、仕方なく上条さんが闇咲さんを見捨てるENDにしていしまいました。この回が好きな人、本当に申し訳ありません！！！！

## 転入生

9月1日 早朝

「今日から学校かよ・・・はあー」

「どうしたんですか？そんなにため息ついて。学校楽しみじゃないですかと美静は不思議に思います」

「俺があ的高校に入学して、一応オリエンテーションまでは通っていたのは知ってるよな？」

「はい。ですけど、それがどうかしましたか？と美静は尋ねます」

「数学のオリエンテーションの時、生活指導の教師をボコボコにしてよお、すんげー気まずいんだよ・・・」

「気まずいというか、あなたに沈められたその生活指導の先生は気まずいどころじゃないんじゃないですか？と美静はあきれながら突っ込みます」

「いや、大丈夫だろ。かなり屈強だったし」

「それにしても、何故あなたは捕まらなかったんでしょう？と美静は不思議そうに尋ねます」

「さあ？気に入られたんじゃないやねえ？おっと、もうこんな時間か。行くぞ美静」

「ねえ、とつま。本当に行っちゃっの?」

「学校に行けって行ったのはお前だろ?」

「そうだけど・・・」

「んじゃあ、行ってくっから留守番してろよ?」

「うん、いってらっしゃい・・・・・・はあ、退屈だな」

しばらくしてインデックスはあることに気づいた

「とつま・・・お昼ご飯・・・」

~~~~~

「上条ちゃん!来てくれたんですね!先生嬉しいですよ!!それで、そっちの娘が上条ちゃんの(義理の)妹さんの」

「上条美静です。よろしくお願いしますと美静は学園都市の七不思議の正体に愕然とします」

「七不思議って・・・先生は!!」
「はいはい。さっさと教室いきましょーねー」上条ちゃん!先生を子供扱いしないでください
!..!」

「これで美静は四つの学園都市の七不思議の正体を知ったわけですねと美静は残る七不思議に期待します」

~~~~~

ガラガラ

「おい、上条だ・・・」

「マジだ」

「あ！上条君だ！」

「本当だ！来てくれたんだ！」

教室に入るとクラスメートたちはヒソヒソと上条についての会話に変わった

上条を恐れる会話もあれば上条に憧れてるような会話もあった

「人気者やなーかみちゃん！羨ましいでー」

「どこがだよ。明らか俺に怯えてるじゃねえか」

「そんでも女子にも話題にされてるんやでー」

「俺は悪口言われて喜ぶようなDMじゃねえんだよ」

ガラガラ

「それではHRをはじめますよ。始業式の前に、みんなにビックニュース！なんと！転入生が二人もやってくるのですよ！」

それを聞いたクラスメートたちは「おおー!!」と盛り上がった

「しかも二人とも女の子!!おめでとー野郎どもー!そして残念でしたー子猫ちゃんたちー!」

その知らせを聞いてさらに盛り上がる野郎達だんしと子猫達じよし。予想通りの反応だ

(二人?一人は美静だとして、もう一人は誰だ?)

「そして、片方はなんと上条ちゃんの妹さんなのですよー!」

いつせいに全員が上条の方を振り向いた

「上条の妹だってよ・・・やっぱコエーのか?」

「いや、兄妹ってのは上がバカだと下はちゃんとしているから大丈夫だろう」

「上条君の妹だって仲良くなれば上条君に・・・」

相変わらず上条に対してマイナスな会話をする男子に対し、プラスな会話をする女子には  
やはり、上条は気づかない

「それでは転入生ちゃん達!どうぞー!!!」

テンションの高い小萌先生の声と同時に入ってきたのは・・・

(インデックス・・・・・・・・)

「あっ！やっぱりここがとうまの通っている学校なんだね！！」

「どっから入って来たですか！？転入生はあなたじゃないでしょ！出てった出てったです！」

小萌先生に連れて行かれたインデックスと入れ替わりに転入生らしき人が入ってきた

「ちなみに本物の転入生は私姫神秋沙と」

「私、上条美静です。と美静はジミーに続いて自己紹介をします」

(ジミーって・・・何時の間に仲良くなったんだ？)

(お互いに同じ臭いを感じて話したら息投合して)

(こいつら・・・俺の脳内に直接・・・)

~~~~~

「何でお前がここにいるんだよ！？」

「だって！とうまったらお昼ご飯を作ってなかったんだもん」

「今日は始業式なんだから午前中には帰れるだろうが」

「そんなのわからないもん！」

「常識だろうが」

「それじゃあとつまは　「お前は今から魔術に関しての常識を言うだろうが、まあイギリスの学校の始業式のことについては知らないが、専門知識の常識と一般常識の違いってわかるか？」

「うっ！それじゃあ　「次はイギリス清教とやらの宗教の常識を言うだろうが、お前の言う常識が一般市民の常識という保障はないぞ？そしてお前は一般のイギリス清教徒の常識を言うだろうが、俺は聖書は暇つぶしに何度か読んだことがあるし、内容もある程度は覚えている」

「」

「ま、まあ。それくらいでいいじゃないですか？」

上条の攻撃に石化してしまったインデックスを見兼ねた隣の少女が二人の仲裁に入った

「そういえば、そちらの方は？と美静は説明を求めます」

「その人は友達、良くわからないけど友達！」

「良くわからないって、良くわからない友達がいるか」

「むっ！よくわからなくても友達は友達なんだよ！！」

「あっ、私は風斬氷華っていいいます」

「上条美静ですと美静は本日二度めの自己紹介をします」

「あ、よろしく願いします」

「上条当麻だ」

美静に対してはオドオドしつつも挨拶をしたのに対して、上条の自己紹介のときは怯えた

「まあ、当然の結果ですねと美静は納得します」

「うん、当然なんだよ」

まあ、当然だよな

「うっせ、ナレーターが話しかけてくんない！」

「誰に言ってるのとうま」

「ナレーター」

「「えっ」「」

「なにそれこわいと美静はメタ発言にドン引きします」

しばらく沈黙が流れた……

「上条ちゃん！美静ちゃん！何やってるんですか！！」

「んあ？始業式終わった？」

「終わってません!!! 体育館に上条ちゃん兄妹がないから心配して捜したんですよ!!!」

「ちっバレてたか・・・」

「それはバレますよ!!! せっかく久しぶりに学校に来たんですからちゃんと始業式にも参加してください!!!」

それに美静ちゃんも折角の初日なんですからちゃんと参加してください!!!」

「すみません先生、私は校長先生の挨拶アレルギーなんで勘弁してください。と美静は嘘の言い訳を言います」

「嘘の言い訳って自白してるじゃないですか!!! それに何でこの場には上条ちゃん以外に男の子がいないんですか!? 何で上条ちゃんの所にはいつも女の子がいるんですか!?!」

「女運が悪いから毎回得たいの知れない女が来るけどな!!!!!!」
「!!!」

「とうま! ひょうかが得たいの知れない女だって言うの!?!」

「充分得たいが知れねえよ!!!」

ガリッ

美琴は懐から巾着袋を取り出すと中から鉄球を取り出し、上条に向けて放った

~~~~~

一方白井黒子は侵入者が出した巨大な何かに掴まれていた

(まさか、外部の人間で能力者!? まずいですわ!)

巨大な何かはそのまま黒子を握りつぶそうとしたが

ドガアアアン

突如放たれた橙色の閃光が巨大な塊に当たって開放された

「これは・・・お姉さまの・・・!」

そう期待して放たれた場所を見るが・・・

「いや、やっぱり自分で突っ込んだほうが百倍安全だったな」

上条当麻だった

「あ、あなた!! 一体どうやって・・・!?!?!? しかも、今のはお姉さまのレールガンじゃ・・・!!」

「んあ? 白井か。ああ、確かに今のはビリビリのレールガンだが」

「なるほどね。つまり、あたしは上手く利用されたわけね」

「……………!!?お姉さま!?何故こんな所に!？」

「俺が持ってきた」

「持ってきたって……物みたいに言わないでくれる?それにしても何よ今の?能力者?」

「外部の侵入者だろ?おいオセロ!今の侵入者ってのは黒人のゴスロリ着た女なんだよな?」

「はいですの。捕まえたと思ったら突然その黒い塊が出てきました……しかし何故外部の者が能力を?」

「そうか……やはり魔術師か……とりあえず、美静に連絡を」

そう呟いて上条は携帯をとりだした

「美静か?今どこにいる」

『地下のゲームセンターですが?と美静は回答します』

「そうか、そこで待ってる」

「どうかしたの?」

「その侵入者のことだが、目的に心当たりがある」

~~~~~

『ふふふふ……みつけた……』

「こ、これは……？」

「土より出でる人の虚像。神殿の守護たる石像を無理矢理に英国の守護天使に置き換えてる」

「あ……何を言ってるのかさっぱりなんですけど……」

「ふふふ……さーパーティーを始めましょ……土の被ったドロクセエ墓の中で存分に泣きやがれ」

転入生（後書き）

風斬「この子・・・もしかして電波・・・？」
ここから先、次の場面につながれなかったんでいったんここで
きります。

侵入者（前書き）

はい、9月1日後編はじまりなのですよ〜！

そういえば、私はどこを最終回にするのかをまだ決めていないのですが

短くて0930事件編、長くてWW？編なのですが、面倒くさいんですよねー（テツラ風に）

一応アツクア戦までは考えているのですが、ミ（サ）ーシャック
ロイツェフが天使になっていないのでWW？編はどうしようもない
んですよねー（テツラ風に）

侵入者

（今あそこにいるのはインデックスと美静、そして風斬の三人か・
・）

「おいパンダ！一応聴いとくが、お前の能力で三人は移動できるのか？」

「いえ、一度に運べるのは二人が限界ですの」

「そうか、だったらまず銀髪の白い修道服を着たシスターを避難させ、次に残った女二人を避難させる」

「わかりました」

そついい残して空間移動テレポートで消えた

「聞こえたな！まずインデックスを避難させるから、お前は風斬を守れ！」

『了解しました。と美静はパ　一砲を構えながら返答します』

「何故にパ　一砲!？」

『この間見たジ　リを見て感動したので前々から製作していました。と美静はジ　リの良さを強調しながら答えます』

「それで最近お前の奨学金が増えたのか・・・まあいい、とにかく風斬を守る。いいな？俺も今そつちに向かう」

ピッ

「今向かうってアンタ、出入り口はふさがれてるのよ？テレポート空間移動でアンタを運べないし、第一アンタは民間人だから黒子も絶対に連れて行かないだろうし……」

上条はニヤリと笑った

「ちよいとねー」

~~~~~

「あの一、何で二人運べるのに一人だけ運んだんですか？」

「敵の目的はあの娘の殺害と思われまますのであの娘を優先し、一人残すより二人残したほうが良いとおもったのでしよう。それに美静は多少の戦闘の知識がありますので、と美静は解説します」

その直後、急に美静が何かを警戒しだした

「来たようです。」

「ヤレヤレ……そこそ腕は立つけど、品がないわね」

「あなたは警備委員を全滅させたのですか？と美静はそうでないことを祈りつつ問います」

「だから行ったでしょ？そこそ腕が立つ程度じゃ、エリスは壊せ

ない・・・」

「一応確認しておきます。あなたの目的は？と美静は嫌な予感を感じつつ確認します」

「あたしの目的はその虚数学区の鍵・・・まあ、ぶち殺すのはその餓鬼でなくてもいいけどね」

「虚数学区の鍵・・・とは？と美静はさらなる嫌な予感を押しのけて問います」

「論より証拠・・・エリス!!」

エリスと呼ばれた石像は突如動き出し、床をを殴った

「!!下がってください!!」

あわてて風斬を突き飛ばし、すぐさま石像にグレネードガンを放ち、腕を吹き飛ばした

「さすがに一発で・・・とはいきませんね・・・」

「まったく、危なっかしいお嬢さんね。エリス!」

女の言葉と共に石像の腕は元通りに戻った  
そして、その腕は振りかぶっていた

「早く!伏せて!!」

ガスッ

聴きたくない音が響いた

「大丈夫ですか！？……！！」

あわてて近寄ったが、

「これは……一体？」

彼女の頭の中身がなかった

中身がないといっても、脳が飛び散ったわけでもない

彼女の頭は陶器のように割れていて、その中に何かが浮いていた

「えっ？何？これ……？」

頭を抑えた風斬が違和感に気づいた

風斬が横の窓ガラスを見ると

突如悲鳴を上げて走り出した

「待ってください！！そっちは

」

ドガッ

腕を振るった石像に吹き飛ばされた

しかし、彼女は死んでおらず、マリオネットのようにぎこちなく立ち上がり、悲鳴を上げながらどこかに走り去っていった

「一体、今のは？と美静は状況を飲み込めずに呆然とします」

「つまり、アイツはエリスと同じ化け物ってことさ」

そう言っただけは彼女のあとを追った

「つまり」

「つまり、風斬は・・・AIM拡散力場の集まりってことだ・・・」

「あなたは・・・」

~~~~~

「ふふふ、何なのかしらね、虚数学区の鍵とか言われてどんなものかと思えば、正体はこんなモンかよ。こんなものを大事に抱え込むなんて、科学ってのは狂ってるよな？」

「どうして、こん、な、ひどい、ことを!？」

「え？何？まさかアンタ、死ぬのが怖いとか言っちゃう？おいおい、いい加減気づきなさいっての。」

「テメエが人間のはずがねえだが、ほら・・・」

女の合図で石像が横の壁を殴り、壁は砕け、石像の腕も砕けた

「私があなたにしていることってこの程度のことでしょう？つまり、あなたはエリスと同じ化け物ってことが・・・テムエの居場所なんてどこにもないってことが・・・」

石像の腕が再生された

それを見て、先程自分受けた致命傷が自動再生されたことを思い出し、涙が出た

「泣くなよ、あんたが泣いたところで気持ちが悪いだけなんだし！」

石像の腕が振りかぶられ、
そして、

パキイイイイイン

突如石像が崩れだした

その様を眺めていると一瞬石像の足元に人影が見えた
煙ですぐに姿が見えなくなったが、煙が晴れてきてそこに
立っていたのは・・・

「化け物・・・ねえ・・・」

上条当麻だった

「風斬が化け物、それなら異常なほど不幸を

呼び寄せる俺のほうがもつと化け物なんじゃねえのか？」

「なっ！」

突如目の前に現れた上条当麻に動揺し、

「安心しろ、手加減はしてやる」

ドカッつと鈍い音と共に女は吹っ飛んだ

彼女が地面を転がると同時に石像が動きを止めた

「オーケー、あとはこれを壊すだけ・・・」

「んふふふふ、ふふふふ」

笑い声に振り向くと女が床に魔方陣を書いていた

「もう一体作るのか」

「いや、一度に二体は持たせらんねえのさ、けどなあ・・・そいつを利用すれば」

突如魔方陣が光りだし、そこに大きな穴ができた。女の姿はない

「やばい・・・！逃げられたか・・・」

「あの・・・なにがですか？」

「あいつは・・・条件さえ満たせば誰でもいい。つまり、インデックスを殺しに行ったわけだ」

「え！？それじゃあ、アンチスキル警備員の人たちに頼めば・・・」

「アンチスキルアイツはこの都市の住人じゃねえ、逮捕される。おい、そこらの警備員からロープをかつぱらって来い」

「いいえ・・・その必要はありません。私が行けば・・・」

「・・・・・・・・・・」

「私はあの化け物に勝てなくても、少なくとも囿ぐらいにはなれま
す・・・私が殴られてる隙にあの娘が逃げてくれれば」

「それじゃあ、インデックスはど
うなるんだよ」

彼女は上条の言葉に怖気づき、思わず後ずさった

「アイツが友達を見捨ててスタコラサツサと逃げる奴に見えんのか
？」

「ち、ちが」

「違わねえだろ、所詮その程度だったんだろ？お前らの友情なんて、
お前にとってインデックスとはその程度の奴だったんだよ」

「違います！！勝手なことを言わないでください！！！！」

「じゃあなんで、一緒に逃げるっている選択肢はないんだ？」

「いいんです！私はあの化け物に殴られても死ななかつた。化け物に立ち向かえる・・・それでいいんです・・・！」

それだけ言い残して風斬は穴の中に飛び込んでいった

「まったく、世話の焼ける・・・」

~~~~~

上条当麻は魔術師の女を追っていた。その後、アンチスキル警備員から盗った口  
ープで降りた。

だが、上条が急に止まった。

そして、止まった時に目の前に柱が倒れてきた

「よう、『ニガー』。あのデカブツはどうした？」

「先に追わせてるわ。今頃、標的のもとに、それとももう肉塊に変えちまつてるかもな。ま、念のため時間稼ぎさせてもらうわ・・・」

地は私の味方。ならば地に囲われし闇のそこは、我が領域！！」

「トンネルごと潰すってか？ならお前はどつする？まさか安全を考えずにやってるわけじゃあ、ねえよなあ？」

「ええ、私の安全を確保してからやってることよ。全て崩れる！！泥の人形のように！！」

「だったら、もうちょっとカムフラージュしろよ。こんなことじゃ

あ俺の前だと安全を確保してないのと同じだぜ？」

パキイン

女の床にあつた魔方陣に触れると女の頭上の壁が崩れた  
あわててトンネルの崩壊を止めるが・・・

「You're making this too easy!!」  
スキだらけだ!!

「はっ!!!?」

バギッ

彼女の顔に鋭い拳が突き刺さり、トンネルの壁に叩きつけられた

「悪いが、テメエに付き合ってる暇はねえ」

「くっ!ちくしょうっ・・・!戦争の・・・火種を作らなくちゃ、  
ならねえんだよ・・・」

ガラ

「えっ」

ガラガラ

「ちよつと・・・それ、は、ない、でしょ・・・?」

ガラガラガラガラガラガラ

ドシャアアアン

悲鳴は聴こえなかった……いや、彼女が生き埋めにされる瞬間、  
わずかに悲鳴が聴こえた……  
悲鳴をあげる前に生き埋めにされたのだろう

「あんだけ崩しゃあ、こうなるだろ。俺を生き埋めにするどころか、  
逆に生き埋めにされたな……」

……  
「ま、俺と長時間一緒にいたこともあるけどな」

~~~~~

風斬・インデックスside

（化け物の相手は同じ化け物がしなくちゃ……!!
私はもう、あそこには戻れない……この時間はもう二度と帰って
こない……）

石像が抑えられている手とは逆の腕を振り上げた

（だからって……だからって！見捨てることはできないっ!!だ
って……）

「だって、友達だから!!!」

石像の腕は容赦なく放たれる

そこへ一つの影が現れる

「えっ？」

「よかつたじゃねえか・・・お前の住んでる世界、まだ救いがあるじゃん」

上条が放たれた石像の拳を殴りつけた

パキイイイイインという音と共に石像は殴られた所からヒビがはいり、崩れ落ちた

もう、優しい幻想はおしまい・・・

~~~~~

「よかつたのですか？アナタは追わなくて」

「俺みたいな奴にアイツを慰めることは言えねえ・・・俺ができるのは、

精々善人を羨みながら、邪魔する奴の幻想をぶっ殺すだけだな」

「でも、あなたは変わったじゃないですか？絶対能力者進化実験をレベルシックスシフト終わらせたとき、あなたが“お姉さま”に一生逃げ続けると宣言したときに・・・」

「変わってねえよ・・・何もな・・・もう変わるうとも思わねえ・・・」

そう、彼は“何一つ変わっていない”彼の持つ強さ以外・・・

## 侵入者（後書き）

相変わらず話のキリ方がわからないですね。

しかも、文章能力は一向に上がらず、不幸だ

まさか、悪条さんの代わりに言う羽目になるとは・・・

## 誘拐犯

私上条当麻は今、学園都市の外にいます。何故かって？

それはですね・・・いつも通り学校から帰宅してみると、隣人の土御門の義妹の土御門舞夏からインプロンプトがさらわれたらしい、舞夏に預けられてた犯人の手紙には「午後七時までに廃劇場『薄明座』跡地まで来い」とのこと・・・犯人の特徴を聞いたところ、「長身で髪が真っ赤で目の下にバーコードがあつて、くわえ煙草と耳に大量のピアス」と、アイツしかいねえよな・・・

で、結局今に至るわけよ。そして、一つだけ腑に落ちない点がある・・・それは

「それにしても何で科学側の人間である美静にも外出許可証が出ていたんでしょうね？」と美静は魔術側に対して疑問を持ちます」

そう、こいつにも外出許可証が・・・  
ちなみに私服です！！

「知るかよ・・・今回は科学側がかかわっても大丈夫な事件なんじゃないねえ？」

「それより、まだ着かないんですか？」と美静はあなたの方向音痴にあきれます。」

「あの一」

不意に声をかけられた

「ん？」

声のしたバス停の方に顔を向けると、

「学園都市に向かう為には、このバスで良いのでございましょうか？」

真っ黒い服を着たシスターがいた

うん、絶対かかわったらいけないな・・・！

そう硬く決意した時に・・・

「学園都市行きのバスはありませんよ。それと、そこからの交通機関も切断されています。向こうにゲートがあるので底前歩いて行けば入れますと美静は丁寧に道案内をします」

案の定、美静が道案内をしやがった

美静が話し終えて数秒後にバスが到着した

「お忙しい中ご助言いただきありがとうございます」

そう言いつつさっき説明を受けたばかりにもかかわらずシスターはバスに乗ろうとする

「バスはダメつつつてんだろー！」

思わずつつこんでしまった・・・

「ああ、そつでございましたね」

そして、笑顔で戻る。



「だから、あそこのゲートから入るの!!」

「すみません、ご迷惑をおかけして」

笑顔で去ったかと思ったら、そのシスターはまたバスに乗ろうとした

「おいしい!!! てめえ!!! さっきから人の話を笑顔で受け流してんじゃねえよ!!」

そしてまた、笑顔で戻る

とりあえず、また乗らないようにバスに発車するように言った

「一つ聴きたいのですが、あなたはIDを持ってらっしゃるのでし  
ようか?と美静は確認をとります」

「ID?」

やはり知らなかったようだ

「悪いけど学園都市にはIDがなきゃ入れねえよ」

「そつでございますか・・・ご迷惑をおかけしました」

そう言って去っていったシスターの方を見ると  
やはり、ゲートの方に歩いていた

これがあと、十数分くらい続きます・・・

~~~~~

「聞かせてもらおうか？誘拐ごっこの理由を」

「なんだバレてたのか・・・いや、大丈夫だ。君達に行方不明の人の捜索を手伝ってもらおうと思ってる・・・でも、もうその必要はない。君の隣にいるそのシスターをこっちに引き渡してくれば」

「Say it again」

「だーからー、そのシスターが行方不明のオルソラ＝アクイナスだ。はい、お疲れ様。君は帰っていいよ」

「おいおいおいおい、この暑い中歩いてきた俺の立場は・・・？」

「お疲れ様って言うてるだろ？なんだ？カキ氷でも奢れと？」

上条と美静は互いに顔を見合わせた。二人とも額に血管を浮かべて・・・

「いやいや、そう簡単に引き渡されてはこまるのよなあ・・・」

突如上から声が聴こえた

「オルソラ＝アクイナス、お前はローマ正教に戻るよりも、我ら天草式と共にあったほうが有意義な暮らしを送ることができるよ・・・」

上空にマリが浮かんでいた

「天草式っ！」

ジャキン

という鉄がこすれる音と共にオルソラのいる地面から三本の剣が生え、その剣が三本同時に動き、オルソラの地面が三角に斬れた。その三角に斬られた地面が沈み、オルソラが地面の下に落ちた。美静があとを追おうとするが、インデックスの杖で制止された。よく穴を見てみると、そこにはおびただしい数の西洋の武器が向けられていた

美静が電撃を穴に放ったが、すでに逃げられていた

「また、魔術師か・・・」

~~~~~

「現状、オルソラ＝アクイナスは天草式の手にあります。今回の天草式の数は、推定で50人弱で今は地上に上がっちゃってる可能性も・・・」

「つまり、何にもわかんないってことかな？」

「魔力の痕跡から天草式の動向を追ってはいやすが」

「天草式は隠れることに特化した集団、簡単にはつかまらないよ」

「でも、うちの包囲網を突破しちまえる方法なんて

「

「特殊移動方・・・縮図巡礼・・・日本国内限定の術式なんだけどね・・・簡単に言えば、日本中に特殊な渦が四十七箇所あって、その間を自由に行き来できる」

「じゃあ、何をのんびりしてんですか！」

「急ぐ必要がないからだよ。縮図巡礼には星の動きが大きく影響してくるの。きまった時間じゃないと、特殊移動方は使えない。まだ四時間半くらいの余裕はあるよ。当麻、地図のピコピコかして」

「ああ、ほらよ」

上条が携帯の地図を床に置く

「この包囲網で渦を使えるのはここだけ」

携帯の画面を指差しながらインデックスが言う

「それでは、我々が囷になって、正面から天草式と激突します。その間にあなた達がパーク内を探索して、法の書とオルソラを確認できたら確保しちまってください」

~~~~~  
パーク前

「ステイル、一つ聴いていいか？」

「なんだ？」

「あいつらは法の書とオルソラの確保とかいってたけど、別にオルソラだけでも確保すれば法の書なんてただの本だよな？」

「ああ、確かにオルソラがいなければ宝の持ち腐れだ」

ドオオン

突如、遠くで爆音が聞こえた

「始まったようだ」

「俺はこっちへ行く、美静は向こうで、お前らはそっちを行け」

「そうかい、ならこれを持って行け。死にたくなければね」

そういいながら何かをステイルは上条に投げたが、

「No, thank you」

投げられたそれを上条は叩き落とした

「なっ!?!」

「俺は死なねえよ」

そう言って去っていく上条の背中を見ながら、啞然とする三人

~~~~~

「早速おいでなすったね。」

目の前に若い男女が現れた。一見、一般市民にも見えなくもないが、手に持つてる色々な種類の西洋の武器がそれを台無しにしている

「やれやれ、ツイてねえなー、  
お前ら………本当  
にツイてねえよ」

上条はいつも通り右手をパキパキと鳴らす

いきなりこちらに振られてきた剣をヒョイツとかわし、相手の女の懐に飛び込むと、女はすかさず後ろに跳んで上条に向かって剣を振り下ろすが、それを左手で止められて腹に重いボディーブローが入った

バンツ

と何か破裂したような音がした気がするが気にしてはいけない  
上条は掴んでいた左手を剣の柄の方にずらし、剣を奪い取った  
上条が剣を奪い取ると、残った二人が両サイドから攻撃を仕掛けて来たが、上条は片方を剣で地面へ受け流して相手の持つている武器を叩き折って、もう片方の敵に先程武器を無力化した相手を投げて、二人まとめて蹴り飛ばした

この間、わずか4秒

「さーて、つきへ行、うおっ!!」

次へ行こうとする上条へ突然体当たりがあたって押し倒された

「……ってて……ん？オルソラ？」

「んーっ!んーっ!」

何を言ってるのかわからないのでとりあえず口に張られている物を剥がした

「あ、あなた様はバス停でお会いした・・・」

続いてオルソラの手を縛っている縄を解いた

「何故こんな危険な場所に？」

「『助けに来た』それでいいだろ」

「本当に助けに？」

「そつだ」

「法の書など関係なく？」

「俺には価値なんてわからないしな」

「それはお世話様でございました」

「ああ、あとは0：05まで隠れとけば大丈夫だ」

「そつさせるわけにはいかないのよなー」

オルソラがビクツとかたを震わせた

「お前が頭か？」

「建宮斎字、よろしくなのよな。それにしても、さっきの見事だったのよな」

「見てたのか？ずっと」

「ああ、驚いたのよな、部下が複数でかかって五秒も持たないとは……」

「あんたも大変だな、あんな無能な部下を持つちまって」

「今なんか言っただか？」

建宮がドスの利いた声で言うが、それに対して意地の悪い笑みからまったく表情を変えずに続ける

「だから、無能だつていつたんだよ。ホント、部下が部下なら上司も上司だよな……神裂が何故抜けたかがわかったよ……ま、アイツも充分無能だったけどな」

「おい、今言ったことをすぐに撤回してほしいのよなあ」

「俺は本当のことを言ったまでだぜ？どうやって撤回するんだよ？」

「そうか、別に我々は我々が侮辱されても構わない、だが女プリエステス教皇様を侮辱することだけは許さないのよな……！！」

「はっ！侮辱だと？俺はただ本当のことを言ったただけだろ？ああ、



もつと言ってやるよ！神裂は上司つえの言うホラを真に受けてまだ十代前半の女の子を平気で痛めつけるアホだ！！その上そのホラを善良な市民に教えて核心をついたことを言った善良な市民をボコボコにしようとした・・・女プリエステス教皇失格なんだよ！！！！」

「黙れ・・・」

「お前らもそうだ！何がsalver000《救われぬ者に救いの手を》だよ！！目の前の救われぬものを二人も不幸にたくせに  
よー！！！！」

「黙れツつってんだよお！！」

向かってくる建宮を見てもまだ笑っている上条

「ほら！そうやってすぐキレてこっちに向かってきやがる！！」

そんなことを言っている上条の頭に容赦なく建宮のフランベルジェが振り下ろされる・・・  
が、その動きが止まった

ピシッ

何かにヒビが入る音がした

「あ、あ・・・ぐあっ」

建宮の右手首に上条の左拳が入っていた  
さっきの音から右手首にヒビが入ったようだ  
振り下ろして急に止められた勢いで持っていたフランベルジェを手  
放してしまう

上条はそれをすかさず後ろ手でキャッチし、柄を両手で持って建宮  
の鳩尾に叩き込んだ

「ぐっ……は……」

建宮は吐血して体がくの字折れた、というより折りたたまれた  
それによって下がった額にフランベルジェの柄を上条は思いつきり  
叩き込んだ

頭蓋骨が碎ける音と見事な放物線を描き、建宮は昏倒した

「聖人ってスゴイ、改めてそう思った」

上条はどこかの寺生まれの人の友達のような台詞を吐き捨てた

## 誘拐犯（後書き）

Tさん「呼んだ？」NNY「呼んでねえよ」

何か建宮のセリフって難しいですね

まあ、ローラよりは簡単ですけどね

ちなみに、ローラの口調があまりにも難しかったので1日かけて半分ほど書いたローラの台詞セリフを全部没にしたのは内緒です（＾|＾；）

## 異端者（前書き）

親にマイPCのネットを切られましたw

だから今後の夏休み終わりまで投稿が遅くなる可能性があります。

しかし、宿題を終わらせればPC復活するのに宿題を終わらせてない俺がいる。

あと最近、鏡に対して何か特別なものを感じる俺ガイル

ダレカタステテ

## 異端者

「話してもらおうか、何故オルソラを攫ったのかを」

「何故それを聴くのよな」

「オルソラを引き渡すとき、なぜかオルソラは怯えていたからだ」

「お前さん、『法の書』を解読させるためとは考えないのか？」

「そんなもん・・・はじめっからないんだろ？」

「ほお・・・どうして気づいたのよな？」

建宮が関心したように言った

「元々『隠れる』ことを主としているお前らが、そんな大それた目立つモンを必要とするはずがないだろうが」

「ああ、そうだ。我等は『法の書』なんぞ初めっから盗んじやいねえのよな」

「話を戻す、何故オルソラを攫った」

「我々は彼女を匿っただけなのよ」

「匿った？」

「そう、十字教最大宗派である彼らが、十字教の終わりなんて思わ

んよな。だからローマ正教はオルソラを殺すことにした、彼女はそれに気づき、我等天草式に助けを求めてきたのよ」

「で、どうしてオルソラは助けを求めた相手であるお前から逃げたんだ？」

「彼女は、最後まで我々を信じることができんかったのよ・・・見返りに『法の書』の解読方法を求めてくると・・・」

「それじゃあ、何が理由でオルソラを」

「理由そんなものなんてねえのよ、はなっから。我等はあの方の、女教皇プリエステス様の背中を見てきた。だからこそ我等は道を誤らず、力の使い方を間違えず、常に正しい道を歩んできた。だから我等は助けを求める彼女に手を差し伸べたのよ」

その時、遠くでオルソラのものと思われる悲鳴が聴こえてきた

「つまりオルソラは」

「そう、オルソラ「アクイナスは我々でも、ローマ正教でもなく、お前さんを信じていたのよ」

しばしの沈黙・・・

それを破ったのは上条の笑い声

「フフ、ハハハ、アハハハ、なんだよ、こりゃ傑作じゃねえか・・・今まで自分の不幸に巻き込んで他人を不幸にしてきたが、まさか俺が無理矢理作った不幸であいつを不幸にしちまうなんてあ・・・笑えるじゃねえか・・・！ああ！！笑いが止まらねえよ・・・！！」

ちょうどその時、建宮を回収しに来た者が現れた

「異端の首謀者の身柄を預かりに参上致しました」

猫目のシスターが建宮のほうを見た

「神の敵はそちらですか？」

「ああ」

上条の“右手”が建宮の肩を触った

パキーン

建宮の体に貼り付けてあったルーンが消えた

「なっ」

「おっとワリイな間違えて解除しちゃった」

わざとらしい演技で上条がほくそえんだ

「何のつもりですか！！」

「いやー、本当なんだよ、本当に間違えちゃったんだって」

ニヤついた顔で上条が言った

それを見て上条らが裏切ったことを悟ったシスターは持っていた木製の車輪を地面に叩きつけた。叩きつけられた車輪は爆散し、その破片が上条を襲った。

通常なら避け難いが上条はそれを難なく回避した

「おいおい、随分とヴァイオレンスな攻撃だな」

「ええ、反逆者にはピッタリの攻撃でしょう」

爆散したはずの車輪に破片が集まり、また元通りに木製の車輪に戻った

ピイイイイイイイイイイイイイ

遠くで笛の合図が鳴った

「退却命令・・・シスター・アンジェレネ！」

アンジェレネと呼ばれたもう一人のシスターは「はい！」と返事をして、去って行く猫目のあとに続いて退却していった

「やれやれ、これでお前さんはローマ正教に狙われることになったのよな」

~~~~~

夜道を上条、インデックス、美静、ステイル、建宮らが歩いていた

「つまり、オルソラは神の教えを信じているからジャイアニズム魔女裁判にかけて強引なやり方で教会を追い出して殺すってのか」

「そういうことだ、ここらか先は僕らイギリス清教の出る幕はないんだ」

「ああ、そうだな。俺もわざわざ自分から不幸になりに行くなんてのはごめんだ」

「そう肩を落とすな。イギリス清教には戦争を起こす理由なんぞなくても、天草式には大有りなのよな。連中の所にごめんくださいして、うちの馬鹿共を助けるついでにオルソラ嬢も助けといてやんよ」

「そんな装備の一人で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ないのよな」

死亡フラグを吐き出して建宮はその場を立ち去った

「僕らもここらで解散としよう。君ら三人は学園都市へ戻れ。行くぞ」

「そういえば、ソーメンの汁を切らしていたんだ。ちょっと、行って買ってくる。お前らは先に学園都市に帰還しろ」

「場所はわかってるのかい？」

「その辺走つとけばいずれは着く」

インデックスらから離れた後、上条は携帯を調べていた

『オルソラ教会？』

『はい、彼女は三ヶ国の異教地で教えを広めたという功績で、自分の名を冠する教会の建設を特別にいただいたんで、たしか、このあたりだったと思いますよ』

オルソラ教会にて

オルソラ教会についた上条
しかし、途中で何かかに阻まれた。どうやら連中は結界を張ってあるようだ

こういう場合はどうするか？決まっている・・・

(正面から堂々とだッ！！)

心の中でそう叫ぶと上条は行く手を阻むソレを殴りつけた

パキイイイイイン

「ゴメエンクウダサアアイイ！」

バギツという音がして教会の扉は吹っ飛んだ

中には大勢のシスターがこちらを睨んでいた

数は大体250 - 5人くらいだろう。たった今吹っ飛ばした扉に巻き込まれたようだ

「ただの素人が何で？と思いましたが・・・結界に対して絶対的な能力ちからがあるわけですね」

「幻想殺しだ・・・以後よろしく・・・」

「で、何のようですか？ああ、報酬ならその女を剥いちまってもいいですよ？」

「それはいいものだけどよ、俺はそんなことよりやりたいことがあるんだよ」

ダツと上条がアニメーゼに向かって一直線に駆け出した

この状況で相手がやることは一つ、殴ること。しかし、それは同時に開戦の合図でもある

アニメーゼは咄嗟に腕でガードをしたが上条が繰り出した拳にそのガードごと吹き飛ばされた

拳は直接顔には当たらなかつたが、殴られた腕で間接的に顔を殴られた。上条は開戦の合図としてアニメーゼを殴つたため、アニメーゼは鼻血をたらずぐらいで済んだ

「貴様ツ！何のマネだこれは！！」

「理由なんざねえよ、ただ手前らにむかついたからだ。強いて理由を挙げるとするならば、罪滅ぼしのためだ・・・・・・助けるんだよ、このオルソラ」アクイナスを・・・」

「この状況であなた一人で何ができるかを・・・見せてもらいますよつか！！」

アニーゼの言葉を合図にほかのシスターたちがいつせいに武器を構え始めた

上条はただの学生だ。しかし、ただの学生ならビクビク心の底で怯えるようなこの状況に心を1mmも動かさず、むしろ笑っている、両手を広げて上体を反らし、笑っている……

「あーあー、いいねえ……！今日は気分がいいっ！ほら、さっさとかかって来いよお！！」

シスターたちがいつせいに上条に襲い掛かるが

ドゴオオン

教会の壁に突如爆発が起きて大きな穴があいたそこにいたのは

「勝手に始めないでほしいのよなあ」

建宮 たてみや 斎字 さいじ だった

さっき一緒だったときはフランベルジェをともに持つことができないダメージを負っていたが、仲間の魔術によって回復している

「ああ、そういうえば忘れてた」

「おいおい、それはひどいんじゃないのか？こっちはお前さんが動く前に決着をつける手筈だったんだが、恐ろしいな……お前さん……想像以上に馬鹿で恐ろしいのよな。戦闘ができる集団のアジトまで一人で、しかも丸腰で来ることを些かの躊躇も持たないとは、そういう馬鹿は嫌いじゃないけどな」

(はぁーあ、どいつもこいつも、魔術サイドには馬鹿ばかりだな)

異端者（後書き）

以上、法の書：中編でした

本当はここでステイルらを出すつもりでしたが、オルソラに首飾り
をかけていないので出しませんでした

裏切者（前書き）

ふと、思ったんですけど、この物語の上条さんは原作一巻の上条さんと同一人物であり、原作二巻以降の上条さんとはまた、別人である。

そう考えると、すごく悲しいですね

裏切者

教会内での戦闘が始まった

(とにかく、まずオルソラを安全な場所に・・・)

オルソラを抱えている上条に後ろから敵が攻撃を仕掛けてきたが、上条は身をかがめて、その反動で足を思いつきり後ろに上げ、敵の武器を吹き飛ばして敵の集団に向かって蹴り飛ばした。突然横から味方が飛んできて集団がばらけてしまい、敵はそのまま倒された。

上条は教会の出口へ進むが、その行く手を遮る敵が数人いた。もともと腕での技が中心の上条に足技を中心にするスタイルは向いていない。本来、人間の足は移動に使うものであり、攻撃に使うものではない。(と作者は考えている)おまけに今はオルソラを抱えているために攻撃の精度も著しく落ち、オルソラに配慮のある攻撃をする必要がある。よって、使える攻撃は限られるため。相手にできるとしてもせいぜい三人を倒して四人目に不意打ちされるのが関の山である。そうこうしていると、いつの間にか目の前に槍を持った女性が飛び出し、あっという間に敵の集団を倒した。

「助かった。またな」

(上条にしては珍しく)軽くお礼をして上条はその場を去った

外へ出てみると結構な人数が待ち構えていた。

やはりオルソラを護衛しながら闘うのは上条向きではないため、逃げることにした。

逃げて逃げて逃げて逃げて、そしてたどり着いたのは小さな建物。

「とりあえず、「ここならばらくは見つからないだろ」

バリケードを張ろうとしたところ、ちょうど建宮が入ってきた

「たくっキリがねえのよ」

「おい、建宮！」

「ん？」

「ちょっと頼みたいことがある・・・」

~~~~~

ギイという音を立てて扉が開いた

「待たせたな」

「・・・・・・どう考えても、あれだけの数の中で自由に動けるとは思えないんですけどねえ」

「簡単。オルソラは他の奴に託した。そして、後はみんなでがんばってくれてる」

「それって単なる囮作戦でしょう？オルソラは言っていましたよ？」  
「彼らは信じることで行動する」と、まったく笑っちまいますよね？  
結局あなたも誰かをだまして行動していると」

「いや、むしろ俺と一緒にいることが危険なんだよ。お前らわかってねえだろ？俺をそばに置いてくのがどんなにアブないことか」

「それなら、さっさと片付けられちゃってください」

アニメーゼが護衛に腕で合図をだして護衛たちは戦闘態勢に入った

「来たれ十二使徒の一つ」

建宮を回収しに来たシスターと一緒にいたシスターが呪文を唱え、金貨袋三つに小さな羽が生えて宙に浮いた。宙に浮いた金貨袋はそのまま上条に向かって一直線に落ちてきた。中には金貨がぎっしり詰まっているため、結構な重さがありそうだ。しかし、金貨袋は上条に直撃せず、二つは上条によって解除され、もう一つは地面にめり込み、上条の足で踏まれていた。

「たしか、金貨袋はマタイの象徴、マタイ伝承をモチーフにした魔術か……って、俺ってなんでこんなマイナーなことはしっかり覚えてて、勉強のことは覚えてないんだ？」

自分の馬鹿さにげんなりしつつ、足元の金貨袋に右手で拾い上げて解除し、金貨袋はただの重い金貨袋になった。

「さて、ネコババはいけないし、ちゃんと落とし主に返してあげよう！ほら、お嬢ちゃん！落とししたよ！」

上条は金貨袋を軽く振りかぶって小さいシスターに投げた。金貨袋はシスターの頭に向かっていき……

「きゃいんっ！ー！」

見事におでこに当たって倒れた

「運がよければ生きてるだろ。オーケー、残りの奴ら。さっさとかかって来いよ！」

数秒間の間をおき、残りのシスターたちがいつせいに襲い掛かってきた。上条はまずその中の一人を蹴り飛ばして団体を崩し、それに目が行ってしまった一人に掴み掛かって頭突きを喰らわせて、また襲い掛かってきた一人に向かって突き飛ばした。体制を立て直した数人の中の一人に拳を突きさし、残り三人で二人を延髄チョップで昏倒、残った一人の鳩尾を殴って昏倒させた。

「さて、残りはデメエだけだ」

「司令たる私を潰せば全攻撃を潰せると？いいでしょう、ちようどこっちも退屈しちまっていたところなんですよ。万物照応。五大の元素の元の第五。平和と秩序の象徴『司教杖』を展開。偶像の一。神の子と十字架の法則に従い、異なる物と異なる者を接続せよ」

カーン

杖で床を叩く音が響いたとき、上条は股間に何やらいやな汗を感じた。

「ノオオオオオオオオオ！！！！？」

神裂との闘いを思い出してあわてて股間を右手で押さえると右手で何かを壊したと感じた

「おまつ危ねえだろ！何なの！？魔術側の女どもは上条かみじょうさんの下条しもじょうさんに恨みでもあるんですか！！！！？」

「戦闘において得体の知れない相手を一撃で沈めようとするのは当然のことでしょうか？」

「他に急所あるじゃん！！なんで金　！？」

「そうですね、なら他の場所を打ってあげちゃいましょう！」

カーン

また同じ音が鳴り響いた。

右側にいやな予感がした上条は頭の右辺りに手をかざした。案の定、右手が何かを打ち消した。

しかし、右手が右側に行ってしまったということは、左側はスキだらけ。アニーゼはそこを狙って再度杖を叩き付けた

カーン

上条は左側に右手をかざそうとするが

ドゴツ

という音がして上条は右に吹っ飛ばされた。

それを見逃さずにアニーゼは杖を叩く、上条が吹っ飛んでいった方に攻撃が行き、上条はドア付近まで吹き飛ばされ、次は背中を打たれて前に吹っ飛んだ。上条はめちゃくちゃに動くマリオネットのように弄ばれていた。何度目かの後、上条は体勢を立て直して次の攻撃を避けようとするが、

ドカッ

「ぐはっ!!」

吹き飛ばされた

「単調に避けられちまうなんてことはありませんよ。動きを先読みして攻撃をしかけちまえば、獲物は自分から攻撃を位に行くのですから」

そう言つて上条をアニメーゼは嘲笑う

（先読みか・・・なんだ・・・俺の神の導き《アドバイス》の予知より精度悪いじゃねえか・・・だが、目の前が真っ暗だ・・・予知ができねえ・・・どうすれば・・・）

ああ、こうすればいいのか・・・）

上条はアニメーゼに向かってダッシュした。

「なんですか？あきらめちまっただんですか？ならお望みどおりにしてさしあげましょう」

上条は走り続ける。アニメーゼが杖を叩きつけ、その音が鳴り響いても走り続けている。

はずだった

カーン

ドガンッ

「っ!？」

上条の頭蓋骨を砕くはずだった衝撃は上条の目の前に落ちた

(そんな!奴はずっと同じスピードで走り続けてた!だから衝撃が来るころにはあそこに立ってたはず!)

パキイーン

気がつくとも上条がすぐ目の前まで迫っていた

バキッ

「ぐッ!」

上条の男女平等パンチで後ろに飛ばされた

「何故?ってか?簡単だよ。昔読んだ漫画で体勢を変えずに後ろに下がる技術をムーンウォークの要領でやった。相手の正面にいて、相手の頭をかち割ることを考えていた奴に俺が後ろに下がってるなんてわからないだろうからな」

ここで付け足すように言った

「まあ、人の頭をかち割るのに頭に注目していたから、ムーンウォークの要領でやるってのは意味がなかったけどな」

上条の黒い笑みでアニエーゼは昔を思い出した

(また、戻るのか？あそこに?)

ゴミ捨て場でうずくまっていた映像がアニエーゼの頭の中に鮮明に映し出された

「いや、だ、」

「あ?」

「戻って、たまる、か、」

「………お前がどんな人生を送ってきたかなんて俺は知らねえ」

「戻ってたまるか?!」

「お前の負けだ。アニエーゼ」サンクティス、あきらめてもう一度やり直せ!」

上条の拳がまっすぐアニエーゼの顔に向かう。一直線に

「ぎっ!いつ!……」

突き刺さった。後ろに思いつきり吹き飛ばされ、偶像に打ち付けられた

「もっと派手にキメたかったなあ」

無表情で上条は呟く

~~~~~

「んっつうう・・・んあ？」

上条が病院で目が覚めるのはこれで二度目である

「起きましたか」

「神裂か、何のようだ？」

「えっと、オルソラ」アクイナスのその後の動向について伝えに来たのですが」

「で、どうなった？」

「オルソラ」アクイナス及び、天草式はイギリス清教の傘下に入ることでおさまることになりました。これは、ローマ正教の報復暗殺を防ぐという役割が大きいです。オルソラが持っていた偽の解読法を公開し、これが誤訳とわかれば彼女が『法の書』がらみで追われることはないでしょう。それと・・・」

「ん？まだあるのか？」

「今回は、迷惑をかけて申し訳ありませんでした。一度だけでなく、二度も救っていただいて・・・」

「何言つてやがる。お前らが助かったのは俺が私情でオルソラを救ってたまたまお前らも助かっただけだ。それに、俺は私情で動くの

は今回限りにする。いつも助かるとは思っなよ?」

ぶっきらぼうに答える上条を見て神裂はやさしく微笑んだ

「あなた、変わりましたね」

「変わってねえよ。俺は生まれてから一回しか変わってねえ」

「そうですか。それでは私にこれにて失礼させていただきます」

「おう、帰れ帰れ」

神裂が退室するとお決まりのように誰かが部屋に入ってきた

「とーま!大丈夫?生きてる?」

「足はついてる」

「よかったあ・・・!とうまっつてば、一人で敵のアジトに乗り込んじゃうんだもん。あとはイギリス清教が何とかするって言ったのに」

「言っただら?今回は私情で動いたって。そういえば美静はどうした?」

「え?さっきまで一緒にいたんだけど・・・」

「とりあえず、お前は先に家に帰ってる。家にいなかったら俺が探しておくから」

「うん、わかった。じゃあね、とうま」

ガララ

ピシヤ

「やて、と」

上条はおもむろにベッドの上で立ち上がり、ジャンプして思いっきりベッドに衝撃を与えた

「イタッ！！」

ベッドの下から物音と同時にかわいらしい声がした
上条はそれを引きずり出すと

「やっぱりそこにいたのか」

「いつから気づいていたのですか？」

「ずっと起きてからだよ。何してやがった？」

「え、えっと、別に私はベッドに盗聴器とカメラを仕込んであなたのあんなことやこんなことを録画しようなんて思っていないですよ？と美静は思わず真実を話しつつ嘘を吐きます」

「そうかそうか、そんなに死にたいようだな！？この変態がっ！！」

ギャーギャーワーワー

~~~~~

病院の外にて

ギャーギャーワーワー

外にもまる聞こえの上条の病室の窓を見て微笑む神裂

（上条当麻、貴方はぶっきらぼうに答えていましたけど、貴方は本当は誰かが困っているとかと理由をつけて助けに行ってしまう恥ずかしがり屋さん）

クスツと笑う

（確かに、貴方は変わっていませんね……だって、）

貴方は優しいんですもの

## 番外編その弐：負けて勝負（前書き）

先に注意しときます。完全なるネタです  
ただ何となく書いてみました。見ることはあんまりオススメしませ  
ん、それでもよいという方のみどうぞ  
携帯で書いたので話が少々雑です。

## 番外編その貳：負けて勝負

9月某日

「あ、暇だ。暇です。暇なんですの三段活用」

このぶつぶつ呟いている少年は一見ただの高校生に見えるが、実は学園都市第一位の絶対能力者（レベル6）である。なぜ彼がこんな状態なのかと言つと・・・

「インデックスは小萌先生ん所、美静は調整でカエルん所」

だからである

そこへ何者かの影が迫る

「お前か？噂の絶対能力者（レベル6）ってのは・・・」

「誰だ？お前は」

「俺は夜刀神 弧影、この学園都市本当の最強の能力者だ！研究員どもは馬鹿だから俺を強能力者（レベル3）ってつけてるけどよ、俺が本気出せば学園都市第一位の能力者なんか赤子も同然なんだよ」

「ふーん、んで？どんな能力なの？」

「答えてやるよ、俺の能力は確率変動だ。ヒューマンズ 純粹な100%と0%以外の確率を自由に操れる能力だ。例えば、今お前の所にトラックが突っ込んできて、お前に衝突する確率は0%じゃないってことは？」

キキイーツ

「!?!」

突如突っ込んできたトラックで上条の姿が見えなくなった

「おやおや、お前につっこむ確率は0%だったようだな。お前運がいいな」

なんと上条は平然とそこに立っていた

「まったく、行きなり攻撃してきやがって。つまり、お前は俺を倒して強さを証明し、絶対能力者（レベル6）になる。そういうことか」

「ご名答！俺はお前を倒して学園都市最強になるんだよ！！研究員どもは俺を強能力者（レベル3）止まりになるとかほざいていたけどよ？それが間違いだってことを証明してやるぜ！」

「おけ おけ、そんなに妄想《幻想》を証明したきや。相手をしてやる・・・だが一つ言いたいことがある」

「？」

「お前、その能力が本当にあると思ってんのか？」

「どついうことだ!?!」

夜刀神は明らかに動揺している

「例えば、上から鉄骨が降って来るとしよう、その鉄骨が降ってく

るのは100%だから降ってくるんだろ？だつたらテメエの能力で操作できるはずがないだろ？つまり、さっき俺にトラックが突っ込んでこなかったのは、テメエの能力はニセモンだつたってことだ」

「そ、そんなはずは、お前の頭上にその工事現場にある鉄骨が降ってくる確率は0.000043%！だからその鉄骨はお前の頭上に降ってくるッ！！」

夜刀神がヒステリックに能力を発動させた。しかし、上条の頭上に鉄骨は降ってこず、夜刀神はさらに動揺した

「何故だ！？何故発動しない！？」

「だあから言つてんだろ？お前の能力はニセモンだつたんだよ。テメエの確率変動はお前の妄想だつたんだよ」

「そんなはずはっ！たしかに俺には能力が……」なかつたんだよ、いいぜ、まだそんな妄想抱いてるつてんなら。俺がその夢から引きずり出してやる」

上条は夜刀神の懐に潜り込んでいた  
それに気づいた頃にはもう、遅い。上条の拳が夜刀神の顎を砕いた

バギヤ

「オ、オレニ、は最強ノ、ノウ、リヨクがアルン、ダ」

「研究員の言う通りだよ。俺のハツタリに動揺して自分だけの現実が崩れているようじゃ、お前は超能力者（レベル5）はおるか、大

パーソナルリアリティ

能力者（レベル4）にすらなれねえよ」

ピリリ

上条の携帯が鳴っていた

『とーま！今何処にいるの！早く帰ってきてよ！』

「って……もう帰ってきてんのかよ」

『お腹好いたんだよ！早く帰ってこないと冷蔵庫の中身全部食べちゃうかも！！』

「何い！？そうはさせるか！！」

携帯を閉じ、上条は夜刀神の『脱け殻』を無視して家まで全速力で走っていった



## 番外編その弐：負けて勝負（後書き）

ちなみに確率変動<sup>コッドダイス</sup>という能力はどこかにあったコピペが元ネタです。なんと言うか、納得できなかったものでして、とりあえず能力を否定してみました（全身全霊をかけて）

それと、ラストでインなんとかさんが普通に携帯を使っていたことには目をつぶってください

## 案内人（前書き）

ハシヨルべき所と、そうでない所がいまいちわからずな今日この頃  
続きを書かせていただくぜえい！まあ、基本的にアニメ版を参考に  
しています。

## 案内人

「ねえ、とうまとつまー」

「あん？」

「地図に年輪みたいなものが書いてあるけど、これって何？何でこんなもので明日の天気がわかるのかな？」

「そりゃ、等圧線つつつてな。同じ線の所は気圧が同じで、その線が密集しているところは気圧の変化が激しいってことだから、風が強くなる。それで雲の動きを予測してるんだらう。よくわからんが

「にゃー」よお、アヌビス。元気か？」

「スフィンクスね。でも、たまにこのお姉さんは時々外れたことを言ったりするけど、おっちょこちよいいなのかな？」

「調べるのは別の人がやって、お姉さんはただそれを伝えるだけだ。お姉さんは悪くねえ。あ、オシリス。ちよつとこつち来てくれ。そっつえば美静は？また、調整？なんか多くねえか？」

「スフィンクスね、なんで冥界つながりなのかな？美静？調整じゃないみたいだよ。確かにカエル医者 of 病院に言ってるけど、何かを作ってるみたい。何かニヤニヤしていたけど、何なんだろうか気味が悪いかも」

「安心しろ、すぐに元に戻る。ほーら、ツタンカーメン。試食タイムだ」

「ス・フィ・ン・ク・ス！ それはエジプトの王様！それと、ずるいよとーま！私がつまみ食いすると怒るくせに！」

「お前のつまみ食いは最早つまみ食いじゃねえだろ！んじゃ、俺ちよつと買い物行ってくるわ。飯はここに置いとくからな」

「ムグムグ。いってらっしゃーい」

「もう食ってるし・・・」

~~~~~

路地裏にて

「いやー買った買ったー。まさか、たまたま特売がやってるなんてな。ぜってー不幸がやってくるんだらうなー」

上条がこれからやってくるであろう不幸に落ち込んでいる（といっても簡単に回避できるが）とちよつと遠くから争うようなと何かが倒れるような音がした。どうせ不良どもの喧嘩だらうとそこを覗いてみると、数人の男達が二人の少女の下に倒れている。上条はその片方の少女をジャッジメントしている、白井黒子、風紀委員だ。足元に転がっている銃はどれも外部の銃。技術泥棒だらうかと考えているといつの間にか白井黒子の方はキャリアケースに座っている少女の前に跪いた状態でした。その少女は白井黒子に何かを話している。その中にひっかかる“ワード”がいくつかあった。

『御坂美琴』レムナント 『残骸』ツリー 『樹形図の設計者』ダイヤグラム 『実験』

それらのワードで思い浮かぶ実験といえば・・・上条の足は自然と彼女らの元へ向かった

「“アレ”が復元されれば終わった実験は再び行われる。悪あがきしたくなる気持ちはわからなくもないわ」

「実験？」

「第二次絶対能力者進化実験ってことだろ？」

ふいにかげられた声で二人が声の主のほうへ目を向ける

「学園都市としては絶対能力者（レベル6）が二人いるに越したことはない。だから『実験』は再度行われる・・・そういうことだろ？」

「あら、あなた実験関係者？」

「まあ、そんなとこだ。質問に答えてもらおうか、その実験で妹達シスターズは何人殺される？」

「さあね、でも少なくとも一万体は殺されるんじゃないかしら？」

「させねえ・・・」

「は？」

「そんなことはさせねえ・・・」

上条は駆け出した

その上条に向かつて少女は躊躇なく持っていた鉄矢を三本とも上条の脇腹へ転移した。

カランカランカラン

しかし、路地裏に響いた音は空間移動テレポートによる“性質の音”ではなく、鉄矢が地面を転がる音だった。

彼女がそれを理解すると、目の前にいた上条は腕を振りかぶっていた。それを見た彼女は咄嗟に車を目の前に転移させた

一方上条は突如目の前に現れた車に眉一つ動かさずに振りかぶっていた腕を下げ、車を思いつきり足で蹴った。

蹴られた車は車の裏にいるであろう彼女の方へと吹き飛ばされた。

地面を転がった車が止まり、上条はその車の周囲を確認したが、その少女の姿は見当たらなかった。

「ちっ！逃げられたか・・・！」

上条は例の少女を追跡中である。

その前にいくつかの彼女に関する情報を入手していた。

名前は結標むすじめ淡希あわき

大能力者（レベル4）の空間移動系『座標移動』ムーブポイント直接物体に触れず

に転移が可能で、空間移動系ではトップであり、本来なら超能力者（レベル5）に認定されるはずだが、とある事故で負傷してしまい、

自分の転移で体調を狂わすほど精神を削られるために大能力者（レベル4）となっている
空間移動系は幻想殺イマジンブレイカーとは相性の悪い能力で、普通に闘えば勝つことなど容易いが下手をしたら先程のように逃げ切られてしまう。今度逃げられたら“オシマイ”、だからこそ次の対峙で決着をつける必要がある。そして上条は相手に逃げられないように、相手の“弱点”である『よっぱどのがない限り自身を移動できない』つまり一撃必殺系の攻撃を無闇に仕掛けない。あくまで一撃必殺はフィニッシュ技として繰り出す

（今、美静に調べさせているが、それじゃあ遅すぎるっ！間に合わねえ・・・）

上条が頭を抱えていると、ちょうど御坂美琴が電話ボックスで何かをしていた。おそらくハッキング（クラッキング）だろう。様子からしてこの事について把握しているようだ。

「おい！ビリビリ！」

電話ボックスから出てきた美琴に上条は話しかけた。
美琴はそれに振り向いた

「何よ？」

一瞬戸惑いの表情を浮かべたがすぐに冷静な顔に戻った

「結標淡希の居場所を教えろ」

「っ！何で、アンタがそんなこと聞くのよ」

動揺して問い詰めてくる美琴に上条は冷静に答えた

「レムナント
残骸」

「っ!？」

「今回は利害の一致だ。教える・・・知ってるんだろ？」

~~~~~

結標 淡希は追い詰められていた。

それもそのはず、夕方に会ったあの不気味な少年。確実に少年の胴体にテレポートしたはずの鉄矢が全て少年の衣服すら破かずに外れた。その後、なんとか少年から逃げ切った先には超能力者《レベル5》であり、常盤台のエースである御坂美琴の攻撃を受けたからである

「なんなのよ・・・！超電磁砲レールガンの方はともかく、あの男は何!? 能力を使うそぶりすら見せなかった！なのに何故?! どうやって、座標移動避けたの!？」

ガスッ

その音がした時、頭の中で？が浮かんだが、自分が攻撃されたことはわかった。しかし、痛みはすぐには感じず、徐々に痛みを感じてきた。

自分を攻撃した武器を確認する。それはコルク抜き、見覚えのあるコルク抜き。白井黒子からキャリーケースを奪うときに使ったコルク抜きだ。



「それは、あの方があなたよりもずっと高い能力レベルにいるからですの

結標が振り向いた先には、白井黒子がいた

ガスツガスツドブツ

直後、自分の脇腹、太股、脛に激痛が走った。  
見ると痛みの源にはそれぞれ鉄矢が刺さっていた。どれも何故かし  
つくり来る場所に刺さっている

「慌てることはございませんわよ、全て急所ははずしておりますの  
で。まあそれもそのはず、あなたが私にやった場所にそのままお返  
しただけですからね」

思い出した。あの時、白井黒子に刺した場所だ  
結標は何かを思い出し、周りを確認した

「御安心くださいまし、あの殿方はここにはいらっしやいません。  
仮にも私、ジャツシメント風紀委員ですので」

黒子が腕の腕章を指しながら言った  
その手に握ったチューブを結標に投げた

「どうぞ、ご自由にお使いなさって？私は一切の邪魔をしませんの  
で。止血剤、案外効くんですよ？無様に床に這いつくばって傷

の手当てをしてくださいな。それでようやくオアイコですよ?」

目の前の少女は邪悪に笑う  
別に悪役なわけじゃないよ?

「この子供みたいな仕返し、嫌いじゃないわ」

窓際においてあるキャリアケースにゆつたりと座る結標  
相変わらず笑顔を崩さない黒子が言った

「あらら、そんなに悠長で大丈夫なんですか?こんな空間移動能力者の争いであることをハッキリと示してしまったら、お姉さまならすぐに駆けつけてくるでしょうね」

「!?!」

ここでようやく結標の動揺が表に出た。そして、黒子の次の言葉で動揺が全て表に出た

「それにあの殿方、あなたの計画に都合が悪い事でもあるようですが、可能性は薄いですが、ここにやってくるでしょうね」

結標 淡希のあせりはピークに達していた。

どれほどなのかと言うと、心の準備もないまま御坂美琴+上条当麻に遭遇したら速攻で能力で逃げ出すくらいだ

しかし、いくら能力で逃げ出すといってもその後の辛さは計り知れない。ここは二人のタッグに遭遇せずに速攻で白井黒子を退けて逃げ出したいところだ。黒子もそれを察したのか座っていたテーブルにあった皿を砕いて手にとり戦闘態勢に入る

「はいつ!!そこまでええええー!!!」

二人がビクツ!として声のした方に目がいった  
そこに立っていたのは

「あー・・・こういう時なんて言ったらいいのかな?」

上条当麻だった

そう認識したときには結標はすでに隠し持っていた拳銃を発砲していた  
油断していた上条があわてて転がって回避して立ち上がるころには  
結標はすでにいなかった  
しかし、上条はそれに対して大した反応はせず、ただ何かを待っているようだ

「何をしてらっしゃるんですの!?!早く彼女を追いかけませんと!」

上条はそれに見向きもしない。ただ黙って何かを待っている  
黒子はそれにイライラした。と、その時、上条が大きめの声で呟いた

「来た」

「???何が来たんですの?」

怪訝な顔をしてそれについて尋ねると、突如大きな揺れがきた。黒子はすぐに把握した。自暴自棄になった結標淡希が最大重量である量の重い物体をこのビルに転移させようとしている。この数分間、きつと何度もそれを計算したはずだ

「何をしていますの!? さっさとここから離れてくださいですの!」

上条の体を揺るが上条は余裕の笑みでいた。風紀委員として彼を見過ごすことはできない白井黒子は揺すり続ける。彼は持っていた携帯耳を当て、誰かと話した。携帯はさっきから誰かと通話中の状態だったようだ。

「よし、ビリビリ。この階の天井をビルが崩れない程度にぶっ壊せ!」

『よし来た!』と携帯からかすかに聴こえた親愛なるお姉さまの声。ふと窓の外を見ると向かいのビルに微かに青白い光が反射して見えた。そのリズムはまるで電気がバチバチとなるように・・・

「お、姉、さま?」

そして、

橙色の線を引いた鉄片が窓を突き破り、このフロアの天井を突き破った。その線を引く鉄片は何故認識できたのかが不思議なくらいな速さで視界から消えた。そして、この威力……まさしく超電磁砲レールガン。上条は突き破られた天井の上にある空間の歪み、まるでトランポリンを裏側から見ているような歪みを見ながら超電磁砲レールガンの爆風で吹き飛ばされて自分に向かってきたテーブルを蹴って床に落とし、立った状態にした。そのテーブルにジャンプして乗っかって更にジャンプをした。身長こそ30cmほど足りないが、マイケル・ジョーダレールガンンに匹敵する跳躍力で超電磁砲によって突き破られた天井の穴の縁に捕まり、勢いをつけて飛ぶように空間のゆがみに手を押し付けた。空間の膨らみは上条の右手によって押し戻されていった。上条は縁に足をかけ、さらに“膨らみ”を押しした。そして、その“膨らみ”が平らになると同時に……

ドゴン！！！！

何かが爆発するような音がした

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

どこかの道にて

結標淡希はくたきたかった
自分を追っていた謎の少年から逃げるために今日三度目の自身の移動を行い、精神は既にボロボロだった

「でも、もう安全なはず、今頃あいつらはペシャンコよ……」

それでも、不安は拭いきれなかった。あの少年が何故か生存しているような気がしてならない。だが今はそんなことを気にしている場

合ではない。たった今、連絡しようとして仲間が無線機で連絡をしたが、仲間は既にダメになっていた
でも今は逃げるしかない

ビルに囲まれた広い道に出たその道を半分ほど割ったとき、

「よお、素敵な贈り物^{プレゼント}・・・ありがとよオ」

今日何度目かの聴きたくない声を聴いた

それは自分が今いる道路の向こうから聴こえた

だが、結標は冷静だった。もう何度も聴いている声、それにいくらアツチが不気味だからといっても周囲をこっちの得意な地形に変えてしまえばこっちのものだ。あっちも苦戦するはず、そして逃げられるはず

「そうそう、ここみたいなのが良かったんだよ。あんな狭い路地裏やレストランじゃ話にならねえし、白井もいないほうがいい」

「へえ・・・でも、私が近くから“物”を取り寄せればこんな地形なんかすぐに変えられるけど？それならアンタだって」

結標の言葉は途中で途切れた。

カツ

カツ

カツ

靴の足音のようだ。上条が来た方向とは反対から聴こえる
その人影が立ち止まり、道を塞いだ

「おいおいおい。何なんですかア？このふざけた光景はア！？こ
ちとら無理して出て来たってエのによオ」

アクセラレータ
一方通行

学園都市最強の能力者

「何で既に別の奴が捕らえてんだア？わっけわかんねエ」

その姿を見て結標は絶句した

(まさか・・・アクセラレータ一方通行・・・？あの超電磁砲レールガンですら敵わないって
いう、学園都市最強の超能力者・・・！！む、無理よ・・・あんな
奴に・・・あんな奴バケモノに敵いつこない！！)

アクセラレータ
一方通行は涙目になっている結標を無視して上条に言った

「おい三下ア！こちとら無理して出勤したんだア！だからお前が引
き下がれ！」

それに対して上条は学生の喧嘩の前にある争いの時の学生の顔で反
発した

「はあ！？こつちだつてさっきこいつに殺されかけたんだぞ！その
程度の理由でやっかよー！」

「うるせエよ！こつちだつてなア！飼ってるくそガキが煩くて迷惑してたんだよ！」

「なんだとう！こつちなんかなあ！」

（何かわからないけど・・・チャンス・・・？）

この恐ろしい二人は今は口喧嘩に夢中でこつちは蚊帳の外の状態だ。

（ならば、二人とも頭に鉄片でも飛ばしてあげれば・・・！！）

結標は迷わず二人に攻撃を仕掛けた・・・が、

パキン

キュイン

二人とも妙な動きをしただけでそれ以外は何も変化がなかった

「な、何で？何でテレポートされてないの？」

両者とも同時にニヤリと笑った

そして答えた

「何って？俺はただ」

「『右手』で髪を」

「首の『電極』を」

「いじくっただけだが？」

それを聞いた結標は絶句

「さアーてエ！さてさてエ！」

「男と男の鬪いにい！」

「水さしてくれちゃったねエ！三下くウン！？おい、ツンツン！言いたいことはわかってるよなア？」

「ああ、わかってるさ」

うん、と頷く変人二人組

「「そういう悪い娘にはお仕置きが必要だよなあ（ア）！？」」

「ひ、ヒイ！！！！？？」

今宵、仲の悪い悪魔が二体。何故か手を取り合った

案内人（後書き）

あわきん「私が悪かったわ、反省する。次は絶対反省する」
以上、ツンデレ悪条さんの回でした。

ツッコミはナシでお願いします。できればいいです。ちなみにボケツッコミはオーケーですよ

番外編その参：非道にたてつく紅い刃（前書き）

とある魔術の禁書目録インデックスのSS2巻を見た方々にはわかると思いますが、原作9巻の大覇星祭の使徒十字クローチエディヒエトロを使ったリドヴィア＝ロレンツエッティはこの物語で死んだ上条かみじょう 刀夜とうやの影響で穏便に済ませられる使徒十字クローチエディヒエトロを使ったわけですから、次話は遅れることになると思いますので、その繋ぎとして番外編を書かせていただきます。

番外編その参：非道にたてつく紅い刃

上条当麻は不幸だ。しかし、今この状況ではその不幸が嘘のような出来事が起こっている。何故か？それは、気まぐれで買った宝くじ一枚が当たったのだ。詳しい額は言えないが5桁は当たった

「何か嫌な予感がする・・・」

こんな大きな幸福を手に入れてしっぺ返しがないはずがない。きっと、風が来たりするなどして宝くじを飛ばされてぬか喜びさせられるかもしれない。いや、もっと大きな不幸がやってくるかもしれない

「す、捨てちまおうか？いやいやいや・・・しかし・・・そうだ」

何かを思いつき、上条は宝くじ券を手のひらに乗せてみた、すると、相当強い風が吹いた

(これで券が飛べば・・・)

案の定、宝くじ券は風に連れ去られた。上条はため息を漏らすも、心の奥では安堵していた。

が、

「あれ？」

しばらく、開いていた手のひらにまた同じ宝くじ券が乗っかってきた
さすがにこれには上条も観念した。なんせ大金なのだから

「よ、よーし！さっそく換金しにいくかー・・・」

大金を手にしたと思えないほど目は渴いている

~~~~~

銀行にて

「で、こうなるわけね・・・」

上条はやはり不幸である。

道を歩けばトラックが突っ込んでくる、建設中のビルの下を通れば  
鉄骨が降ってくる、レストランで食事に行けば食中毒となる。なら、  
銀行に行けばどうなるか？

「おい！そこの teme エ！何ぶつぶつ言ってやがる！！」

目だし帽の男が上条に怒鳴る

「おら！さっさとこの袋に金詰める！！」

銀行に行けばどうなるか？

A：銀行強盗に遭遇する

(やっぱりじつなるのですかー！？)

もちろん上条の不幸はこれだけには止まらず、銀行強盗が金を奪っ

たあとにある警察の行動を制限させる効果のある盾選び、もとい人質選びに上条は選ばれてしまった

「おいその！さっさと立て！」

リーダーらしき男が銃をつきつけながら言う

「俺達の盾になってもらおうか？」

それに上条は

「イヤなこった」

男の銃を持った手を掴んで捻って銃口を自分から外し、その腕を引き寄せて男の腹に膝蹴りをかました

ドパンツ！！

と何かが破裂する音がした。もちろん、その音は上条が相手の腹を蹴った音である。その尋常ではない音がする程蹴られた男は当然吐血した

上条は周りを見た。銀行強盗は3人、こいつを含めれば4人。

スチャ

一人が上条に向けて銃を向けた。それに気がついた上条は、倒した男の銃を盗って構えた男に向けて撃った

パン

パン

二つの銃声が響き渡った。

一つは上条を狙った男に当たり、もう一つは上条に重傷を負わされた男に当たった

(残り二人！)

今度は残った二人が同時に銃を向けてきた

片方に男から奪った銃を投げ、もう一人の方に弧を描くように走った上条が走ってきて男は反射的に引き金を引いた。

パン

ブシヤッ

上条には当たらず、代わりに上条に銃を投げられた男に命中した

「あ！！す、すまねえ！」

あわててその仲間らに駆け寄ろうとしたが、

ゴギャッ！！

いきなり横から飛んできた拳が顎に当たり、男は拳と壁に顎が挟まれる形で下顎を粉碎された

男が倒れて数秒後、ウオオオオオオオ！！と周囲から歓声、を無

視して上条はカウンターに宝くじ券を叩きつけて、

「すみません、換金お願いします」

~~~~~

「いや、一時はどうなるかと思いましたが、よかったよかった」

財布に換金した金を入れつつ言った

「さて、どこに使いましょうかねえ」

とりあえず最初はコンビニで何か買おうということになった

~~~~~

「……なんでお前が？」

「……こつちが聞きてエよ」

コンビニに入って遭遇したのは白い髪、白い肌、赤い目、ウルトラマンみたいな「血流操作と生態電気操作どつちがいい？」あ、すんません。電極の付いたチョーカー……ご存知のとおり学園都市最強の超能力者（レベル5）、一方通行である  
アクセラレータ

「んで？またコーヒー大人買いでもしてんのか？アセロラベータ」

「それ前にも聞いた。別にイ、お前にはカンケエねエだろオが」

「っーか少し痩せた？大丈夫かアクセロリータ」



「<sup>アクセラレータ</sup>一方通行だ。誰がロリコンだよ。ちなみに8月31日に脳にダメージを負って演算能力と言語機能に障害を持った。それで今は演算は外部に任せてる」

上条のからかいにイライラした様子で答える

「脳にダメージって・・・お前しぶといんだな。さすがセロリたん  
ブッチン

「そォーか！そォーか！！テメエ死にてエようだな！！相手になつてやるよォ！！」

「まあーて！待て待て！落ち着け！上条さんだってわざとじゃ」

「知るかボケエ！！！！」

「ギャーーーー！！！！」

~~~~~

「くそお・・・なんでこんな目に？」

所々に“すす”を付けた上条が咳く。ついさつき黒翼を発動した^ア一方通行^{クセラレータ}から命からがら逃げてきたところだ。さすがの上条も黒翼とはもう闘いたくないから逃げてきた

「とりあえずスーパーにでも行くか・・・コンビニより安いんだし」

スーパーにて

（こちらスネーク（上条）、敵兵を発見した。とりあえず隠れる）

スーパーに来た上条だが、そこで思わぬ人物に遭遇した

フレンド「セイヴェルン

上条が以前潰し損ねた暗部組織『アイテム』の構成員

発見され次第、彼女は上条を攻撃してこようと爆弾の嵐を繰り出すに違いない。もしそうなったら店が大惨事になり、弁償として宝くじの金を失ってしまうかもしれない。それだけはなんとしても避けなければいけない。

（この上条当麻には任務がある！それは奴に見つからずに買い物をするのだッ！！）

別に無理して買い物なんてしないでそのまま店から出て行けばいいのだが、なんやかんやで楽しんでいる上条にそんな考えなんてものはないッ！

「フツ・・・チョロいぜ」「誰がチョロいつて?」「・・・あ」

つい先程、スーパーでB・29からの爆撃から逃げてきた上条が今向かっているのは映画館

「と、とりあえず、できるだけ人気のない映画、C級映画とか・・・

「
それでいいのか・・・？上条・・・

そうして見えてきた映画館、やはりいたのは『アイテム』構成員、
絹旗きぬはた最愛さいあい。姿を認識した上条は速攻で回れ右して戻ろうとすると、

ガンッ

ドカーン

すぐ前にある車の上の後ろから跳んできた車がぶち当たって大きな爆発が起きた。振り返った上条の見たものは、絹旗の満面の笑みだった

「超見つけましたよ。その汚い××××を超ヒキチギツテやりましようか？」

「・・・」

~~~~~

「くそっやっぱりこつなると思いましたよ！結局上条さんに幸福なんてありえないのさ！..！」

ウルトラマン、B-29爆撃機、賊刀『鎧』からの襲撃に会い、上条はもうヤケクソになっていた

「よーし！..！こつなつたらヤケ食いだああああ！..！..！」

そう叫ぶ上条を見て道行く通行人は上条を哀れむような目で見ていた

~~~~~

ファミレス『Joseph』にて

「いらっしゃいませー、一名様ですね」

「はい、そうです」

「お煙草はお吸いになり　　「吸うわけねえだろ！さっさと案内しろよハゲ！」

暴言を吐かれても店員は相変わらず笑顔で接してくれている

「すみません、今席が満席でして、相席でもよろしいですか？」

いつもなら拒否して待つか帰るかしているが、上条は「もうどうとでもなれ〜」状態なのでそれに承諾した。案内された席には客が二人座っていた。店員がその二人に事情を説明すると、二人とも頷いた。どうやらOKのようだ

「それではお客様、ごゆっくり」

バシユン

店員が言い終える前に上条に光線が放たれた。それを当然のように打ち消す

「また会ったなあああ！！この×××野郎！！！！」

『アイテム』リーダー 麦野^{むぎの} 沈利^{しずり}

同じく『アイテム』構成員 滝壺^{たきつぼ} 理后^{りこう}

「ブチコロシ 確定ね！！！！」

バシユンと放たれた光線の嵐

「うわっ！来た！麦のんビーム来た！！」

「だあーれが『麦のん』だこのヤロー！！！！滝壺！！起きろお！！」

この日、さすがに諦めて帰った上条だが、結局、宝くじの金は全部インデックスに食いつぶされることになった

「不幸だ・・・」

番外編その参・非道にたてつく紅い刃（後書き）

『アイテム』と上条さんを再会させたかった、悪条さんに不幸だと
言わせてみたかった。という願望からこの番外編は生まれました
途中、面倒くさくなったので文が雑になりましたことを謝罪させて
もらいます。ごめんなさい

恩師（前書き）

今回も相当手抜きな文章ですが、繋ぎのようなものなので、良しとしましよつ。

恩師

「今日は大覇星祭ッ！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

意気込んで叫ぶ美静を尻目にパンをモグモグと頬張っている上条

「大覇星祭ッ！！！！」

「ぶげらっ！？」

二度目の叫びで美静は上条の頬にビンタ
ではなく、掌底を叩き込む

「何しやる！！」

「それはあなたが聞かないからです！！」

「だってさー、運動会とかだるいじゃん？どうせうちの高校は弱くて楽しめないんだしよー」

「いいじゃないですか！スラ ダンクだって弱小のバスケット部が全国レベルまで強くなったじゃないですか！！」

「そうだよ、とうま！『あきらめられたそこで試合終了』なんだよ！！」

二人がやかましいので上条は耳に指を突っ込んで音を塞いだ

「何がスラム　ンクだよ・・・漫画なんかに影響されてんじゃねえよ！つーか、美静、語尾はどうした？語尾は」

「いや、あの、なんか面倒くさくなったので、語尾とつてもいいですか？と美静は無理して語尾を一時的に復活させます」

「いやいやいや、やめとけて。ほかの丁寧語を喋るキャラの立場がなくなる」

「・・・わかりました。では、語尾を完全復活させますと美静はしぶしぶ復活させます」

「んじゃ。大覇星祭楽しんできてね」

上条は机に落としたパンを拾い、再び頬張る

「何言っているんですか。あなたも来るんですよと美静は引きこもりのお母さんのごとく引きずります」

その首根っこを美静が引っつかみズルズルと引きずっていく

~~~~~  
「ああああっづうづうづうづう・・・」

開会式が終わった直後に上条が目を見開いて汗ダクダクで呻いた

「何だ何だよ何なんですか三段活用オオオオ・・・！校長先生の挨拶」

拶百連発とか聞いてねえよ……!!」

更に汗を噴出し、頭を抱える上条

「大体よオ……一体学園都市に何百人校長先生がいるんだ？ついか別に各学校で一人で挨拶すればいいじゃん……!!何でイツペンにやるんだよ……」

そんな彼の叫びなど誰も聴いちゃいない。何故ならみんな同じく暑いのだから。こころなしか水分が全部枯れたように見える人もいた。

その中で上条に答える者は一人

「定めなんですよ。大きい学校ほど校長先生エンドレスの挨拶は長くなる。学園都市は最早ひとつの学校なんですよ。と美静は悟ったように語ります」

平然と喋っているが彼女もまた、顔が真っ赤で目はいつも以上に据わっている

「とうまー!!」

「あ……?」

ミイラのような風貌で声の主の方へ顔を向けるが、

「おなかすいたー!!」

本人はそれを見ていないかのように明るい笑顔で告げた

「何で、んな糞暑いのにそんなに喰えんだよ!!」

「それは、私の日ごろの行いのおかげで主が私に加護を与えているんだよ!!」

上条のツッコミに胸を張って自信満々に答える

「それにしても、日本食って言うのは、まさに誘惑の塊かも……」

インデックスがジュルリと涎をたらす。その目はいつしか、食料が尽きたときにインデックスが三毛猫スライクを見る目と似ていた……ような気がした

「ああ、後でな」

「“後で”？」

インデックスの目が突如死んだ魚のような目に変化した

「えーと……私達は最初の協議に出るんで、それがもうすぐ始まるのでもう行かなきゃならないんですよ。と美静はインちゃんをかわいそうと思いつつも背を向けます」

インデックスの目が更に見開かれた。もう見開きすぎて目がカッサカサになるくらいだ

「……あー、とりあえず焼きそば3つくらい買っというてやったからこれでも食っててくれや」

インデックスは多少機嫌が直ったようだが、まだ不機嫌なようだ

（いや、三つで充分だろ・・・）

こころのなかでツツコンだ

~~~~~

「・・・何だ？この有様は・・・（と美静は呆れたようにそれらを見つめます）」

「うつつっだー・・・やる気でねえー・・・」

上条のクラスメート達はまるで運動会終盤の競技を終えた後のような空気になっていた

「いやいや、何があっただよ？！」

死に状態ながらそれに答えたのや青髪ピアス

「いやー、カミヤんも体験したからわかるやろ？校長先生の挨拶百連発（実際は15連発）、お喜びの電報五十連発。カミヤんは体力あるから耐えられたけど、わいらはもうだめやねん・・・」

言い終えた直後に青髪は力尽きた

「どうします？私たちもグダグダしちやいますか？と美静は提案します」

「ああ、そっだな・・・」

そう言っ上条が後ろに倒れようとした瞬間

「何なの！？その無気力感は！！」

後ろに倒れた上条がフリーズした。表現するならマ リックスのア
シみたいなポーズだ

「まさか貴様がだらけきっているからこうなったのんじゃないでし
ようね！？」

「なんだと？俺はなあ！最早やる気を出しすぎて殺気までだしちま
うほどやる気を出してたんだよ！！それなのに、この有様さッ！！
」

吹寄の問い詰めに対して上条が反論する

「それは貴様がみんなの元気を吸い取ったやる気じゃないのか！？」

「んなわけねえだろ！！暑さでハイになっただけだ！！」

さっきまで炎天下で天国へ行きかけていた者の言い争いとは思えな
いほど白熱していた。周りでは野次が飛び交っている

しかし、やはり疲れてきたのかどんどん勢いは弱まっていき、最終
的には青春ドラマにありがちな殴り合いの後みたいな感じになった。

(絵が)

しばらく二人が黙っていると、近くでなにやら男女のいい争いが聴
こえてきた

「違うのです・・・絶対に・・・のです!!」

「ふん、馬鹿馬鹿しい・・・に決まってる・・・」

上条らがそこを覗いてみると、そこにいたのは上条のクラスの担任の月詠小萌だった。

「だから!!ウチの設備や授業内容に不備があるのは認めるのです!でも、それは私達の責任であって、生徒達の責任ではないのです!」

「はん。お宅の不足は全て生徒の質が悪いのが原因でしょう?聞きましたよ?お宅の能力測定もボロボロだったとね。やれやれ、失敗作を抱えると苦労するんですね」

男は味方でさえイラつかせそうな調子で言った

「せ、生徒さんに良い悪いもないのですよ!あるのはそれぞれの個性だけなのです!」

「己の力量不足を隠すための言い訳ですか?はっはっは、なんとも夢のある意見ですが、私がそれを打ち壊してみせましょう。ウチのエリートクラスで、お宅の落ちこぼれどもを完膚なきまでに叩きのめしてさしあげましょう」

「なっ・・・」

「ま、一応手加減はするつもりですが、弱すぎた場合はどうなるか保証はできませんがね」

はっはっはーと立ち去って行った

「違いますよね?・・・」

小萌先生がポツリと呟いた

上条は小萌先生から目を離した。
見る必要がないからだ。小萌先生は涙を流している。上条は去って
いった男の先生のあとを追った

「おい!待てよ!」

「ん?・・・おやおや。月詠先生の所の負け犬君じゃないか。何し
に来たんだい?まさか敵討ちとか?」

「いや、・・・あなたと賭けをしに来た」

毒気を抜かれたように眉を上げる男の教師

「賭け?で、内容は?」

「この競技、アンタんところの生徒をぶっ殺して、勝利したら、倒
した生徒の数×一秒だけグラウンドの真ん中で土下座しろ」

教師は、はあ?とでも言いたげな顔をした

「それで、君の負け条件とその罰ゲームはなんだい?」

「競技に負けた場合、俺が倒した数＋そっちの特定の奴が倒した数の分だけ俺がお前にグラウンドの真ん中で土下座してやるよ」

「ほう、大した自信だねえ。楽しみにしているよ、君の土下座をね」

「もう一度だけ聞くぞ？本当にやる気がねえのか？」

クラスメイト数人の胸倉を掴んでそいつらを代表に上条は言った

棒倒し開始直前

先程の賭けをやるために、自軍の棒を守るグループと敵軍の棒を倒しに行くグループで、上条は攻撃側を選んだ。スタートの合図の直後、上条は真っ先に棒　ではなく、敵を粉砕するために敵軍へと突っ込んでいった

「「「「「「　おおおおおおおおお　「「「「「「　おおおおおおおおお　「「「「「「　おおおおおおおおお

上条はそうとうな量の殺気を出しているが、他の仲間もそれに負けず劣らずな殺気をだしている。

「おおおおおおおおお　「「「「「「　おおお　「「「「「「　おお　「「「「「「　おお　「「「「「「　おお　「「「「「「　おお　「「「「「「　おお　「「「「「」
隠れてんだよ！！？」

上条の右側の影に隠れるように後に続く二人、土御門と青髪ピアスだ

「だってえーなー」

「カミヤんの影に隠れてれば能力があたらないからだにゃー」

「自分の身ぐらい自分で守れやー！さっさと離れねえと第一、第二の防御にテメエらを使うぞー！」

「ちえっカミヤんったら、いけずやわ〜」

上条が再び前を向くと敵は既に十数メートル先まで来ていた。そして、自軍の先頭の上条と敵軍の先頭が激しくぶつかり合った

~~~~~

勝利

上条の高校

相手の被害

130人

上条の成果

108人（<sup>バーソナル</sup>ウチ3人の自分だけの<sup>リアルタイム</sup>現実にダメージ）

賭けの相手の罰ゲーム

上条がやった人数108人×1秒〓108秒

ちなみに、そのDOGEZA映像はやっぱり放映された



## 恩師（後書き）

とりあえず、皆さんが上条さんの非道さを再確認したところで、次  
話を書こうと思います。

## 追跡者（前書き）

結局、リドヴィアは最初から使徒十字クローチエディヒエトロを使うということにしました。だって、リドヴィアが使いそうな物騒な学園都市制圧作戦で、しつくりくる方法オリジナルが思いつかないもんですからね。だからと言って、この話を無視して上条さんの大覇星祭を楽しむだけの話だと、つまらないし……

## 追跡者

上条当麻は今ピンチだ。

いや、死亡フラグが立ったといった方がいい。上条が不幸の直前に感じる妙な感覚、それを上条は感じた。つまり、死亡フラグである。

そう考えていると、アンチスキル警備員が目の前に“通行止め”の看板を持ってきた

「あーごめんねえ。ここ、もうすぐ吹奏楽部の複数校合同パレードが始まるじゃんよ。そろそろ人の流れをせき止めておかないと整備が間に合わないじゃん」

なんと非情なお言葉なのだろう、と上条は心の中でどこぞの大根役者風に呟いた

さっき、自分達の競技の前にインデックスに焼きそば3つほど置いてそのまま放置して、インデックスのお腹は最早限界

こういう時、上条は自分がどうなるかを悟った。

噛み付かれる

前に一度だけ、インデックスに噛み付かれたことがあった。(くわしくは、第十一話『転入生』を参照)

「向こうまで渡りたいのですけど、どうすれば迂回できるのでしょうか?と美静は渴いた表情で尋ねます」

そりゃそうだ、だって美静は朝、大覇星祭で浮かれて朝食をとらず

に行ったのだから

「この辺は歩道橋もないじゃんよ……。一番近くて、西に三キロ行ったところの地下街から横断できるじゃんよ」

「三キロ……」

3 km

中学校で男子が走る長距離走と同じ距離、持久走を走る速さでなら15分くらいかかる。上条と美静は15分どころかそれよりも早く着くが、インデックスは別だ。それに、15分より早く着くと言っても、インデックスがそれを待てるわけがない

三人が絶句した。

（美静、お前はいいよな。だって腹が減って死にそうだけなんだからな。俺なんか死亡フラグ立ってんだぜ？）

「う、うう……。手を伸ばせばそこにあるのに、決して掴むこともかなわず」

インデックスからは黒いオーラが漂っている。ついでに美静にも黒いオーラが漂っている。つーか、テメエはただの八つ当たりだろ！

（だめだっ！二人ともTウィルスに感染していやがるっ！！ゾンビ化しとるっ！！）

二人がこちらを振り向いた

その時、上条の頭に三つの選択肢が浮かんだ

- 1、ハンサムな上条さんは突如名案を思いつく
- 2、何故か通りすがりの救世主が助けしてくれた
- 3、誰も助けに来なかった、現実是非情である

美静とインデックスが飛び掛ってきた

瞬間。

上条に走馬灯というものが見えた

走馬灯、それは人間が死ぬ前に見る人生の思い出。本来、それは走馬灯にある今までの経験おもいでの中からその状況を打破するものを探すためのものである。しかし、上条としてはこんな喜劇コミカルになど遭遇したことが0に等しい。今まで悲劇シリアスにばっか遭遇してきたのだから・・・。

246

故に必然的に1の選択肢は消え、3の選択肢を選ぶわけにもいかず、上条は2の選択肢を選ばざるをえなかった

(2!!!2イ!!!2イイイイ!!!)

美静の手が、インデックスの牙が

『3、誰も助けに来なかった現実是非情である』

上条に

「アッーーーーー!!!!!!」

触れた

~~~~~

先程、美静とインデックスの食糧問題の後、土御門に呼ばれた。呼ばれた所に着くと、そこにはステイル・マグヌスがいた。つまり、『案の定魔術の話』だ

話が長いのでまとめると、

学園都市に魔術師が二人侵入したらしい。一人はローマ正教のリドヴィア・ロレンツェッティ。そいつに雇われた運び屋、オリアナ・トムソン。両方女だ。連中の目的は霊装の取引

スタフソード
刺突杭剣

曰く、あらゆる聖人を、一撃で葬むる代物らしい。

故に神裂はこの件に首を突っ込むことができない

使い方は簡単。対象に切っ先を向ければいい

たとえば核シエルターに閉じこもろうが、地球の裏側にいようが、冥王星まで逃げ延びようが、

そんなの関係ない、“切っ先を向ければいいだけの話”

そんなムチャクチャな霊装、“有効に使う”としたら一つしかない

戦争

一度闘った上条はわかる。聖人というのは核兵器のような「者」だ。人間の身体能力を超越している？いや、超越どころではすまされない。そんな代物を「破壊」する。

だが、問題はその「聖人」を「葬る」じゃない、聖人を葬むっても充分戦力になる人材なんて腐るほどいる。しかし、それでもその人材は聖人には到底及ばない、それで聖人があっさり殺されたら？

当然、最大戦力を殺した側は強気になって、「自分の無様な敗北」を後先考えずに相手を攻撃する。そして、それが火種になって、さまざまな場所で戦争が起きるかもしれないそうだ。必要悪の教会としてはこちらを見逃すわけには行かないそうだ

インデックスに協力を仰いでみたらと提案したが、どうやらダメらしい。土御門曰く、ここ数ヶ月で上条が「そげぶ」した事件では、「上条当麻の周囲で事件が起きる」ではなく、「禁書目録の周囲で事件が起きる」と認識されているらしい

つまり、「事件の陰にやつぱり矢」ならぬ、「事件の陰にやつぱり禁書目録」

『コン』新『ならぬ』コン『禁書目録』ということだ

「しかし、カミヤんも良い気はしないだろ？自分の手柄が彼女に回っているなんて」

「認められねえのは慣れてる、むしろ学園都市（ユニ）に来る前よりはましだな。認められないどころか、『自作自演野郎』って蔑称までつけられた」

土御門、ステイルの眉が少し下がった

「俺は参加しねえぞ。お前らでやるか、『暗部』にでも任せりゃいいだろ。ちっと金がかかるだろうが」

そう言つて、上条はその場をあとにした

「やれやれ、ちよつと不憫に思った僕が間違いだつたよ」

ステイルがため息をつき、煙草に火を点けながら言つた

「駄目もとで誘つてみたけど、やっぱダメだつたかにやー。ま、『強制戦闘』とか、『自分の目的のため』に動くことを祈りながら始めますか」

~~~~~

「あんだねー、あんな仕事断つてどーすんのよ……」

不意に声をかけられた。最初はさつき襲ってきたビリビリ中学生か？と思つたが妙に声が大人っぽい

「だったらアンタがやりゃいいだろ？」

むののけしのせいし  
麦野沈利

上条が暗部時代に渡り合つた組織『アイテム』のリーダー

「わかつてないわね……。私みたいな破壊だけしか能のない能力で上手くできるわけないでしょう？私がアンタだったら、報酬の多い少ない関係なく引き受けてるわよ？……ま、それでも

「桁はもらっけどね」

麦野がため息をつきながら言い、付け足すように言った

「超能力者（レベル5）が何言ってるんだか……」

吐き捨てるように上条が言った

「私はこの学園都市まがが好きよ？表舞台の方を見ればだけどね？だから暗部をやってるのかも……。そこまで金に拘るのは、やっぱり軽く見られるのがイヤなんでしょうね」

何か軽くだそがれてる

（あー、結構タイプだな……）

上条は顔は表情変わらずのままだが、内心ではそう思っている。つか話聞いてんのか？

「とっころでさー」

「ん？」

「あそこで屋台泣かせてる女の子達は一体何なのでせう？」

上条が指した三方向を見ると、彼女の同僚がそれぞれ自分の能力や技術を駆使して屋台を泣かせている。それを見た麦野が言った台詞は……

「知らない」

だそうだ

その時、

「上条君！！」

クラスメートの一人が血相を変えて走ってきた。どうでもいいが女子なのは、やはり上条クオリティなのだろうか？よほど重大らしく、息切れで数十秒しゃべれない状態になるくらい走ってきた

「何があつたんだ？」

彼女が回復したのを見計らって上条が問いかけた

「吹寄さんと、土御門君が倒れた！」

## 追跡者（後書き）

麦のんをだしたのは特に意味はありません。

強いて言うなら、上麦ssをもつと出してほしいってくらいですかね  
私としては、上麦タッグを続けてみたい（want to ではなく、  
would like to 程度なんだからね！／／／か、勘  
違いしないでよね！！／／／）のですが、皆さんに悪いので要望が  
あつたら考えます。

番外編その四：裏切無用（前書き）

本当にごめんなさい！ちょっと色々と壁にぶつかっちゃいました、  
本編の話はもうちょっとかかるかもしれない！

## 番外編その四：裏切無用

ある昼下がりに、小雨の降る中、一台の大型のワゴン車が走行していた。パツと見普通の車だが、中にいる集団は普通とは大分かけ離れていた。

暗部組織『ブロック』

学園都市の裏に潜む暗部組織だ

統括理事会直属の組織であり、彼らの主な任務は学園都市の外部協力機関との連携を監視すること。しかし、今回の彼らの任務は違った

「今回の任務を説明するぞ。今、学園都市で薬物売買を行っている武装集団『バースト』を壊滅させる。以上だ」

熊のような大男、佐久辰彦さくとしひこが3人のブロックの正規構成員とその他十人弱の武装した男達に言った

「ん？ちよっと待て。それなら、もっと適任が、いるんじゃないか？」

筋肉質で長身の女性、手塩恵未てしおめぐみがそれに返す

「それが無理だそうだ。『アイテム』『スクール』は今、手が離せないらしい。そして、『メンバー』は数日前、“ある一人の少年を潰す任務”の時に壊滅した」

「『災厄』か・・・」

三人目の構成員、山手が呟く

ここ十数日で学園都市の『裏舞台』で流れた噂、“敵であろうが、見方であろうが壊滅させてしまう男”その男の入った組織は瞬く間に潰れてしまつらしい。中でも有名なのが、実力と悪名ワースト1である人身売買を生業とする武装集団『トリック』をたつた2日で“何もせずに”壊滅させてしまったことだ

「そうだ。上層部は奴ら（バースト）が『災厄』と組んで好き勝手させて街に大ダメージを負わすわけにもいかず、だからといってこれ以上暗部組織を潰させるわけにも行かないから、今のうちに壊滅させておきたいそうだ」

佐久が窓の方に目を向ける。ちょうど上から伝えられた『バースト』のアジトが見えてきた

「それじゃあ作戦を確認するぞ。まず、鉄網は車に残って待機しろ。そして三分の二は突撃、残りの三分の一は奴らのアジトに爆弾を仕掛ける」

熊のような大男はまず陰気な少女を指差し、次に如何にも実力派と思われる奴らを何人か指差し、残りのあまり戦闘向きでなさそうな奴らと、その護衛役である奴らを指差して言った

「撤退するときはお前らの首についたその首輪が激しく振動する。その時は作戦が成功していようが、いまいが撤退しろ。ここに戻つてた奴は必ず鉄網の『安全確認』を受ける。いいな？」

それに全員が頷く



それと同時に車が停まる  
アジトに着いたようだ

「それじゃあ、作戦を開始するぞ。準備ができたら即出る」

車内にいる連中は一人また一人、準備ができ次第車内を出た  
今、車内にいるのは陰気な少女の鉄網と運転手だけだ

そして、数十秒後に鉄網は異変を感じ取った。

運転手の様子がおかしい。鉄網はそつと運転席を覗いた

「運転手がいない？」

運転手が消えていた。

しかし、その数十秒間、ドアの開く音など聞こえなかった。第一、  
運転席の扉は鍵がかかっているのだ、気づかれずに開けられるはず  
がない。運転手が気づいて鉄網に知られるはず

ならどうやって？

不審に感じた鉄網はグロツク17をモデルとした学園都市製の拳銃  
を握り、車から降りた。車を出たとき、すばやく左右に銃を向けて  
確認をした。しかし、侵入者はいない。それどころか、運転手も見  
つからなかった

鉄網はしばらく周囲を探したが、侵入者も消えた運転手も結局見つ  
からなかった。もつと、探せば見つかるかもしれないが、そうする  
わけにはいかない。彼女の能力である「意見解析<sup>スキルホリケラフ</sup>」で帰ってきた構  
成員と株構成員の安全確認を行わなければならない。

組織内でたった一つだけ役に立つ彼女の能力。読心能力サイコメトラーの一種で、握手した相手の『個人情報プロフィール』を見ることが出来る。この能力があれば、変装した敵などを見つけることができ、尚且つ組織内の『疑心暗鬼』を防ぐことができる。逆に言えば、彼女がいなくなってしまうと、組織は『疑心暗鬼』に陥りやすくなってしまふ。そうなるしまわれないようにも、彼女はできるだけ長生きしなければならない。

鉄網は周囲に注意を払いつつ、車内に戻ろうとした。ドアの前でも警戒を怠らず、ドアに斜めに向いて銃を両手で持ち警戒していた。

だがそれがいけなかった……

ザシュンッ！

ポロッ

「えっ？」

彼女は自分の手を見た。

だが見えなかった。

何故？それは……



「そうか」

Aが適当に返事をし、無線を切った  
ふと、Aが気がついた。一人足りない

「おい！Bはどうした？」

「え？知らねえよ」

三人いたはずが二人になっていた。少人数だったからわかった

「くそっ！空間移動能力者でもいやがったか？早くここから撤退するぞ」

しかし、返事は返ってこない。Aはすぐに悟った。Cも消えたと、そして『災厄』がいると・・・このままじゃ、自分も消える。その上、他の仲間も殺られる。Aは無線機を佐久に繋げた

~~~~~

「どうした？」

『今すぐここから撤退しろ！』『奴』が来た！！『災厄』だ！！！！』

ブツンッ

それだけ言い残して彼の連絡は途絶えた

「おい！おい！！クソッ！」

佐久は無線機を片手に、撤退命令のスイッチを取り出して押した。その次に、無線機を全員に繋ぎ、爆弾班に向かって言うように話しかけた

「今すぐ作業をやめて三分で爆発させる！そしてこの無線を聞いた奴は今から三分以内に撤退しろ！」

佐久が無線機を床に叩きつける

~~~~~

撤退命令を出しただけに、佐久と、佐久と行動していた手塩と他の戦闘員は一番乗りでついた。佐久がワゴンのドアを開けて入った

「鉄網！さつさと安全確認をしろ！」

しかし、彼が中に入ると車内には誰もいなかった。運転手も、鉄網もその時、佐久は何かをグニッと踏んだ。それを拾い上げてみると

手だった

拳銃を両手で握り、手首から下がらない誰かの手……

ちょうどその時、他の仲間が全員到着した

「今すぐ出発するぞ！！さつさと乗れ！！俺が運転する！！この手首が誰のかを調べるぞ！！！」

~~~~~

病院にて

「ん？こりゃまた珍しいね。君が誰かを連れてくるなんて」

カエル顔の医者が少年を出迎えた

出迎えられた少年の背中には、女の子が背負われている

「こいつの斬れた手の義手をできるだけ本物っぽく作ってくっつけてくれ。『無理』なんて言わせねえよ？2回も人の手をくっつけたんだからな」

上条当麻

そして、その背中に背負われているのは両手首がない鉄網だった

「できるけど、金はあるのかい？君」

片方の眉を下げてカエル顔の医者が言った

「ああ、あるよ？たつぷりとな・・・」

~~~~~

『バースト』アジト（半壊）にて

上条は『バースト』の生き残りであり、リーダーと幹部である6人と対峙していた

「テメエのせいで仲間の大半を失い、アジトも使いモンにならねえ・・・どうしてくれんだよ！！」

リーダーが上条の胸倉を掴み、怒鳴りつける

「おいおい、こりゃ俺のせいじゃねえぞ？単にあんたらの運が悪かっただけだろうが」

その手を振り払い、上条は答える

「とぼけんじゃねえ！裏でテメエが糸引いてたんだろ？知ってたんだぜ？お前が『トリック』を潰したってのはよぉー、お前、運が悪かったな。生き残ったのが全員強能力者（レベル3）大能力者（レベル4）なんだぜ？今からテメエをツブス！！！」

男がそういった途端、周りの男達は手に炎や水や竜巻を出したり、周囲の倒木や鉄パイプを浮かせたり、明らかに重そうなものを軽々と持ち上げたりした

上条はそれを見ておびえる様子もなく、

「はぁー、ツイてねえなあ」

と呟いた

「ああ、そうだな！お前ツイてねえよな！！？ギャはハッハハハハハ」

男達が愉快気に笑う

「いや、お前らがツイてない」

「は？」

「だあーかあーらっ、？お前らがツイていないんだよ」

上条の余裕の答えにリーダー格の男の額がヒクヒクと動く

「ぬかせコノヤロオオオオオ！！！！」

それでも上条は動揺せず ゆっくりと立ち上がり、右手をいつものようにパキパキと鳴らした

「ま、すぐにわかるよ」

~~~~~

病院にて

「退院おめでとう」

冥土帰しが上条が数日前に届けた女の子に言った

「はい、お世話になりました」

鉄網が頭を下げる

彼女の両手はまるで手がまた生えたかのような義手がついている

「これからどうするんだい？」

「とりあえず、これから同僚のところに向かいます。生存報告をしないと・・・」

「そうかい、気をつけてね」

「はい、それじゃあ。さようなら」

もう一度冥土帰しに頭を下げ、彼女は背を向けて去っていった

彼女の後姿を見守る

そして、もう一人が入り口から出てきて彼女の後姿を見つめた

「いいのかい？挨拶をしなくて」

上条だ

「別に、俺はアイツを助けるつもりで助けたわけじゃない」

冷めた目で上条は語る

「？」

「アンタ次第だが、すぐにわかるだろ」

そう言つて上条は歩き出す

5、6歩、歩いたところで上条のポケットからピラピラと封筒が落ちた。冥土帰しがそれを拾い上げた

「君、これ落としたよ？」

「ああ、それ？いいよ。別に・・・どうせ落ちなかつたら出して、落ちたら出さないつもりだったから」

ヒラヒラと手を振り、去っていく

上条が去った後、冥土帰しはその手紙を開いて読んでみた

「まったく、僕を利用するなんて・・・ひどいじゃないか」

カエル顔の医者は深いため息を吐いた

ブロックのクソ野郎共へ

俺の置き土産はお気に召しましたかな？

今回のアンタ達の敗因は、あの女に頼りすぎたってことだ

気づいても後の祭りだけどな

『ブロック』が壊滅すんのも時間の問題、

いや、文の内容からして読むころには壊滅してるだろうな（笑）

それじゃあ、『疑心暗鬼』になって死ね

上条当麻君より

番外編その四：裏切無用（後書き）

ちなみにこのネタはB O K O F Fで恨み 本舗を見て思いついたネタです。

かなり謎の残る終わりでしたね。w w
解説がほしいなら、感想でどうぞ

仇（かたき）（前書き）

気がついたら一ヶ月以上たっていたでござる。
やばいな、まだオリアナ追跡の文が仕上がってないのに・・・

仇（かたき）

医務室にて

ベッドにまるで軟体動物のように力なく横たわる吹寄。医師は重度の日射病と言われていたが、でも違う、上条はわかった。長年、異能の力を消し続けたことによる勘だろう。吹寄の日射病は異能の力が関係している。上条の指先が吹寄の額にチョンツと触れ、弾かれるように手を引っ込めた。

パンツ

上条の右手にいつものように手ごたえを感じた。やはり魔術だったようだ。

「こりゃマキャヴェリも驚きだな・・・」

そう言いながらその場をあとにした
医務室を出るとそこにはステイルがいた。

「土御門は脱落だ。^{リタイア}魔術を使いすぎて、今は峠を越えたが、これ以上魔術は使えない。」

そう言ってステイルは煙草を一度深く吸い、上へフウーと吹いた。そして、彼は持っていた白い布で包まれた看板のようなものを上条の足元へ投げた。

「開いてみる。土御門が“命を懸けて”オリアナ・トムソンから奪った『^{スタッフソード}刺突杭剣』とやらだ・・・」

上条はその包みを開く

「!?!?・・・こりゃあ・・・たまげたな・・・」

土御門が我が身を捨ててまで奪った物は　ただの『看板』だった
八つ当たりをするように上条がその看板をステイルの足元へと蹴る

「奴らが本物の作戦で使う本物の霊装は・・・フローチエディビエトロ『使徒十字』・・・
まあ、説明は後回しにするとして　」

ステイルの足元にあつた看板がガンツ!と蹴り飛ばされた。
すばやく反応した上条は裏拳を繰り出すように腕を横薙ぎに振るい、
弾き飛ばす

が、

ガシッ

と上条の胸倉が?まれる

「貴様の力を認めるようで悔しいが、お前があの時!僕らに協力して
いれば土御門はあんなにならなかつた!あの娘もそつだ!貴様
が『YES』と答えれば、被害はでなかつた!」

パシッと掴んでいた手がはらわれた

「別に俺は teme たちがどうなるかと知つたこつちゃねえよ。だがな、

」

上条が浅く溜息をつく

「敵である俺の知り合いに手えだすってんだったら、話は別だ。俺はこれを挑戦状として受け取る」

「だが、どうやって？どうやってオリアナを捕まえる？土御門がいなければ居場所も特定できないんだぞ」

「はっ。たかが『何でもありの鬼ごっこ』が得意って程度で俺からは逃げられねえよ。」

上条が目を細める

「それに、チャンスなんていくらでもあるんだぜ？見えないだけでな……」

「どういうことだ？」

上条がほんの少しだけ、声を小さくして話し始めた

「あいつは俺らのことを警戒している。だから俺らのことを監視する必要がある。お前、オリアナと何らかの形で接触しただろう？例えば、あの看板とか……例えば、オリアナの畏の魔術にかかったとか……」

スタイルがハツとなる

「つまり、俺らが奴にたまたま近づけば、奴は俺らの様子を見に来るってわけだ。今俺らがいるのはどこだ？」

周りの景色を見渡して、スタイルは答える

「ずっと文章だったからわからなかったが、第七学区の駅前だ」

シーン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「えー、おまつ、キャラが薄いからって・・・・メタ発言はないわ・・・・・・・・」

「う、うるさい！とにかく、オリアナは今このどこかに僕らの様子を伺いながら潜んでいるんだな？」

「ああ、そうさ。このまま、オリアナを探しているフリをしていればいい。アイツがまた運送を再開したら、追跡を開始するぞ」

上条たちから少し離れた所にて

「ふう、居場所がバレちゃったって焦って濡らしちゃったけど、大丈夫みたいね」

『それでは引き続き続行しなさい』

「りょーかいつ」

オリアナが懐から彼女の武器でもある『単語帳』を取り出す

「でも、一応念のために・・・・・・・・」

『単語帳』を片手でピラピラとめくり、一つのページを横に押し出した

そのページを啜え、

「張っておかないとね」

ピッ

『単語帳』のページをちぎった

仇（かたき）（後書き）

祝！！禁書目録映画化！！！！

あのポスターが正しいとしたら、映画の内容は、「かまちー」書き
下ろしのオリジナルストーリーでしょうかね？

w k t k が止まらない！！

行間（前書き）

「おお、ディスプレイよ・・・壊れてしまつとは情けない・・・」
PCのディスプレイが天寿を全うしました。WWW
しかも、テスト1週間前に臨終したので、合計11日書けない状態
になりました。

行間

「ねえ」

「あ？」

問いかけるステイルを尻目に上条はオリアナの罿トラップを解除する

「さっきの娘、かなり危ない状況だったけど、なんで君はそんなに平然としてられるんだい？ クラスメートなんだろ？」

「あそこには美静がいる。救急車を呼べと言つといたから大丈夫だろう」

そう言つた後に発動した罿を上条は殴り飛ばす

「日本の救急車の到着時間は平均五分と聞いたが、あれはどんなに前向きに見積もつても、五分と持たないんじゃないか？」

「心配ない、あいつは戦闘知識は熟練の軍人並だ。救急車がつくまでどころか、病院に着くまでに生命いのちをつなげるはずだ。後は、医者いしやの腕前と姫神の生命力しだいだな」

「随分信頼しているみたいだな」

「当たり前だろ？ あいつは元々この俺を打倒するために、つーか、力量を見るために作られた、いわば、測定器みたいなもんだ」

「作られた？ 彼女は人造人間ホムンクルスか何かか？」

「近いけど違う。美静は『クローン』だ」

「木の枝（クローン）？」

「人間の細胞を使って、もう一人の人間を作ることだ。テレビで聞いたことはねえか？」

「ああ、2003年の新聞で『クローンの羊が死んだ』という記事を見たことがあるね」

「美静はこの学園都市で最強の女の遺伝子マップを使って生み出された複製人間だ」

「何のために？」

「元々の目的は知らんが、俺が参加した実験では、学園都市最強を『神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの』へと昇華させる実験で経験地稼ぎのために20000体ほど使われて、内10027体が実験に使われて　消えた」

ステイルの走る足が止まる

「まさか、君もそのクソつたれたことをしたわけじゃないよね？」

ステイルが怒りを含んだ軽蔑の目で上条を見据える

「いや、俺はたまたまその実験で問題になることをやらかして、試されたわけだ」

上条が立ち止まって続ける

「俺はその実験の責任者と交渉して実験に参加、被験者との蟲毒で勝って実験を成功させただけだ」

上条がステイルの方へ振り返る

「その後だよ。インデックス禁書目録が転がり込んできたのは」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「俺はそんなとき泣いたよ。一滴ひとしずくだったけど、2年ぶりに泣いた」

「・・・・・・・・そうか・・・・・・・・追跡に戻ろう」

「ああ・・・・・・・・」

行間（後書き）

うまく悪条さんを書けない

いや、やっぱり辛い

はやくこの回を終わらせないと
るんるん気分になれない

カットしまくりなの

わ許してください

いい訳ごめんなさい

インなんとかさんかわいい

礎を担うもの〈B a s i s 1 0 4〉

ピリリリピリリリ

この広い場所で携帯の着信音だけが響き渡る

ピッ

「美静か？」

『はい、報告したいことが・・・』

上条がそれにいつものように出る

「そっか、わかった」

携帯の電源を切り、上条は目の前のオリアナ＝トムソンへと目を向ける。鋭い目で

「姫神は一命を取り留めたそうだ」

見つめながら・・・

「そっ、よかったじゃない？」

「ちょっと聞かせてくれねえか？お前らがそこまでして成し遂げようとする『それ』を」

「別にお姉さんはね、目的が果たせればどっち側についてもよかつ

たの
」

「目的だって？　なんだ？　18禁の王国でも作って、その女帝にでもなるつもりか？」

「いいえ、お姉さんがほしいのは、絶対の基準点。坊やにはわかる？　親切心でお年寄りに譲ってあげた席が爆発したって、迷子だと思つて教会に預けたら処刑塔ロンドンに幽閉されてしまったって、後から聞いたときの気持ちか・・・お姉さんはただ、この惑星の主義主張をうまくまとめてほしいだけなのよ。誰でもいいから・・・」

「はん、その“ためだけ”にか？」

上条はオリアナの言い分に対して鼻で笑い、一蹴する

「何・・・？」

「安っぽいって意味だよ。動機が・・・世の中にはな、相手のためを思つて行動しても、結果が良くても、認められないって奴がいるんだよ。本当に逃げ場がない奴がいるんだよ。お前なんかよりも辛い思いをしている奴なんかその主義主張信仰思想善悪好悪の数ほどいるんだよ。テメエらなんかよりも『それ』を真に必要としている奴らが大勢いるんだよ」

「坊やは見たことがあるの！？　希望も持てない子供と、絶望すらもてない老人のあの表情を！！」

「ああ、見たことねえ！　だがな、“聞いたことはある”！！　俺の行動を認めてくれた老若男女、みんなが死んだよ！　生き残った奴に『疫病神に関わってしまったから』って愚痴を吐いてな！！！！

それでもまだふざけたこと抜かすってんなら
まずはその幻想をぶっ殺す！！！！」

右手の拳（イマジンプレイカー）を追跡封じ（ルートディスタープ）に向けて上条が吼える

「やれやれ、上条当麻君・・・どうやら、交渉は」

少しだけ落ち着きを取り戻したオリアナが速記原点を取り出し、その中の一枚を口にくわえる

「決裂だな。オリアナ！トムソンッ！」

ダツと上条とステイルが駆け出す

ビリッ

単語帳のページが切り離され、そこから溶岩のような火球が現れだす

その現れる火球に右手を上条は思いっきり伸ばす

VS 『追跡封じ（ルートディスタープ） オリアナ！トムソン』

パンッ！と火球が急激に膨らみ、風船が割れるように消滅する

ゲシッ

「クッ!?」

伸ばしていた右手を蹴られ、弾かれる

「ハッ! いいねえ……! 久しぶりにマジの素手喧嘩ステュロができそうだ……!」

恍惚の表情で上条が呟く

「ああん、だめよ……. そんなに鋭い瞳で見つめちゃ……. .。お姉さん、濡れちゃう…….」

「ステイル! テメエは手出しすんじゃないぞ」

「なっ!? 言ってる場合か!? 僕達には時間がないんだぞ!」

「安心しな。すぐに終わらせる」

上条が右手をパキパキといつものように鳴らす

「あら、随分余裕のようね?」

「ああ! 余裕さ!」

ダツと上条が右拳げんこつを構えて駆け出す

ガンッ！

オリアナの顔を狙った拳はオリアナの腕によって阻まれた。そして、そのまま両腕を交差させたガードを開き、上条の拳を弾き返す。それによってバランスを崩した上条はわずかに後ろによるけ、胴ががら空きになる。

「あら？ 蹴らせてくれるの？ ありがとう？」

オリアナの膝が上条の腹と胸の間、すなわち鳩尾へと打ち上がった

「おっと！」

それにいち早く気づいた上条は上体を反らす。

チツという音がして体育着の胸部分を掠る

そのまま、上体を反らしたついでに押し蹴りを放つ

だが、

ゲシッ

と内腿を狙った押し蹴りは足の付け根付近を先ほどオリアナが放った足による踵落としによって打ち落とされた。足が付け根を打ち落とされた上条は、当然オリアナにお辞儀をするような形になる。

そこをオリアナは見逃さず、上条の後ろ首にエルボーを落とす。
ガッ！

しかし、落としたエルボウは上条の首に当たらず、腕は上条の両手に？まれた

「あら？ あれ？？」

オリアナの腕を掴む両手に力が入る。

「おおおおおおおおおお」

上条はオリアナの胴体に自分の胴体をくっつけ、そこを支点として投げ飛ばす

「っらああああああああああ！！！！」

グルンツとオリアナが宙返りをする。

そのままオリアナは地面に叩きつけられるはずだった。

スタツ・・・

ガシツ！

投げた場されたオリアナが体をエビゾリに反らし、地面に着地する。その体制からバック宙をするように飛び、上条の頭部を足で挟んだ

「ぐあっ!?!」

「ふふっ、お姉さんからの、サ・ア・ビ・ス？」

グルンツと一回転、二回転、三回転。コイル発条バネの軌道を描くように、ポールダンスをするように、オリアナが回り、上条も回る。

何回目か回り、オリアナの体が地面すれすれまできたとき、

ダッ！とオリアナの両手が地面につき、足を振り回すように上条を投げ出す。

ブワツと上条が投げ出され、地面を転がる。
だが、その程度で地面に這い蹲ったままになる上条ではない、転がりながら体勢を立て直す。

「ッー!!」

オリアナのフロントキックが立ち上がった瞬間の上条へ放たれる。
上条はそれに気づいていたかのように腕をクロスさせる。

ガンツ!!

ビリビリと腕が感じる。重いキックにたまらず上条も後方へ後退する
そして、上条はゾクツと何かを感じ取った

ビリッ

ゴオツ!と空を切る音を聴く。
聴いた上条は右手を前に伸ばす

バキィーン!!

「ゲツ!!」

オリアナが放った魔術は物理的に質量があつたのか、触れてから打ち消すまでのほんのわずかなタイムラグにより、上条の手のひらから、肘、肩までの関節に衝撃が加わる。

その痛みをこらえて上条が再びオリアナの方へ向き直ると・・・

カチッ

パラパラパラ

オリアナが次の魔術を放とうとしていた、今度は一枚なんかじゃない、単語帳それを束ねる一つのリングを外した。

「これで決める」

宙を舞う紙吹雪の上に筆記体で文字があわられた

『All of Symbol』

「我が身に宿る全ての才能に告げる」

掲げたオリアナの手の上に青白い閃光の球が現れる。

上条は直感した。

一回の戦闘につき、一回の予知・・・

闘いの最中に得た情報、学習。それらを整理して思いつく予知が、

上条は後ろにいたスタイルの胸倉を掴み、オリアナへと突っ走る

「お、おい！？ 何をするッ！！」

「—その前例を開放し目の前の敵を討て！！」

オリアナが大きく腕を振るい、球状の爆発が上条らの方へと投げられる瞬間、

上条はスタイルをオリアナの方へと押し出した

「ぐっ……！ 何をするんだ　ーぐおっ!？」

ステイルが頭を上げる瞬間、上条はステイルの背中を踏み台に大きく跳びあがった。

(僕を、踏み台に!?)

側宙をするように上条は青白い爆発を飛び越えた。
そして、球体がステイルに届く前に、

パキイン!

球体は飛び越えた上条によってガラス球が割れるように飛び散った。
そして白い中で溜まって圧縮されたものが噴出そうとしていた

(ほらな……予想通りだ……)

「っ!!!？」

急に爆発の上から飛び出した上条が爆発を解除したことにオリアナは驚愕する。

だが、オリアナが驚愕しているうちにすでに上条はオリアナの背後へ飛び越えていた。

「!!! しまった!!!」

オリアナが振り向く頃にはもう遅い、
上条のドロップキックがオリアナに炸裂した

ドゴッ

「グハッ！」

オリアナが後方へと吹き飛ばされた瞬間。

ゴッ

という鈍い音と爆風のようなものがオリアナを再び上条の前に差し出した

「これで終わりだボケ！！」

すでに立ち上がっていた上条が拳を構えていた・・・

ゴンッ！！！！

オリアナが再び後方へと吹っ飛ばされた

「正義は“死なない”のだ」

礎を担うもの《Basis104》(後書き)

今回はちょっと長くなったので二つに分断します。というわけで、
エピソード後半へ続く

礎を担うもの〈B a s i s i 1 0 4〉エピソード

「正義は“死なない”のだ！なんてな」

ゲホツゲホツと咳が聴こえてきた。

ステイルのものだ

「あれ？お前まだ生きてたの？しぶてえな？」

ステイルはそのまま倒れたままだ

「このつ……！人を囮にしやがって……！
テメエマジぶつ殺す……！」

ステイルは興奮状態なのか英語で話しているため、上条には何を言っているのかがさっぱりわからなかった

「日本語でおk」

「くうっ！君のせいで危うく死に掛けた！
だから病院まで運んでくれ！」

「元気じゃねえか」

「叫ぶだけでも精一杯なんだよ！」

『ならば我々が直して見せましょうか？』

「「！？」」

突如誰かの声が聞こえてきた

「誰だ！」

『尤も、それがローマ成教にとって最も有益だと判断できればですが』

「テメエは今どこにいやがる」

「あわてるな。リドヴィアはきっとこの近くにいるはずだ」

『誤解なきように告げて起きますが』

ステイルの声をさえぎるようにリドヴィアが続ける

『「使徒十字」クローチェデッピエトロは現在学園都市にはありませんので

「何？どういうことだ」

『そちらは学園都市内の「天文台」ベルヴェデーレを調べていたようですが、それらは全て我々が誘導した結果に過ぎないので。どうやら、外にある「天文台」にまで手が回っていませんが』

「一つことは、あの女（オリアナ）はただの罠……？」

『そうなりますので』

「なるほど、だから丸腰の俺達でもアイツを簡単に追跡できたわけだ……」

『ええ、「使徒十字」クローチエティビエトロ発動まで、残り107秒となりました。チエエクメイトです』

「それがどうした」

突如上条がリドヴィアの言葉をさえぎる

「俺のもともとの目的はオリアナを潰すことだ。いまさらテメエなんざ興味ねえよ。」

『……………』

「あるとしても、テメエが今回の事件の主犯だつてことであつて飛ばすつてだけだ」

『負け惜しみですか？』

「いいや、違うね……もともとテメエのその計画は失敗することが確定していたんだよ！」

『？ 言っていることがよく理解できないのですが？』

「星座を利用した魔術、必要なのは夜空に移る星座の絵が必要なんだ」

『それらを塗りつぶせると？ 一体どのような方法で？』

「『』できるんだよ『』それが」

その直後

ドガツと夜空に打ち上げ花火があがった

そのほかにも強烈な光がいくつも夜空の星座を塗りつぶした

『ま、まさか・・・!!』

「ナイトバレードだ」

上条は続ける

「俺がインデックスや美静に無理矢理約束させられたやつだ。時刻は午後18時30分ジャスト。要は、テメエの作戦も、オリアナの行動も全て無駄なことだったってことだ」

上条はリドヴィアとつながっているとされる単語帳のページを左手で拾い上げた

「ワリイけど、俺は他に用事や競技があるんだ。追いかけてこなら他の奴とやってろ。」

上条は最後に息を吸い込んでハツキリクツキリこう言った

「クソババア」

それだけ言って上条は左手に持っていたページを右手で握りつぶす

~~~~~

病院内 姫神秋沙の病室にて

姫神が目を覚ますとベッドの両脇には自分の友人達が眠っていた。ふと横を見てみると、見舞いの花束が置かれていた。彼女は誰がそれを置いていったのかわかった

（それにしても。野漆のししと夾竹桃きょうちくとうって。私わたしに対するあてつけだろうか？）

ズーンと言う効果音が聞こえてきそうなくらい姫神は落ち込む

野漆。花言葉は『控えめ。地味』

夾竹桃。花言葉は『油断大敵。用心』

だが、ある花を見てそれは吹き飛んだ

『黄菖蒲きしょうぼ』。花言葉は『幸せを掴む』

なんだか彼らしい花をみて彼女はクスツと小さく笑った

（あの人らしいな・・・）

礎を担うもの〈B a s i s i 1 0 4〉エピソード（後書き）

だれか僕に文才をください。



## 観光客

皆さんはこんな経験をしたことがあるだろうか？

ゴールデンウィークや、夏休みや、冬休みなどで、朝の四、五時くらいに目が覚めて、そのまま二度寝もする気がなく、みんなよりも早く起きてしまうことが、

上条当麻は今、そんな感じである。

大覇星祭初日から疲れるような依頼を受けて学園都市中を走り回り、それが解決した後はいつも通りビリビリ中学生や、以前殺し合った暗部組織『アイテム』のリーダーの全身ビーム砲に追いつけられ、また学園都市中を走り回る。

そんな事をやっていたにもかかわらず、上条当麻は何事もなかったかのように早起きをしている。

「不思議なこともあるもんだな〜」

そう呟き、いつものように玄関にある郵便受けに手を突っ込むしかし、今日は何時も手に受ける新聞紙の感触のほかに、何か別のものが手に触れた

「ん？ 手紙？」

表にはちゃんと自分の名前が書いてあった

『上条当麻様』

誰からだろうと裏を見てみると、

『学園都市統括理事長』

ちよつとだけ嫌な予感を感じつつ、上条は封筒を開ける

そこにはこう書かれていた

『拝啓 上条当麻様

このたびは、学園都市を外部の者の手から救っていただき、感謝申し上げます。

お礼として、「来場者ナンバーズ」の一等賞の商品、「北イタリア旅行5泊7日の旅」をご笑納ください

学園都市統括理事長 アレックス・クロズリー（偽名）』

手紙の中に入っていた一枚のチケット

それには『来場者ナンバーズ』に置いてある一等賞の見本と“同じような”ものが書かれている

『北イタリア5泊7日の旅 3人と一匹チケット』

「って何でピンポイントでウチの家族構成なんだよ!？」

上条がもう一度手紙を見てみると、まだ何か書かれていたことに気づいた

『P・S

一度こういうのを作ってみたくて、ちよつとがんばっちゃいました。ワイプロって意外に難しいんですね(笑)それとも、一台56000円のPCじゃスペック不足なんですか?』

「作ったのお前かよ!? つーかワープロで個人で作れるような物じゃねえだろ!?!」

「もー、煩いんだよとうま! 今何時だと思ってるの?」

我が家の暴食シスターが目をごすりながら上条に怒鳴る

「もう6時半だだろーが! さっさと起きろやニート!」

「え? ニーチェ? 神は死んでなんかいないんだよ? ところでそのチケットは何かな?」

「『北イタリア旅行5泊7日の旅 3人と一匹チケット』だ」

「三人と一匹……? ってことは! みしずに、スフィンクスに、とうまに、私のみんなでイタリアに行けるのかな!?!」

目を恐ろしいほどキラッキラさせているインデックスに若干引きつつ上条は答える

「お前が『パスポート』を持っていればの話だけどな。美静はパスポート発行したあとに学園都市に残ることに変更されたからな」

ほら、これだ。とインデックスに何回か使われた自分の『パスポート』を見せる

「とうまって、ヨーロッパのほうに何回か言ったことあるの?」

「ああ、むかし父さんと母さんと一緒に行ったからな。俺はヨーロ

ツパ圏の語学なら話せつから、通訳とかを頼まれた」

「え？とうまは喋れるの？」

「独りの時間を全て鍛錬に費やしたつつつても、やっぱり時間はたつぷり空いちまうからな、暇なとき、例えば超回復期間とか、主にヨーロッパ圏の語学を勉強してたな」

「英語は喋れないのに？」

「それが上条さんクオリティだ。ところで『パスポート』はあるのか？」

「うーん、その『ぱすぽーと』っていうのが何なのかはわからないけど、似たようなものならもってるかも」

そうやってインデックスは修道服の袖をゴソゴソと漁る。

はい、こんなの。とインデックスが英国式のパスポートを上条に差し出す

「ほー、こりゃ新しいな。一回も使われてねえ」

「いやいやいや、そもそもイギリスから来たはずのインちゃんかパスポートを一回も使っていないと言うのも変でしょう？ と美静はあなたのポケに的確にツツコミます」

いつの間にか起きていた美静をしばらく見続け、上条は呟く

「そついえば……そうだったな……」

空港前バスターミナルにて

「「「来ない」と美静は少々起こり気味に言います」「」「」

「とうま……もしかして私達って置いてk」

「言つな。まだ希望はある」

不意にポンと肩に後ろから手が乗せられた

「現実を見ようぜ？ と美静は半笑いで語りかけます」

ドヤ顔と半笑いを足して2で割つたような顔で上条に語りかける美静

「とりあえず、今お前は俺達と同じ状況だということも現実だと思  
うが？」

額にいくつかの青筋を立てながら美静に現実を突きつける

「しかたねえ……とりあえず、いったんホテルまで行くか」

とりあえずホテルまで行くことに決めた三人と一匹はバスに乗ること  
にした。外の気温とは違い、バスの中の気温はやはり快適だった

~~~~~

ホテルに続く道にて

「それにしても、食いモンばつかな。インデックス、美静、食いモンはホテルについてからな」

「わかってますよ。ただ私達はちよつと計画を立ててただけですよ。と美静は涎を拭いながら否定します」

「説得力のかけらもねえ語尾だな？おい」

「ねえねえ、みしず！ みしず！！ まずはどれにする？ 私はやつぱり『िकासミジエラート』を一番最初にしたいんだけど」

「修学旅行の女子グループか？ テメエらは」

キヤイキヤイワイワイ騒ぐ二人のテンションに上条はげんなりする

その時、

ドンッ

「おつと、すまねえな S c u s i」

上条より一回り幼く小さな少年が上条の腕にぶつかる

だが上条はあることに気づく。

イタリアに来たのは久しぶりであったのか、それとも旅行と聞いて気が振っていたのか、

上条はイタリアにはスリが多いことを失念していた

「あのヤロツ！！」

上条の声に二人がんと振り返る

「ちよつとバック見張つててくれ！ まちやがれ F e r m a t e ! ! 」

何が起こつたのかもわからず、ポカンと上条の後姿を見送る

~~~~~

数十秒後

先ほどのスリを追いかけていると、スリは橋のところで減速し、止まった

「L o r i n n u n c i o ? 」 おぼろめたのか

上条が歩いて彼のもとまで歩いていく  
すると、スリが口を開いた

『兄貴！ 頼んだ！』

スリの少年が上条の後ろの方を見てイタリア語で言った  
後ろ？

「ん？」

上条が後ろを向くと、そこには上条より一回り大きい屈強な男がいた

『よお、ジャポネーゼ。ただのスリだと思って油断したろ？ 今からお前から金をふんだくるついでにボコつてやるよ！』

「あゝー？」

ドカツ！バキッ！グシャッ！グチャッ

「Requiest cat in pace（安らかに眠れ）」

グッタリとした男の首根っこを掴み、上条は川へと投げ込もうとする。

その時、

「待つのでございますよー！」

「ん？」

どこかで聞いたことのある声があった  
声のするほうへ目を向けると、そこには……

「オルソラ……？」

「イタリアではスリくらい日常茶飯事なのでございますから、今回くらい多めに見てあげても良いのでございせんか？」

「いや……俺狙われたんだけど……」

「まあまあ、なのでございますよ。この子もまだ幼いんですから、お兄さんをなくされてはかわいそうでございますよ」

『まあ、金さえ返してくればいいや』

完全に毒気を抜かれた上条はとりあえず、財布を返してもらったことで事を収めることにした。けどスリの少年から財布を受け取る際、



「二度とするなよ?」

日本語で言った。

殺気を感じ取り、何を言ってるのかがなんとなくわかった少年は上条が財布をしまうのを確認すると、兄貴を引きずって駆け出した。とても上条より一回り幼いとは思えない力だった

「ところで、何でこんなところにいんだ?」

「あなたは学園都市在住でございましたよね?何故このような所に?」

「イタリア旅行権をもらった」

「ああ、私はちょっと引越してまだ前の住まいに荷物を残しているので、取りに来たのでございますよ」

「相変わらず話づれえな……」

相変わらず、究極にマイペースな人間が苦手な上条のため息をスル―してまたオルソラはマイペースな会話を始める

「ちょうどよかったのでございますよ。引越しのお荷物運びで、少々人手が不足してしまいました、時間に余裕があるのでございまして、ちょっとお時間よろしいでございましょうか?その代わりと言ってはナンでございますが、お昼をごちそうするのでございますよ」

「まあ、悪くはねえけどよ……（人とあんまり関わりたくねえんだ

けどな……)」

「ため息をつくると幸せが逃げると、日本では言われているので、  
いますよ?」

「ツツコマねえぞ? オルソラ。ツツコマねえぞ!」

「そういえば、インデックスさんと美静さんはどうなさんたので、  
ございますか?一緒ではないのでございますか?」

「インデックスと美静なら、ほら、向こうに……ってあら?」

「あら?あそこのジエラート店にいるのはインデックスさんと美静  
さんではございませんか?」

オルソラが指差したほうを見るとインデックスと美静がジエラート  
を頼張っていた

「イイイイイイイインデエエエエエエツツクス!!  
!!みいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい  
ううううう!!!!!!!!!!」

この大空に一人の男の雄叫びが響き渡った。

## 観光客（後書き）

最初のアレイスターの手紙の敬語がかなり苦勞しました。多分敬語は間違っていると思いますが、アレイスターは外人さんなので大丈夫だろう！

それと、ちよつと事情により、悪条さんはヨーロッパ圏の語学に堪能という設定を追加します。

## サブストーリー 家族（前書き）

実を言つと、早く0930事件編とスキルアウト武装集団編を書きたいと思っています。鬼畜が書きやすいので

## サブストーリー 家族

Someone had said “we are meant to lose the people we love. How else would we know how important they are to us?”

誰かが言っていた。『愛する人は必ずいなくなる。失って初めてその人の大切さがわかる』と……

ベンジャミン＝バトン

イタリア どこかの道にて

上条当麻は散歩に出かけていた。オルソラの引越しの荷物整理が一段落して昼食をいただいたいて別にするつもりないからだ。

（結局関わっちまったよ……最近こんなんばっかだな、俺）

他人ひとと関わることを拒絶する上条にとって誰かと関わることは何よりも恐ろしいことだった。

いや、恐ろしいのはただ誰かと関わることではない。関わった人が自分の不幸に巻き込まれ、あるいは自分の不幸の材料となることが恐ろしいのだった。

誰かを不幸にする度に上条は思い出す。

家に突っ込んできたトラックに自分を護るために命を失った両親を

……

巻き込んでしまった人を引きずり上げようとするたびに思い出す。

今の自分の家族を“あんな目にあわせてしまった”ことに

(やっぱり、俺は独りでいた方が良かったのか?)

そう考えていると反対側の道にある路地裏から何かが見えた

それは強盗だった。

外国というのはそういうものだ。スリ、強盗、ひったくり、詐欺

e t c

上条はそんなのは見慣れている。学園都市とそう変わらない。

ちよつと路地裏に入ればすぐに絡まれる、誰かが『強姦されている』

『強盗されている』『殺し合っている』。路地裏を利用することが

多い上条にとってそれは当たり前前の光景だった。

だが今の上条心情では、

それは彼の過去を思い出させるきっかけとなった

.....

皆さんご存知のとおり上条の異常なまでの身体能力は元々周りを助けようとする彼の努力の賜物だった。

自然と増えていった彼の『独りの時間』を彼はフル活用して体を鍛錬していった。

ある日、彼がいつも通り学校で忌み嫌われながらも授業を受けている時だった。

ちょうど上条の地元を拠点にしていた某新興宗教のテロのようなものが起こった。大体昼休み頃だろうが、10人くらいの老若男女が手製の凶器を片手に学校へ乗り込んできたのだ。ちょうど上条のクラスが占拠されてしまった。

しかし上条が隙を見てその場にいる全員を拘束した

『テメエらの思想を広めるのにコツコツと広めるのは別に構わねえ……けど、こんなことをして広めようとするなんてのは間違っている！ こんなことをしなきゃ広められない思想なんて誰も信用なんかしねえよ！！！』

彼の説教の内容は記録には残っていないが、拘束された何人かは改心した

オマケに人質は誰一人かすり傷すら負っていない

彼の努力は報われた

かのように思われた

『何言っただよ！ もとはといえはお前のせいじゃねえか！』

『くたばれ！ 「自作自演野郎」！！』

『二度学校に来るな！！！！』

みんなの反応はやはり酷いものだった

上条は『ヒーロー』になりたいたと思っただけじゃなかった。

ただ『不幸に巻き込んでも安全は保障するから仲良くしてほしい』  
だけだったのだ

だが人間というのは酷い生き物だ。猿だ。

自分の身の回りにあつた嫌なことなどを常に誰かのせいにしていないとやっていけない

『こんなに不幸なのはコイツのせいだ。だからコイツをやっつけよう』

この考えを免罪符に嫌なことの八つ当たりをする

上条は『疫病神』『自作自演野郎』として全員から嫌われているわけじゃなかった。

みんなにとって彼は藁人形サンドバグだった

ここまでされて上条がそれでも学校に通い続けたのは事件の人質のほんの一握りの家族による感謝の言葉だった。

『子供（弟）（妹）（兄）（姉）を救ってくれてありがとう』

この言葉が上条を救い、後に苦しめた

その一年後、上条の両親が死に、彼は約二年間漂流し、とある学園む都市へと流れ着く



『失って初めてその人の大切さがわかる』か……みんなは俺がいなくなつた後そう思ってくれるんだろうか』

そんな淡い希望など自然に消滅する

.....  
.....  
.....

「とうま〜!!」

上条が物思いに耽っていると不意に声をかけられた  
振り返るとそこにはインデックス、美静、オルソラがいた

「オルソラがオススメのデザートのお店を教えてくださいらだつて!!  
! とうまも行こうよ!!」

「みんなでいただいた方がおいしいのでございますよ」

「大丈夫ですよ。オルソラさんが半分だしてくれるらしいですから。  
と美静は大丈夫なのかどうか微妙な報告をします」

(何言つてんだらうな……俺は)

「はいよ」

こいつらから逃げられるわけないじゃん

サブストーリーー 家族（後書き）

あ、悪条さんの鬼畜を書かせてくれえゝえゝえゝえゝえゝえゝ

## 女王

太陽が沈んだ暗い夜道を四人は歩く

「あー！ おいしかったね！ とうま！ みしずー！」

これ以上とないくらい満面の笑顔を浮かべるインデックス

「オルソラ！ ありがとう！」

オルソラのほうを向いて彼女は礼を言う

「どういたしましてなのでございますよ。今日は手伝ってくれて本当にありがとうございます」

キレイな笑顔でオルソラはお礼を返す

「では私はこれで。機会がありましたら、ロンドンのお部屋にも招待するのでございますよ」

「はい、楽しみにしています。オルソラさんも、日本に来ることがありましたら是非お越しく下さい。歓迎いたしますよ。と美静は無愛想なご主人様の代わりに言います」

その時、インデックスがハッと何かに気づいた

「まさか……」

突然彼女は叫んだ

「みんな伏せて！」

バン！と銃を撃ったような音が響く

その音がした瞬間、上条は頭を少し下げ、頭のすぐ右辺りを何かの軌道を掴むように右手で掴んだ

ブシツ！！！

「くツ！！」

上条の拳から血が噴出すと共に何か飛び出し、オルソラの顔の前で消えた

ダダダダダダダ！！！！

と美静がどこから取り出した狙撃仕様の『おもちゃの兵隊』トインルジャーで応戦する

「だ、大丈夫でございますか！？」

オルソラがハンカチを取り出し、上条の手のひらにできた抉れた傷跡を覆う

その後指の傷に布を巻こうとするが

「今はそこまですてる余裕はねえ！ さっさと逃げろ！」

上条によって拒まれた

その時、

「とうま！ もう一人！！」

インデックスが叫ぶ頃にはもう既に上条の首根っこが運河から飛び出した何者かに？まわっていた

「しまった！！」

何とかそいつを引きずり出そうとするが、湿った縁に付いた苔に足を滑らせ、運河に引きずり込まれる

（クソがツ！！ 返り討ちに……ツ！？）

運河の中にはもう何者もいなかった

（ちっ！ 一手遅れた！！）

上条が運河から這い上がると、オルソラが上条を運河に引きずり込んだと思われる者に襲われていた

オルソラを襲っていた小柄な男が持っていたのは刃渡り10cmほどの槍だった。

オルソラは鳩が豆鉄砲を喰ったように動かない

そうしている内に槍の刃がオルソラへ向かう。

ガン！！！！

槍の刃を振り下ろす男の腰に上条がタツクルをかまし、男を壁に押し付け、男の腕を捻って片方の腕を背中にし、槍を取り上げる。

その状態でもう片方の腕の肩辺りを上条の左拳に殴り、もう片方の

腕も背中に回され、掌を合わせる形となる。

グサ

と生々しい音と共に男の両手が上条によって槍に串刺しにされる

「が、あああああああああ！！！！！」

槍は柄の方まで貫かれ、ある程度刺さった後、上条は槍を折り、まるで裁縫をするようにもう一度男の掌を合わせた両手に突き刺す。今度は両手首を突き刺した

グサ

とまた生々しい音が響く

「うわあああああああああ！！！！」

言う必要はないが、刺した刃物は抜いてはいけない。それによって傷口が広がり、ヒドイ激痛が来る。よって男はそのまま手を動かすこともできず、拘束された状態になった。

「何モンだテメエ……俺達に何のようだ？」

掌を二度串刺しにされた男の耳元で上条が囁いた

「……………」

しかし、襲撃者は口を閉ざしたままだ

上条は掴んだ刺さっている槍を握る手に力を入れる



その時、

ドパア！！！！

と水面がまるで爆発でもあったかのように跳ね上がる

そこから現れたのは氷のような床

ただでさえ水に打ち付けられるのは痛いのに氷の床なんかでやった  
ら『腹打ち』なんかではなく、最早プロレスにおける『フェイスク  
ラッシュャー』だ。

グシャツと鈍い音がして床に叩きつけられた男の顔と床の間からド  
ロっとした赤い血が流れる

さっさと立ち上がった上条がその男の後頭部に唾と共に

「まったくいい部下を持ったもんだな」

と、皮肉な捨て台詞を吐いた。

ふと、上条が横を見ると誰かがぶら下がっていた。

「すいませーん。ちょっと手を貸してもらえないでございましょう  
か？」

オルソラだ

なんでこんな所に引っかけたってんだと考えつつ上条は彼女を引き上  
げる。途中、船が急に動き出して「ゲフツ！」てなったが、なんと  
かオルソラを引き上げることができた

オルソラを引き上げた後、気休めで下までの高さを見てみたが、ど



うがんばっても20mくらいあった。

「この高さから落ちたら少なくとも『ボキッ』だな。いつ襲ってくるかもしれないわからないし、やらないほうがいいな」

「それでは、これからどうするのでございますか？」

「決まってるんだろ。ここでジツとしているよりも、中を探索して脱出の方法を探した方がいいだろ」

そう言いながら上条は船の内部の入り口へと足を向ける  
オルソラもそれに続いて歩き出す

氷の船内部にて

船の船内を歩く修道服をきた少女

身長は150cm後半と言ったところか

その少女は見張りとして船の廊下を徘徊している

彼女が廊下の突き当りまで言って角を曲がったその時、突如一般人の服装をした少年と鉢合わせした。少年も一瞬ギョツとしたがすぐに気が付いて少女より一瞬早く出た。

少女の頭を掴み、その顔を壁に打ち付ける

メキツと鼻柱が折れる音がした。

壁から顔が離れる時に、腹に一発膝蹴りを入れられた後、胸部に強烈なフロントキックを受け、少女は後方に飛んだ。ちょうど後ろにあったドアに突っ込み、その少女はその部屋の中でのびた。そして男はその扉を閉める

「あー、あの方、手当てをした方がよろしいのでございますか？」

その男、上条に怯える様子もなくオルソラは尋ねる

「そんな暇あつかよ。誰かが気づいて手当てでもするだろ」

そのオルソラを尻目に上条は歩き出す

(つつても、やたらにぶっ飛ばしてやるのは得策じゃねえな)

しばらく様子を見ようと上条は近くにあった部屋に入る

「なあ、この船、どこに向かってんのか見等つくか？」

「さあ、キオツジアから北上しているということは、おそらくヴェネツィア方面へ向かっているのだからございませうか。そちらの窓から見えるのではないでございませうか」

オルソラの指差した窓を見てみるとそこには広大な水平線が広がっていた。

その窓を見た直後、海面のあちこちから先ほどこの船が現れたようにドピアと次々と船が現れた

「こりゃあへたに外にでないほうが良さそうだな」

「そつでございますね……」

がちやり

二人が呟いていると後ろでドアが開いた

開いたドアから出てきたのは少女

上条は咄嗟に彼女のもとへと駆け寄って部屋へ引きずり込み、ドアを閉めて閉まったドアに押しつけた。幻想殺しが何かを壊したような気がしたが気にしてられない

「またテメエかアニエーゼ。今度は何をたくらんだ？」

「さ、さあ、何のことやら。いえ、私はただ侵入者の搜索の手伝いですよ。まさかあなた達だったとは。そっちこそ一体何をたくらんでいるんですかい？」

「私達はいきなりローマ正教の方々に襲われ、成り行きでこの船に乗ってしまったのでございますよ」

「おい！」

その言葉を聞いたアニエーゼはなにやらたくらんでいる顔をした

「ほう？　つまりここには何も知らずに来ちまって、あなた達は今敵地のご真ん中でピンチと？」

「はい、そうなのでございますよ」

「おい！　余計なことを言うな！」

「なるほどなるほど、（これは利用できそうですね。）上条さんって言いやしたっけ？　ちよいと取引をしちまいませんか？」

今上条の状況を察したアニエーゼは取引を持ちかけた

「言つと思つたよ」

「ええ、こちらの条件さえめれば、私もここで大声を出さないし、脱出方法もお教えしちまいますよ」

「そつちの条件はなんだ？」

「まあ、焦りなんさんなつて、なあに、簡単なことですよ。あなた方には“二人”ほど救出してもらいたいってトコです。二人は私達を解放しようと一度脱獄したんですよ。でも……」

「お説教つてか？」

「それだけならまだいいですよ。ここは牢獄、脱出の方法を潰す。つまり、二人が脱獄に使った術式を二度と使えないようにしちまうことです。似たような能力ちからを使う学園都市がくえんじよにはもう分かつちまってんでしょう？」

上条が思い浮かべる学園都市の能力者から能力を引き剥がす方法、それは『自分だけの現実』バーチャルリアリティの崩壊、剥離

すなわち

「脳みそぶつ壊すつてか？」

アニーゼとオルソラの顔が曇る

「ご名答。私とて頭の壊れちまった労働者を見ていい気分になるよ  
うなサディストではないんで　二人の救出を頼みたいってわけ

なんですよ。ここからの脱出方法はその二人から聞いてもらうってわけですよ」

「一応聞くが、その二人の名前は？」

「シスター・ルチアとアンジェレネ。あなたも会っちゃったはずでしょう？」

そういえばと上条は思い出す

「あの『シヤム猫』と『そばかす』の凸凹コンビか？」

「はい、『シヤム猫ベジタリアン女』と『そばかす甘党幼女』の“いろんな意味で”凸凹コンビです」

「選択の余地は無しか、交渉成立ってところか？」

もう押さえる必要のなしと判断した上条がアニエーゼから手を離すただちよつと引つかかることが上条にはあった

バサッ

さっきの幻想殺しの反応だ

アニエーゼの体からバラけた修道服が落ちた

「ああ、幻想殺しの反応の正体はお前の修道服か」

「どうも変わったデザインの修道服かと思ったら、その装飾が拘束効果を与えていたのでございましたか」

そういいながらオルソラがアニーゼの口を塞ぐ

「シューッ!」

~~~~~

さて、現在上条らはある部屋の前まで来ていた。部屋の前には巨大な氷の鎧がドアを塞いでいた

上条は救出する二人がどこにいるのかと見等がつかないが、少なくとも目の前に迫る氷の鎧がいる部屋を探せば手っ取り早く見つかると思った。

そうこうしているうちに目の前の鎧は手に持っているを上条の脳天へ振り下ろす

ガンッ!!--と砕いたのは上条の頭部ではなく床だった

バギン!!--と上条の手刀が棍棒をへし折る。上条の力で負ったわけではなく、上条の右手が折ったのだ

棍棒が折れたのを確認して、上条は鎧の胸へストレートをかます

バギン!!--

鎧の体が拳を受けたところから崩れていく

「大丈夫でございますか?」

「ロボットごときで俺を殺せるわきゃねえだろ。それより、この部屋にいると思うか?」

「それは分かりませんが、少なくとも、何人が術者がいると思われます」

「別にそんな情報俺には関係ないね」

そう言つて上条はドアの方へ歩いていく

バタン！！

上条がドアを蹴破ると中には7人ほどの男女がいた

そのうち2人は女、上条らが探していたルチアとアンジェレネだ

残り五人は男、上条は確信する。

敵だ

ゴギツ！

彼らが動く前に上条が動き、はじめに目の前に背を向ける形で座っていた男の頭を掴み、一気に捻り折った。そして男が倒れる前にその向かいに座っていた男を引き寄せ、机に力いっぱい顔を叩きつける。

グシャと血しぶきが飛ぶ。3人目の犠牲者は上条に床に仰向けに引き倒され、イスの背もたれを首に押し付けられた

残る二人、

怯えた目で上条を見る。

それに上条はドスのキいた声で話しかける

「なあ……もし、もしお前らにまだ齒向かつ気力があるってんなら……」

ゆっくりと二人に近づく

「爪は何枚剥がしてほしい?????」

殺意しか見えない瞳を向けて……

.....

残る二人の男は観念して上条に楽に気絶させられた

拘束するという手もあったが、なんせロープになるものがない、拘束できるものとしたら男達の腰に巻かれたベルトぐらだ。さすがに男の腰からベルトを剥ぎ取るのは気持ちが悪いので結局上条は気絶させることにした

「さて、単刀直入に言おう。助けに来た」

とはいっても元々敵であった上条が言っても二人は警戒したままだった

「その言葉を信用しろと?」

「まず俺らが気が付いたら敵地のど真ん中にいたって状況。脱出するにはお前らの使った術式とやらが必要。アニーゼに頼まれた。あとはわかるな?」

「そう言って、脱出したら私達を始末しようなんて魂胆でしょう?」

上条はそれに呆れたようにため息を吐き、頭をぼりぼりとかく

「あのな？ 俺らはここから脱出さえできればそれでオーケーなのわかる？ お前らを殺す理由なんてないつつうの。俺はただホテルに帰ってあつたかいふかふかのベッドで寝たい、ただそれだけ。お前らにマイナスな事をしてメリツトはないわけ。おわかり？」

「助ける価値がなければ素直に見捨てている、という訳ですか。…
…余裕ですね」

ふん、と鼻で笑うルチア

「ああ、お前らがここから脱出する術すべを持っていなければわざわざこんな危ない橋渡つてこねえよ。今の俺達はたとえお前らが俺に暴言を吐こうがここから脱出する手伝いをしなければならぬ」

ルチアが上条へ目を向ける

「それは悪くない条件ですね。ただ、問題があるとすれば、私達のこの修道服でしょうか」

「さつきちよつと試してみたらしつかりと迎撃術式が施されています」

「そんなん後で解除してやるから我慢しろよ」

「そんな殺生な……」

オルソラが彼を宥めるも

「そもそも世の中にはどんなに平凡な日常で生活していても『我慢つーもんが必要なときがあんだよ。テメエらみてえな現在禁止されている刑罰をされている、ましてや」

上条はオルソラを尻目に続ける

「人殺しの件に関わっているクズなテメエらがそれを避けて通れるわきゃねえだろうが」

上条は二人に厳しい言葉を投げる

「わかつたらさっさと行くぞ」

「ちょ、ちよつと待ってください！ シスター・アニエーゼはいつ合流するんですか？ いま何をしているんですか？」

アンジェレネに呼び止められた
ある必要なことをしているアニエーゼを……

「アニエーゼは今 陽動してくれてる」

「「えっ？」」

「わからなかったか？ 陽動してるんだよ」

「何で、ですか？」

アンジェレネが口を開く

「それじゃああなたはシスター・アニエーゼを見捨てたというので

すか!？」

次にルチアが少し怒鳴り気味に言う

「ああ」

「何ですか！ 何で見捨てたんですか！？ シスター・アニエーゼから聞いたはずでしょう!？」

「聞いてはいないが、大体予想は付いていた。その様子じゃお前ら

」

「アニエーゼが現在ヤバイってことだよな」

「あなたはそれを分かっててここまで……」

ルチアが悔しそうにギリと歯を鳴らす

「なんでわかってて見捨てたんですか!?!」

ルチアが上条の胸倉を掴み、怒鳴り散らす。だがそんな彼女を上条は

「言っただろ？ アニエーゼを助けるのは取引にない。俺はただここから脱出して、ホテルに帰って、暖かいベッドでさっさと寝たい。ただそれだけだ。アニエーゼはお前らを助けさえすれば、俺ら

のことは黙っててくれるって言っし、助ける義理はない。」

キツパリと上条は切り捨てた

「なら、あなた達は今もシスター・アニエーゼと取引をしていたときと状況は変わらないはずです。私達がシスター・アニエーゼも助けると言う条件を足してもいいはずですよ」

ルチアが上条らに取引を持ちかけようとしたとき、

ゴガツ！！と突如氷の壁を破る音が聴こえた

「悪いが、“タイムオーバー”だ」

現在他の艦隊は上条らの乗っている船に集中砲火をしている

砲弾が艦隊に当たるとそこが砕けるだけじゃなく、ヒビが広がっていく

船が沈むにはそう時間はかからなかった

女王（後書き）

途中、見当という感じを見等と間違っています。面倒くさいので修正はしません

救われぬ者に救いの手を！！〈Salvereeoo〉（前書き）

アドリアの女王編のネタが思いつかないけど、さっさと終わらせ

930事件を書きたいから無理矢理即興で書きます。

俺の幻想即興曲^{そげぶ}を見せてやるッ！！

救われぬ者に救いの手を！！〈Salveree00〉

冷たい海水の中、自分より先に落ちたオルソラ、ルチア、アンジェレネを追うために水を強く蹴って水を強くかく

現在俺は下に沈んでいる三人が沈むスピードより速く自分を静めている。順調だ。これくらいなら追いつく頃でも会場に上がるまで息が持つだろう。

問題があるとすれば……

現在俺の脚は攀いまつてる事ぐらいだ。

何とか一番下の奴のところまでたどり着いたが……

(いや、無理無理無理無理イイーーーーーッ！！！！)

！！ あ、足！！足があああ！！)

三人を抱えて必死で水を蹴って掻くが逆にどんどん沈んでいく
ここで三人を見捨ててもいいが、それだと更なる問題がある。上にいる艦隊の群れをどうやって掻い潜るかだ。いや、アノ量を掻い潜るのは無理だろう。だから今こうして三人を必死で上に引っ張っているのだ(下に沈んでるけど……)

(うおおおおおおおお！！！！ 燃えろおおおおおおおお！！！！
俺の何かああああああああああ！！！！！！！！！！)

ビキッ

という表現が合っているだろうか

(あっやべっ……もう片方の脚たのみ攀つなった……)

学園都市が用意してくれた高級ホテルの『すういーとるーむ』のベッドで寝るために奔走したのに海底の砂のベッドで寝ることになるとは……

~~~~~

気づいたらベッドの上　なんて幻想的あんぜんな場所ではなかったが  
少なくとも”危険な場所でもなかった

上条が今背中に感じているのは木の床だった

この薄暗い空間、彼のそばでインデックスが彼を見下ろしている

「何ここ？　地獄か？」

「とうま？　それは私に失礼なんじゃないかな？　こんな献身的な  
修道女シスターを見てここが地獄だなんて」

頬を膨らませて彼女が文句を言う

「目が覚めたのよな？」

どこかで聞いたような声をかけられた

「たしか……」

「なんか言えよ」



「建宮齋痔たてみやさいじつつたっけか？」

「おい、なんか最後の文字違くないか？」

建宮が漫画のような青筋をたてる

「おいおい冗談も通じねえのかよ」

「なんだかかなりムカつく冗談なのよな。まあ冗談が言えるくらい元気で何よりなのよな」

「ところでここはどこだ？ バカどもはどこだ？」

キョロキョロと周囲を見回して上条が聞いた

「安心するのよな。みんな回収しておいた。わかっているのはオルソラ、ルチア、アンジェレネ、あとは武器かあを潰された修道女シスター1人、重傷を負った修道士3人、傷のない修道女、修道士つてところなのよ。犯人は、誰かはわかっているはけどな……」

上条を横目でチラッと見据える

「モブなんざどうでもいいっての。俺が聞いてんのは、ここはどこであるかだ。」

「どこに見えるかな？」

建宮が屈んで言った

「どこって、どこかの秘密基地ぐらいにしか見えねえな」

なるほど、と言って建宮は笑う

「確かにどこかの秘密基地くらいにしか見えませんが、これは立派な乗り物なのよ。これ」

それを聞いて上条は少し考え、そして気づいた

「敵軍のど真ん中で深く沈んで、そして今俺らは“生きている”。そしてお前らはどっからどう見ても戦う気満々。つまり……」

上条が情報を整理するように呟いているとこのトンネルのような空間が動いた

「潜水艦、もとい潜水機能付きの木舟ってところなのよな」

ドパア！！と轟音が耳を劈いた。

グワングワンゆれた後に天井が二つに裂けた。そこから見える夜空と夜空を埋め尽くす星と月。今夜は十六夜か。天井が動く度に入ってくる陸上よりキツイ潮の匂いがする。

建宮が木の壁をなぞると歯車が回る音がして30m前後の床が持ち上がった

数十秒かけて上へ到達して見えた景色は月の光に照らされた夜の海の景色だった

「わあー、こりゃスゲーな。さすが天草式」

上条はちょっと皮肉を込めて言ったのだが

「いやー、あのような御仁と例えられるとはうれしいのよな」

良くある照れる仕草をして建宮が返した

そんな建宮を呆れた目で見てみると横からニユッと白いおしぼりを載せた手が伸びてきた

伸びてきた横を見ると、二重目蓋の女の子がいた

「どござ」

と差し出してきたおしぼりを上条は思わずとる

「あ、ああ、サンキユ」

「いえいえ」

上条が受け取ってお礼を言うと女の子はそれに返して去っていった  
手に握ったおしぼりを見て思わず口に出た

「いや、濡れた奴におしぼりってどうなのよ？ 暖まっていいけど

……」

少々困った顔で額におしぼりを載せる

蛇足の蛇足だが寒いときは頭を暖めると良い。体温の六割は頭から  
でるから

これ、豆知識な

「とござで、あちらさんでさっきっから人のことじろじろ見てるお

前さんトコの連中と凸凹コンビはなんなのよな？　ってか？」

建宮の口調を真似て上条が聞く

「ああ、あつちの凸凹シスターズは……まあ、修道服が変わろう？  
知つての通りあの装飾には拘束するチカラがあつてだな、それでち  
よこーつとお前さんの右手を借りたのよな。お前さんの右手が触れ  
た瞬間  
」

上条が二人の方へ首を向ける

「ストーンってか？」

建宮の方へ首を戻すと建宮は何故か親指をグツとやっていた。  
なんだそれは？　喧嘩売ってんのか？　喧嘩売ってんのか？

ゴホンツと咳払いをして上条が再び問う

「で？　お前んとこの連中は何なんだ？」

建宮は冷や汗をダラダラと流しながら上条から目をそらして頭をポ  
リポリかき

「あー、それは……まあ、聞き耳を立ててればわかるのよな」  
と上条に促す

言われたとおりこちらをジロジロ見ていたグループの話を盗み聞き  
してみると

『　　実力はいかほどのものか……』

『そこに疑問を抱くのは、あなたがオルソラ様救出作戦に参加していなかったから……』

『教皇代理が彼と遭遇してから次に教皇代理と会ったときに右腕と頭蓋骨にヒビ、内臓に大きなダメージがありましたよ……』

『ローマ正教が誇る250名の戦闘シスター相手に「癩に障った」という理由で宣戦布告とも……しかも武器も防具も持たずに……』

『近頃になって女教皇様プリエステスからお聞きしたのですが、学園都市では七天七刀を持った女教皇様プリエステスを散々挑発して「七閃」を真正面から突撃しても尚かすりもせずプリエステスに接近し、七天七刀を弾き飛ばして肉弾戦へもって行き、無傷で女教皇様を下したと……』

『あの方はもしや……』

上条の実績について聞いた少年がゆっくりとこちらを向き、

『「天使」……なのでし　　ッ！！？』

上条らの方へ目をやるとちょうど聞き耳を立てていた上条と目があつた。

「かれこれ16年弱生きてきて『疫病神』と呼ばれたことはあるが『天使』と呼ばれたのは初めてだな」

思わずそう呟いた

「心外か？」

「いや、別に『天使』とやらにそこまでマイナス的なイメージはねえしな。第一会ったこともねえ」

今の連中の方へ目を戻すと、また彼らは話し始めていた  
一つ違うところがあるとすれば、顔が真っ青になっていたところだろう

「ところで、美静は？」

「美静？」

「俺の義妹だ。<sup>いせつこ</sup>ショートデニムを履いて黄色いTシャツの上に白いパーカーを羽織っている。茶髪で髪はセミロングで後ろで束ねている無愛想な顔した中学生くらいの女だ」

わかりやすいように少々細かく上条は説明した

「ああー、禁書目録についてきたあのちよつと物騒なお嬢さんのことよな。それなら、向こうでちよつと寝てるのよ」

建宮の指差した方に美静が壁付近で『おもちゃの兵隊（トイソルジャー）』と『パズー砲』を抱き枕のように抱えてぐっすり寝ていた。ちなみに『パズー砲』というのはジ　リファンである美静が趣味でコツソリ作っていた『グレネードランチャー』のことだ。シェリー  
「クロムウエル撃退のときに初めて用いられた

煙幕を持っていないかと訊ねようと美静のもとへ行くこととするが、

ズルッ

すれ違った先ほどのおしぼりの女の子が持っていたおしぼりをいくつかこぼしてしまい、たまたまそれを踏んだ上条が滑ってその女の子の方へ押し倒す形で倒れた

「痛つつ……足グギツつた……」

「だ、大丈夫ですか!？」

心配そうに女の子が声をかけてくるが

「とうま〜?」

と純白シスターが上条の胸倉を掴んできた

オマケに後ろにいる天草式の連中がなにかを囁し立てている。うるさいのなんの。

『やっぱしとうまはいつもとうまなんだね〜?』

『なんだよ? 不可抗力だろうが! 俺は悪くないモンね』

『行け五和!!! チャンスだ!!!』

『そのまま耳たぶにチュツとやっちゃいな!!!』

『いや! むしろ胸でも押し付けてしまえ!!!』

『その前にまずは禁書目録（禁書）を何とかするんだ! 蹴っ飛ばすなりなんなりしてさ!!!』

『もー！！　とうまはいつつもいつつもー！！　この前なんか不良に絡まれてる女の子どこかのかっこいい不良みたいに助けたり、道に迷った女の子を助けて華麗に去っていったりしてさー！！』

『そりやお前が勝手に首突っ込んで行くからだろうが！！　道に迷った奴なんかお前のせいで勝手についてきたんだらうが！！　それに俺は、んな少女漫画的なフラグなんぞ建てた覚えはねえよー！！』

『もげるー！！』

『いいぞー！　もっとやれなのよなー！』

『まあまあまああ』

口論を始めるインデックスと上条、あわあわとしている女の子とそれにGOをするほかの天草式の面々、さらに自体を煽る建宮、頼に手を当ててどっかのお母さんみたいに微笑むオルソラ、はあー、とため息を吐くルチア、事を説明していたアンジェレネがおろおろとします。

まさにカオスな状況だ

アンジェレネが再び事を説明しようとしても聞いてた人はみんな五和と呼ばれた女の子にGOしているからだあーれも聞いちゃいない。

「あの一……そのうー、ええーつと！　ええーつと！！　クワツツ！！」

擬音の声とともに彼女は目を見開き、隣にいたルチアのスカートをグワシツ！と両手で掴むと

「ちゅ、ちゅーもおおおーくー！！！！」



ブワサア！

と桃源郷が現れた

瞬間。

この30mほどのフィールドの空気に沈黙が流れた

ルチアがキョトンとした顔で下を見ると、ボンツと顔を赤くしてフワリとなったスカートを抑える

このスカートを抑えた彼女の後姿をアンジェレネはどういう気分で見つめているのだろうか、そして　ギギギツと擬音が聞こえてきそうなルチアの振り向きを見るのだろうか

「シ、シスター・アンジェレネ？　これは一体どういう……？」

「ち、違うんです！　ほら！　部隊内では普通にやっていたことじゃないですか！！　それでついいつもの調子でやってしまっ……！」

彼女の弁解の声で再びこの場にうるささが帰ってきた。

ただし、今度は一人だけだが……

そのうるさくしている周りでは男どもが顔を赤くして気まずそうにしている。もちろん女どももだ。

その中でただ一人澄ました顔で上条は佇んでいた

そして言（行）った

「まっ、これで我慢するか」

(そ、それはッ……!!)

アンジエレネに『お仕置き』をしていたルチアがトマトのような真っ赤な顔をして上条を見た

ちんもーく!!

~~~~~

キオツジア海沿いにて

上条一行、天草式らは夜の海をバックに遅めの夕食を採っていた

「食わんのか？ 少年」

建宮が頭の後ろで手を組んで足組みをして座る上条に問う

「ああ……飯食った後に動きたくねえしな。それに腹が減ってねえ。俺は俺のやりたい事をやる、さっさとやる、さっさとやってホテルに帰ってフカフカのベッドでさっさと寝る。ただそれだけを考える。情報のためにここにいる」

「お前さんはいいとして、お前さんの妹さんはどうするのよな？」

建宮が未だに気持ちよさそうにくっすり寝ている美静を親指で指差して聞いた

「あいつはただの女子中学生と考えずに、ベテランのエリートのパル兵や軍人と考えていいだろうな。狙撃、ゲリラ、白兵戦、サバイバル能力、近接格闘術(CQC)、忍耐力、ある程度食わなくてもへ

「つちやらだ。少なくともこついつ時にはな……」

建宮はそれを聞いてゾツとした。

あの娘はただ物騒なだけじゃない。あどけない顔をして外国の本格的な軍人を超えているのだ

彼は畏怖の念を抱いた。その少女だけじゃない、学園都市にだ
こんなまだ若すぎる女の子をベテランの軍人に変えてしまうその考
えと技術に……

「もういいだろ、さつさと本題に入れ」

「あ。ああ……」

上条に言われて建宮が本題を切り出す。

アニメーゼ部隊がやっていた作業、アドリア海の女王、ソドムとゴ
モラ etc

上条の頭に、いや耳にそれは入ってこなかった。どうでもいいから
だ。

上条の『目的』を果たすのに必要な情報、もしくはそれに関する情報

そしてある時にそれは来た。

インデックスが言った言葉

「たぶん『アドリア海の女王』を守る『女王艦隊』だと思っけど、
間違っていないかな？」

それにギョツとしたルチアとアンジェレネに聞く

「その『女王艦隊』にあん中での責任者のいるか？」

「ええ、指揮官の名はビアージオ「プゾーニ」。階級は司教。枢機卿を超えるほど狡猾な男です。単体よりも、複数を動かすことに特化した司教と聞いています」

「それだけ聞きゃあ充分だ。あとは好きに話し合っけてくれ」

そう言っつて上条は席を立つ

「一つ、聞きたいことがあります」

上条の背中にルチアが問いかける

「あなたの目的は……一体何が『目的』なんですか？」

「……言っつてんだろ。ただホテルのベッドで一晩ぐううつつすり寝たい。誰ほかにも邪魔されずにな……だからビアージオ「プゾーニ」を“ぶつ殺す”」

全員が押し黙る。

「別にお前らが来なくても俺は構わない、邪魔だし。別に相手が100人1000人送っつてこようが関係ない。全員ぶつ殺してやりゃあいい」

上条が建宮のほうへ向く

それがどんな意味を表しているのかは不明。建宮を代表として天草式全員に言っつているのか、建宮個人に言っつているのか……

「建宮。テメエも玉付いてんなら『目的』果たすために腹あ括れよ。

んな安全を浅ましく求めて他の策考えてねえで、一番最初に思いついたことを躊躇なく発表したらどうなんだよ？ テメエは一夕答え合わせをしてから次の問題に移るのか？ 『瞬間』と『刹那』は待つちゃくれねえんだ」

しばらくの沈黙が流れた

そしてその沈黙を破ったのは建宮だった

「ハッ！！ 悔しいが、まったくその通りなのよな！！」

建宮が笑って言った

「そうだよなあ？ 事は一刻を争うつてのに、一々全員の覚悟を確認している暇なんぞないつてのよ！！」

クククと目のあたりを押さえて建宮は笑う

「そもそも、全員生きて帰るつもりなのは確定しているっていうのにそれをわざわざ確認するとはこの『建宮斎字』、一生不覚なのよな」

そして教皇代理は部下達にハッキリクツキリ告げた

「全員必ずここへ帰ってくるぞ。全員“生きて”だ。『死にたくない』だの『主義を貫き通す』と考えている奴は今すぐ降りる。一切の妥協はなしだ、戦場へ向かうからには全員で帰る。わかったな？」

その『全員』は黙って建宮を見据えている。

沈黙は、肯定。

そして建宮は大きな声で小学校の先生のように尋ねる

「我らが女^{プリエステス}教皇様から得た『教え』、そして誰かさんが教えてくれた最終的な『目的』は？」

声をそろえてみんなが言った。

「救われぬものに救いの手を！！ 生きて終わらせて帰ってぶっかぶかのベッドで寝る！！」

何かの覚悟をするというより、
まるで学芸会前日の風景だ

救われぬ者に救いの手を！！〈Salvereeoo〉（後書き）

建宮の口調がわからない。やたら語尾を入れると不自然さが沸くのでたまたに語尾を抜いて誤魔化しています。

ちなみにこの話、即興で書いたので相当ggggggです。

やっぱり事前にちゃんと計画しとかないとな……

サブストーリーー 最愛の人からの手紙（前書き）

悪条さんの続編を未だに待っています。

私デース！

何やってんだろっな？ 俺……

サブストーリーー 最愛の人からの手紙

天草式上下艦にてインデックスに執筆された出されることのない手紙より

初めて会ったとき、あなたはイジワルだった。

でも、ちよつと優しくかった。

あなたの目を見たとき、「この人こそ救われるべきだ」と思った。

だって、目が全然幸せじゃなかったもん。

あなたが私と、美静おねえちゃんを受け入れてくれたとき、すつごくうれしかった。

だって家族がほしかったんだもの。

人と関わることを嫌って恐れたあなたは今では積極的に……とはいかないけど、でも人と関わることを恐れなくなったね？

始めて会ったときのあなたが私をスルーしたときに向けた背中はずごく寂しい背中だったけど、

今の背中はずちよつと大きくて、暖かくて、最初よりも背負っているものが増えてるよ。

私と美静おねえちゃんだけじゃない、ホント色んな人の人生いのちを背負っている

今でもあなたは人と関わることを恐れているけど、でも大丈夫。

私達がいるよ。

一回心配掛けちゃって、今じゃ杖突じのあげだけど、もう二度と一人にしないよ。

私も美静おねえちゃんも強いから！

あなたが他の人を巻き込んだりしても私達が何とかしてみせる。

だからあなたは安心してみんなを背負っていいんだよ。

あなたが死にそうになっても、絶対に死なせはしないし、私達も死なない。

安心して元に戻っていいよ。

ねえ、とうま？

いつかとうまが本当のとうまを見せてくれるのをインデックスとみずは楽しみにしているんだよ。

P・S

無茶だけはしちゃだめなんだよ？

インデックスより

サブストーリー 最愛の人からの手紙（後書き）

この物語が終わったら、上条さんがスキルアウトとして生活するエピソードでも書いてみようかなーなんて思ったりします。

司教へピシヨップ (前書き)

最近『ニホンちゃん』にハマりすぎて、続きが書けない今日この頃、書かせていただくZEE!!

あと、滅多に描写しないから皆さん忘れていますが、インなんとかさんは竜王ドラゴンの殺息キレスを食らった後遺症で杖を突いている設定です。

あと、一方さんは(私の)都合により杖を突いていません。

司教へピシヨップ

女王艦隊突入前

「なあ」

「ん？」

「なんかお前の杖変わってねえか？」

インデックスがイタリア旅行中まで突いていた学園都市製の現代的なデザイン（原作のセロリの杖）の杖とは変わり、インデックスの杖は柳の木の杖を持つところ以外を銀でコーティングされた杖に変わっていた

持つところが鳥の頭の彫刻になっており、腕を支えるところは翼状で、銀でコーティングされた箇所には茨の彫刻が施されているという不気味なデザインだ。

「これはね、『賢者の子供達』っていう杖の霊装でね、これに触れている間は激しい疲労に襲われる代わりに自分の衣服にとうまが壊した私の『歩く教会』とほぼ同等の加護が得られる霊装なんだよ。

『賢者の石』の亜種で、人を復活させたり、どんな病気も治すという効果はないんだよ。それと――

インデックスのいつもの魔術に関するわけのわからない説明に上条も耳をふさぐ

「まあ、つまりその杖は疲労が激しくなる代わりに、自分の衣服に絶対的な防御力がでることだろ？　なのに何でお前は疲れてね

えんだ？」

話をそらすために上条が質問した

「これは、私みたいな魔力を流せないと疲れないんだよ。とうまも右手以外で触れば手袋でもつけない限り、とうまの衣服に『歩く教会』と同じ加護が得られると思うよ？」

「んなもん、どっから持ってきたんだ？」

「天草式が私の杖について質問してきて、訳を話したら今の私にピツタリって言うてくれたんだよ」

なるほど、と上条は納得した。

確かに、天草式の連中、ほかの魔術師だと、疲労でまともに扱えないだろう。

ならば、その影響を受けないインデックスだったらきつとうまく使えるはず、と天草式は考えたに違いない

「まあいい、もうそろそろ突入だ」

~~~~~

月の光を反射して白金のように輝く床にインデックス、美静、オルソラ、そして上条の4人の足が降りる

「あきませんね」

美静が近くにあった扉に手をかけたが開かないようだった

「なら壊しちまえばいい」

不意に後ろから放たれた拳が美静の耳をかすって扉を叩いた。

バキン！

扉の中央に当たった拳を中心に扉が砕け散った

「なるほど、やっぱりか」

16年弱も異能を消し続けて得た第六感が感じた異能の違いを感じ取った上条が納得したように辺りの壁や床を見渡した。

「どおりで網目状に違和感を感じるわけだ。気持ち悪いったらありやしねえ」

「ブロック構造だね」

それに対してインデックスが簡潔に答えた

「必要最低限の部分だけを切り取ってダメージを軽減する。さっきの護衛艦隊みたいに、一箇所を攻撃するとほかの箇所までヒビがわたることを抑えることができるんだろっね」

「なるほど、わかりやすい」

「とうま、できるだけ右手はポケットの中とかにしまったほうがいいよ、誤って床に触って、下に落ちてまた床に触るなんて無限ループになっちゃうから」

「はいはい」

壊した入り口に入る3人に続いて上条が入ろうとしたとき、

ズアッ！！

と甲板のところどころが盛り上がり、さきほどの氷の鎧が数十体ほど出来上がった

「学習しようぜ？」

ダッ！！と四人一斉に駆け出した。

走り出した瞬間、斧をもった氷の鎧の斧が上条の右肩をかすった

(ん？ こいつら……)

しばらく逃げ続けていると、上条はあることに気づいた

(なるほど、こいつら俺の右手を獲ろうとしていやがる……)

自分の右手が最も優先されていることに気づき、

「先に行ってる。お片づけしてくる」

このままじゃ埒があかないと思った上条が丁字路の角に来たとき、少女たちが曲がったほうとは逆に曲がった

「とうまー！」

少女が叫んだとき、氷の鎧の軍団が上条の曲がったほうへ曲がり、



インデックスたちは見えなくなつた

「右手がほしいか？ なら来いよ！！」

インデックスたちに自分を待たせないために上条はすぐ近くにあつた角を曲がり、氷の鎧の大群がすべて見えなくなるころには少女たちの目の上条はいなかつた

~~~~~

随分長く走つた上条が立ち止まり、氷の鎧の大群へと突っ込んでいく。その上条へ容赦なく斧を振り下ろそうと先頭の鎧が斧を振り上げる。そのとき、

バギン！！

上条の右手が胴体に触れた

振り上げられた斧は鎧が消えると鎧が振り上げようとした勢いに従つて空中に投げ出された。

上条はそれを右手けんすうてに触れないように抱えて落ちる位置を調整し、

「おおおおつ！！！！」

掛け声と共に自由落下の力に加えて腕の力でほかの鎧に叩き込む

ガシャアアアアアアアアアアア！！

と数体の鎧が粉々にされ、それぞれの持っていた巨大な武器がほかの鎧にあたり、ボーリングのようにほとんどの鎧が崩れた。

次に上条は一メートルほど先の床に指先で触れ、一步先に穴を開けた。

間抜けにも残った数体の鎧たちはまっすぐその穴にまあああっすぐ突っ込んで行き、穴に落ちると走っていた勢いで穴の縁にぶち当たり、すべて粉々に砕けた。このシステムを考えた者が見たら顔から火がでるであろう光景だった

「なんだかファミコンのゲームみたいだなwww」

最後の一体が壊れるころにはその床は鎧達の体で塞がっていた

上条は自分の標的、ビアージオ「ブゾー」を探すために歩き出した。数メートル歩いたところで、上条が突如叫んだ

「チェック！」

その瞬間、鈍い音がして天井が崩れ落ちてきた。

上条は上を見上げ、自分に当たるであろう氷の破片を砕いた

そして、上条はまた数メートル歩いて立ち止まり、振り返った。

そこに佇んでいたのはいかにも成金といった感じの法衣に身を包んだ男だった

「その右手……」

「（アナゴさん……？） ほしいのか？」

「いやあ、結構だ。主の恵みを拒絶し、それを武器として振り回すくらいなら、一生かけて右腕を引き千切る努力をしたほうが何億倍

もましさ」

上条自体を蔑んだ顔で見ってくる

「そして神聖な右手についている。それは所有しているだけで間違
いなく主の顔に唾を吐く行為だろう」

「ハッ、言ってる」

「フン、所詮異教の猿に人間の考えは理解できんだろうな……なら
ばこのビার্ジオォブゾーニが引導を渡してやろう。貴様が人間で
ないことを今ここで証明してやろう」

キン、とビার্ジオが胸にあつた十字架を両手で一つずつ取った

「十字架は悪性の拒絶を示す」

ヒュンと上条へ放り投げられたそれらは砲弾の発射の速さで膨張し、
上条へまっすぐ向かう

ババン！！

上条が右フックをするように腕を振るい、二つの十字架は両方とも
消えた

「悪竜に飲み込まれたときに十字架を肥大させることで腹を突き破
つたっていう話を聞いたが、まさか」

フンとビার্ジオが鼻をならして答える

「まあ、そんなところだ」

ピアージオが右手で十字架をいくつかグワシと掴むと天井へ勢い良く投げた。

投げられた十字架は天井に跳ね返ると一気に肥大化し、勢い良く床に突き刺さり、一つの壁を作った

「壁!?!」

あわてて壁を殴ると手ごたえと音はするものの、そこがあったのはまた壁だった。

(十字架の壁を何枚か作りやがったのか……!?!?)

上条がすべての壁を壊すころにはすでに壁の向こうにはピアージオはいなかった

「してやられた……!?!」

上条は齒噛みする

何故なら“その通路はすでに細工されていた”からだ

この三沢塾のときと同じような感覚。

きっと誰かが“この通路に細工したに違いない”

~~~~~

上条は細工された通路を 血まみれで歩いていた。

ブシッ!!

歩いていた上条の右手の一部がプクツと膨れて血を勢い良く噴出した

「くあつ……！」

バツと上条が手をそこから引つ込める

この通路に施された細工は簡単に言うところ所々の空間をこの世のどこかにある過酷な空間と接続する魔術だ。

灼熱の空間と接続されているところもあれば、極寒の空間と接続されている空間もあり、真空空間と接続されている空間もある。

何故その空間に右手が触れても消えず、且つ右手にダメージが言っただのか、

それは簡単だ。

空間と空間の状態を接続する現象は“現実にある”のだ

この魔術はその現象を引き起こす『引き金』でしかないのだ。

しかもその状態を維持するのに『引き金』を引いたままにしておく必要がある。

まるで機関銃のように……

この状況を打破するには術者を見つけ出してその『引き金』を引いている手を叩くしかない

おまけにこの通路には路が無限に続くものに施されている。

以上は上条の考察だが、十中八九間違いない。

ジュッ

今度は上条の脇腹が灼熱の空気によって焼かれた

「ぐっ……ぐえっ……はぁ……はぁ……」

胃の辺りに変な刺激をされて上条も堪らず胃の中のものを吐き出した。

血と共に吐き出したあと、上条は床にぐったりとたおれた

(くそっ!!… どうすれば……!! 何処にいやがるっ……!!…)

フラフラと立ち上がり、再び上条が歩き出す。

~~~~~

大きな部屋の中央に氷の球体がある。

その部屋に「アニエーゼ」サンクティスが球体に寄り添っていたがちゃん、と両開きの扉が開いた。
そこにいたのは

「オルソラ……アクイナス？」

それにオルソラが微笑んで告げる

「よく……よく、よく無事でございましたね……」

聖女のような微笑で……

「何で、ですか……？」

「？」

アニエーゼの眩きにオルソラがとぼけた態度をとる

「あなたはこの女王艦隊から逃げ出したい。だから私の策に乗ったんでしょう？ 今がどんな状況なのかわかっていているんでしょう？」

オルソラがアニエーゼの問いを首を横に振って制した

そして言った

「だからこそなのでございましょう？ 皆を助けようと口を噤んだあなたを置いて自分だけ助かるうなんてことはできなかつたのでございませよ」

「あなたは……あなたは私たちにあそこまでやられておいて、それでも私たちを助けに来たとでも言うんですか？ どうしてあんな事を水に流せんですか？」

「その答えは、あなたもわかっているのでもございましょう？ そうでなかつたら、あなたは私たちに提案をするときに自分も今危ない状況だとおっしゃっているはずでございませ」

「……っ」

「たとえどんなに絶望的な状況でも、あなたを含めてもう一度みんなで笑いたい。それを手伝ってあげたい。それで良いではありませんか？」

アニエーゼはオルソラの目をわずかに見て、震える唇から何かを紡

ぎだそうとしていた

「わ、私、は」

「悪いが、そんなことを許すほど、こちとら暇じゃないんだよ」

突然男の声が割り込んできた

「困るんだよ。シスター・アニエーゼ、己の役目から逃げてもらっちゃあ……たしかに、君がここで死のうがどうなるうが、計画が途切れることはない。でも、また同じ事をするのが面倒くさいんだよ。私は面倒くさいのは大嫌いなさ」

オルソラが持つていた天使の杖をぐっと握り、声のほうへ振り返った。

「さてさて、君らの主力である戦車は潰した。あとは君らだけだ」

「戦車……？」

なんとなくその意味がわかったオルソラは杖を持つ手にさらに力をこめる

「おわかりじゃないか？ あの東洋人の猿だよ。ちよつと姿を見せたら簡単に私の部下の罠に誘い込めたよ。今頃見るに堪えない肉塊 になっっているだろうさ」

クククツとビアージオの口から堪え切れなかった笑い声が漏れ出る

「対ヴェネツィア用術式、そのような時代遅れの骨董品の輝きを取り戻すことが、あなた方にとってそんなにも魅力的なことなのでございませうか？」

「ほう、やはりわかっていないようだな。ちがうよ。私たちが目指しているのはヴェネツィアを攻撃することじゃない、“その先だよ”」

「その先……？」

「そうさ、その先さ。いくら魅力的な威力だからといって、今のローム正教にヴェネツィアを攻撃する理由もないのに水の都を壊すなんてしない。だが、ヴェネツィアしか攻撃できないという照準制限がある。……それをなくす方法が合ったらどうする？」

「ま、さか……」

オルソラの目が見開かれ、呼吸が止まる

「おそらくあたっているだろうな。そのための『刻限のロザリオ』だ。そして敵対する科学の集う地に向けるのだ」

「学園都市を！？」

「そうだよ、世界のすべての科学に影響を与えている『学園都市』を潰せば、科学なんぞ忌々しいものは一夜にして駆逐することができるのだよ……！」

「あなたはッ……！！！」

オルソラは歯噛みしながら持っている杖でピアージオに殴りかかる

「十字架は悪性の拒絶を示す」

キン、と十字架を杖の軌道上に放って肥大化させるだけで杖はオルソラごと弾き飛ばされた

「少し早いが、そろそろ始めるか。シスター・アニエーゼ」

えっ？ とアニエーゼがキョトンとしていると氷の球体にギョルリと大きな穴が現れた

「喜べ。シスター・アニエーゼ。君は十字教の歴史上で最も多くの敵を葬むったという名誉を得る」

ガン

天使の杖が床を突く音が聞こえた

オルソラが天使の杖で体を支えながら立ち上がり、アニエーゼの前に立ちふさがるように歩いた

「そのあなたの言う『敵』の中には、アニエーゼさんも含まれているのではございませんか……ッ!」

その姿を見てピアージオはあきれたようにため息をついた

「やれやれ、今のでわからなかったのかな？ 君じゃ私には勝てないのだよ」

オルソラは今度は落とすまいと杖を握る力を最大にした

だがその杖をアニエーゼによって掴まれた

「彼の言うとおりですよ。シスター・オルソラ。あなたじゃ彼に勝てない……」

オルソラの杖を彼女は取り上げる

そして構えた

「だから私に任せちゃってください」

ピアージオ・ブゾーニに向かって

「何のつもりだ？ シスター・アニエーゼ」

アニエーゼはフフンと馬鹿にしたように鼻で笑う

「何のつもりだと聞いているのだ!!」

「はて？ 間違っているんでしょうかね？ こんな私が、ほかのシスターたちの面倒をまだ見たいと思っっているのも、あなたのクソみてえな命令で戦わされてるシスターたちを想って憤ったりすんのも!!」

「舐めてんじゃ……」

ふるふると震え、血がでるほど歯を食いしばった

「ねえぞ!! この罪人どもがアアアアアアッ!!!!」

ピアージオが胸の十字架を筆りとしてアニーゼらに向けて投げた

「 シモンは『神の子』の十字架を背負う!！」

ピタンツ!!!

二人が同時に床に這い蹲る

「私に敵わないのは君も同じだよ。シスター・アニーゼ。残念だよ」

数個の十字架をキン、と外す音が二人の耳に聞こえた
彼はとどめをさす気のようにだ

「 十字架は悪性の拒絶を示す」

ガンツ!!!

ただし、吹き飛ばされるのはピアージオだが

~~~~~

少しさかのぼった細工のされた廊下にて

上条は再び倒れた

体についた傷や血の量は先ほどよりも増えている

( ついに、痛みがなくなっちゃったよ……こりゃ、もうそろそろ限界だな………ん?)

上条は再び立ち上がった

ヨロヨロとしてはいるが、最初に立ち上がったときよりも力強く

ダッ

と上条が駆け出した。すごいスピードで駆ける彼を容赦なく苛酷な環境に接続された空間が襲うが上条はそれを無視する。そして飛んだ。

ガン!!

壁に向かって飛んでそのまま壁を数歩走った跡に壁を蹴って床にダイビングする

ゴンッ!!

着地した上条に海の深いところと接続された空間が襲った。しかし、上条は勝利を確信した。

もう一度駆け出し、先ほどのように壁を走っては着地、走っては着地を繰り返した。

そして何回目かの着地の後、上条の目にあるものが映った

「みーつけた」

そしてまた壁にジャンプをし、今度は走らずに高く飛んだ自分の目に映ったこの罫を張った本人に向かって

グシャッ!!

上条の手のひらが術者の顔を覆い、後頭部を床に押し付けるように押し倒した

「な、なんで……ここまで……!？」

口を押さえられているが、なんとか術者は声を出し、疑問を投げかける

「俺の吐いたモンでわかった」

「?」

術者はまだ解らないようだ

「俺が血と一緒に吐いたモンが壁にもかかっていた。だが、床に付いたほうは俺の後ろに行ったのに、なぜか壁にかかったほうはそこから動かなかった……」

「!？」

「つまり、あれはただ単に廊下が無限に続く魔術じゃない。廊下の床が後ろに動いていたんだ、その空間と一緒に。俺が見ていた幻覚は壁が床と一緒に動いているように見えただけ。いくらなんでも幻覚を見せただけじゃ狭いスペースを永遠に走ることなんてできないからな」

そして、と上条はつづける

「こんなことを一人でやっていたんじゃない、きっと術者はその場から動けないはずだと考えたわけだ」

手を外して上条がたちがる。

だが術者は後頭部を打ったせいで立ち上がれなかった

「文句はねえよな？」

ガギッ！

思いっきり振りかぶった足が術者の下あごにクリーンヒットした。顎が外れる音がしたがしょうがない。

彼を怒らせたのが悪い

~~~~~

上条はとうとう扉の前まで来た。

そこで上条が見たのは床に這いつくばっているオルソラとアニエーゼ、そして十字架を胸から掴み取るビアージオだった。

「十字架は」

ビアージオが喋りだすと共に上条は駆け出した

「悪性の拒絶を示す」

ビアージオが十字架を投げようとするが……

ガンー！！

肥大する十字架は彼女らの上には刺さらず、代わりに上条の拳がビアージオの顔に突き刺さった

上条の拳を食らったビアージオは数メートル吹っ飛んだ

「詰み（チェックメイト）だ。クソツタレ」

ペツと血の混じった唾を吐き捨てる

「よかった。生きていたのでございますね!!」

「たりめーだ。俺を何だと思ってやがる」

「すごく単純な方だと思っているのでございますよ」

きれいな笑みで返されて上条もげんなりする

そのとき、上条は見た。

血走った目でビアージオが起き上がるのを

「てめえ、まだやるってのか？ あア？」

アニエーゼが突如後ろで苦しみだしたが気にしてられない

「てめえ……!! まさか……!!」

フッフとビアージオが笑う

「そうだ。もし仮にこの艦隊を敵にでも奪われてみる。そんなことがおきたら大変なことになる。だから最後の手段として『自爆』をするのさ」

「いや、さすがにそれは予想していなかったな」

ビアージオがガクツとズッコケた

「とりあえずオルソラ、アニーゼをつれて甲板に出ろ」

そんなビアージオを無視して上条がオルソラに言った

「あなた様はどうされるのですか？」

「言っただろ？ 俺の目的はあいつをぶっ殺すことだ。あとでかならず行く」

上条は邪魔だ、とでも言うような目でオルソラを見つめた

「絶対に、でございますよ？」

アニーゼを引きずって歩くオルソラを見届けた後、振り返るとビアージオがすでに十字架をその手に持っていた

「ラストのターンだ……さっさと駒を動かせよ」

「言われなくてもわかっている……！」

十字架を床に叩きつけると小さな十字架は大きく跳ねた

「十字架は悪性の拒絶を示すツ……！」

ビアージオが叫ぶと跳ねたそれらは一気に肥大化して上条を襲う

VS 『ローマ正教 司教^{シムシム} 女王艦隊指揮官 ビアージオ』 『ブゾーニ』

降り注ぐ巨大な十字架の雨の中、自分に当たる十字架を右手で打ち

消し、まっすぐ上条はビアージオに突っ込む

キン

ビアージオが十字架を上条に投げつける

「十字架は悪性の拒絶を示す!!」

巨大化して自分に向かってくる十字架に上条は掌を突き出して迎え撃つ

パキン!!

その音がしたとき、ビアージオの顔が驚愕にゆがむ

「なっ!?! どういうこと

」

そついかけたところで上条が“右手を押し付けた”十字架を押し付けられた

あまりの勢いにビアージオは引きずられ、壁と十字架にサンドイッチ状態にされる

「ど、どういうことだっ!?! 何故、右手に触れて消えない!?!?」

ピシッ!

上条の指が十字架に食い込みひびが入る

「俺は16年弱も『幻想殺し』^{げんそうし}を所有してあることに気づいた……」

上条の指がさらに食い込み、ヒビもさらに広がる

ピシッ！！ パシッ！！

「『幻想殺し』は右手から何らかの力が漏れ出て、異能の力と相殺されて幻想を消すんだ」

ミシッミシッ！！

「ぐっ！ ぐおおおおおおおおお！！！！！！」

堪らずビアージオが悲鳴を上げる

「だったら“その量を調節しちまえばどうなるか？”大体予想は付く、異能の力を消しきれないモンで『不定形のものなら掴んではじき返したり、そらしたりすることができ』『固体でも敵が油断する』」

ボゴッ

上条が右手を思いっきり握り締め、その十字架の箇所が抉れる

「今のテメエみたいになあああああああああああああああああ！！！！」

その握り締めた拳を大きく振りかぶって十字架ごとビアージオの胸を殴る

右手の力を弱めたまま十字架を殴り、十字架の破片は四方八方へと飛ぶ

バキン！！！！という音がして彼の胸に下がっていた四本のチェーンが千切れた

胸に拳を食らったピアージオは壁に背を預けるように崩れ落ちる

「今度こそ『詰み（チェックメイト）』だ」

崩れ行く『女王艦隊』で蓄積したダメージがピークに達し、上条はその場に崩れ落ちる

~~~~~

イタリアのどっかの病院にて

目が覚めたら病院のベッド……ではなく、病院の担架だった

「あー、ツイてるなー。いや、むしろ不幸だよな？」

そりゃそうだ

もし死ぬことが不幸であるなら今ごろ彼は何十回も死んでいる

上条がげんなりしていると横にいる看護婦から電話が差し出された

いやゝな予感を感じつつ受け取った

『君はまゝた怪我をしているのかい？』

うわっ、と思わず声に出してしまった

『その反応はちょっと傷つくとは思わないかい？ まあ、いいか。』

とりあえず本題に入るけど、学園都市に戻ってきてね』

「

.....は？」

しばらくの沈黙の後上条が素っ頓狂な声を上げた

『いや、だからね？　いくら学園都市の協力機関といってもさすがに他所の病院で君らみたいな学園都市の住人をみせるわけにはいかないんでね』

「えー、いやそりゃないよー」

『とっている割にはそこまできっかりした様子はないね？　じゃあ、さっさと帰ってきてね』

「おい！　俺はまだ何も楽しんでなんだよ！？　食ったといえは……  
…パスタ一回食っただけで何にも食ってねええええええー！！」

『パスタが一回食べただけで良しとしなよ。つべこべ言わずに帰って来い。以上』

ブツツと電話が切れた

「あー……さようなら、俺の楽園<sup>パカンス</sup>」

司教へピシヨップ (後書き)

カット祭り (笑)

オリキャラもまともに姿を見せずにリタイア (笑)

モブキャラってレヴェルじゃねえぞ!! w w w

複雑<sup>フラグ</sup>っぽいのを言っというて実はフラグじゃないから未回収 (笑)

最後のほうは雑さの極み (笑)

解説編 その3 (前書き)

今回は、三十一話で出てきたオリジナル霊装や、幻想殺しのオリジナル進化能力を解説していきたいと思います

## 解説編 その3

『賢者の子供達』

杖形の『接触の原理』を応用した霊装。これに触れた者の衣服に法王級の『歩く教会』の加護が得られる代わりに触れた者の魔力が勝手に練られ、体に激しく魔力が流れるために激しい疲労に襲われる。飽くまで“性質”であるため、イギリス清教によって魔力を練れない細工をされた禁書目録インデックスや、幻想殺し（イマジンプレイカー）によって魔力が通せない上条当麻は疲労を感じずに衣服に法王級の『歩く教会』の加護が得られる。ただし、上条の場合は右手に手袋など衣服と判定されたものを装着するとその加護を得られない。学園都市の能力者でも効果があるため、能力者がこの杖に触れると致命傷を負う。そのため、学園都市の能力者で唯一この杖を使うことができるのは上条となる。

この霊装を作るにあたって製作者に求められるのは『10人単位で子供を殺すこと』ペドフィリア。つまり製作者は少児性愛者などの猟奇殺人鬼サイコキラーなどがほとんど。歴史上でこの霊装を製作可能とされた人物は『ジル・ド・レイ』、『アンドレイ・チカチーロ』、『ジョン・ウェイン・ゲイシー』、『アルバート・フィッシュ』と精神異常者サイコパスなどがある。

最古の『賢者の子供達』を製作したのは錬金術師でもある『ジル・ド・レイ男爵』。

必要な材料は、自分の犠牲者を殺した凶器ナイフ、そのナイフと同じ材質の金属（凶器ナイフ以外の場合は銀で代用可能）、柳の木。大量の人の命を必要とする賢者の石の劣化版のようなもので、防御の力は絶大だが、人を復活させることも、どんな病気も治せることなどにはできない。活発で人を引っ張りまわす子供の魂を使う故に魔力が勝手に流れるという性質ができた。ちなみに何故防御力に特化しているのかというと、子供達は生命力の加護が強いため。

余談だが、現在インデックスに使われている杖の犠牲者の子供の魂



は喜んでいる。

インデックスの使っている杖の製作者はかつて『赤マント』と呼ばれた殺人鬼。犠牲者はおよそ350人

『幻想否定（スキル「ストップパー」）』

上条が気づいた幻想殺し（イメージブレイカー）の機能の一つ。

幻想殺しの仕組みは右手から何かしらの不思議な力が漏れ出て、その力が異能の力と反応して相殺されることで消える。その力を抑えることで、上条がかつて竜王ドラゴンの殺息を反らしたように不定形の異能の力を跳ね返したり反らしたりすることができ、触ると危険な魔術的な霊装などの異能の力の影響を受けずに短時間だけ持ち運べたりもできる。あえて打ち消しきらずに異能の力を受け止めることで『牛の刻参り』（藁人形）などの接触の原理に基づく『感染呪術』の術者の居場所を逆探知することもできる。

ただし、これらは上条の仮説であるため、実際にそうなのかは実際に実行しなければならぬ。

既に気づいているアレクスター・クロウリーは、上条がそういった理論を構築することで本人の『自分だけの現実』パーソナルリアリティ（異能ではない）の干渉によって実際にそうなることを証明している。

解説編 その3 (後書き)

一度こういうオリジナル霊装や能力みたいな設定をやってみたかったんですよ(笑)

独自の解釈が混じっているけどそこは多めに見てやってくださいw  
ww

## サブストーリー 罪人へギルト (前書き)

youtubeでみた『ここがおかしいよ日本人』でアフリカの人と中韓の人の討論で中国人の人が「日本人がやったことは一生残る」みたいな事を聞いて思いついたネタです。

私はいわゆる『ネトウヨ』ですが、これは言った中国人に言うのではなく、「罪は一生残る」という言葉に言います。

## サブストーリー 罪人へギルト

9月30日 学園都市

一方通行は現在迷子の打ち止めを探している。  
アクセラレータ ラストオーダー

彼は8月31日に脳にダメージを追い、今では能力使用のための演算は妹達に任せている。  
シスターズ

しかし、どこかの世界と違って彼は歩き方はぎこちないものの、杖は突いていない。

打ち止めを探して歩いていると、前から少女が歩いてきた。

学園都市第三位の『超電磁砲』レールガンこと御坂美琴 みさか みこと ではなく、少し違うが彼女の軍用クローンである妹達の誰かだ

彼はできれば会いたくなかった。

御坂美琴にも、妹達にも……

気づかないフリをしてすれ違おうとしたが、

「お久しぶりですね。と美静は愛想笑い（笑）で挨拶します」

その『美静』と名乗った妹達は彼の前に立ち塞がった

「何のようだ……」

「別にこれと言った用はありません。と美静はぶつちやけます」

「その『美静』ってなア何なんだ？」

一方通行が怪訝そうな顔で聞いた

「これは私の現在の家族がつけてくれました。と美静は小躍りするのを抑えながら答えます」

「そうかア。良かったじゃねえか、それじゃア俺は忙しィからゴキゲンヨン様」

似合わないギャグをかましながら彼女の横を通り過ぎる彼を彼女は

「ちょっと質問したいことがあるのですが」

呼び止めた。

「あなたは何故私達と遭遇することを恐れるのですか？ と美静は確かめの質問を投げかけます」

一方通行は立ち止まり、一呼吸置いて

「多分……お前の考えていることは合ってると思っぜ……」

搾り出すように答えた

「そうですか……………あなたはまだ気にしているのですね」

「あア……………」

先ほどよりも重そうな足取りで彼は再び歩き出そうとする

なのに、

「美静は新しい家族達と生活して色々なことを学びました」

「……………」

美静は彼を逃がしてくれない

美静のそれを聞いてしまったらダメ

と彼はわかってはいる。

なのに彼の足はそれ以上は上がらなかった。それどころか上げようとした足は沈んでゆく

そして固まった。足がまるで釘でも打ちつけられたかのように動かず、痛い。

足は震えてはいないのに足の震えが止まらない…………

「彼は非常に多くの人の命を救ってきました。今も誰かの命を背負っています」

ダメだ…………聞いたらダメだ…………

「にもかかわらず彼はお礼や謝罪を拒否し続けています。そんな彼を見て私は知りました」

耳をふさげ

怒鳴って黙らせる

「一方通行…………人は何故『謝り』『感謝し』そして『赦される』と  
アクセラレータ  
思いますか？」

「…………ア…………ま…………エ」

搾り出せ。『黙れ』という言葉でもいい

「それは本当に感謝している、本当に反省しているという」とを相手に伝えるためです」

そして彼は何も言えなくなる

「人が犯した『過ち』や『借り』はたとえどんなことがあるうとも消えることはありません。『借り』を返すことはただその人と同じ高さになること、ただお互いの『借り』に感謝するだけです。罪は一生消えないなんて当たり前のことを言っただけです。一生頭を抱えたり、一生恨んだりするのは間違ったことです。なぜなら『罪』や『借り』というのは一生消えないのですから」

美静が一方通行の前へ移動する

「『弱い人間ほど相手を赦すことはできない。人を赦してあげることがが本当の強さの証だ』これはある『父親』の受け売りです。今ならどんな人にもこの言葉の意味をわからせられる自信があります。お姉さま（オリジナル）や、上位個体は強いお方です。きっといつかあなたを『赦す』はずですよ」

「…………でも」

「納得できないと？　ならこっつしましよっ」

彼がやっと搾り出した声も一蹴されてしまっ

「美静は強くなりたい、そのためにあなたを『赦し』ます。と美静は宣言します」

彼の退路を絶つために、

一方通行は彼女は少々卑怯だ（ズルい）と思った。

自分は妹達かのじゆのことを否定できないと知っておきながら彼女はそれを利用して自分の退路を爆破した。

ゆっくりと上げた彼の顔を見たのはM N Wを切った美静ただ一人だけである。

「だからあなたは歩いてください。自分の犯した過ちなどで葛藤なんかしてサボってないでさっさと前に進んでください。と美静は一喝します」

彼女は彼に『釘抜き』渡した。

彼を縛るその杭を抜くことができる『釘抜き』を

「あア」

やっと戻ってきた彼の声

彼が一番最初に抜いたのは『彼の足を固定していた原因』という細い、細い、釘だった

だがそれで良い

非力な彼に今すぐ『杭』を抜けと言つのは酷な話だ。いつか抜けばいい。

ゆっくり



ゆっくり

少しずつ……

返事をして歩き出した彼の背中を見つめる美静の顔には妹達シスターズとは思えないほどキレイで優しい微笑がでていた

一方、彼の足取りはこれまで打ち止めと過ごしてきた62日間の中で一番しっかりしていた

私わたくし、上条美静かみじょうみしずはあなたのそのふざけきつた幻想をぶち壊すことはできませんが、それを手伝ってあげることとはできません。と美静は自分を不甲斐ないと思いつつあなたにエールを心の中で送ります。

サブストーリー 罪人へギルト (後書き)

うーん、……

なんか、微妙……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3996u/>

---

とあるIFの幻想殺し

2012年1月9日02時50分発行